

科目名	観光・地域政策演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

我が国では地域の観光振興について多くの検討が行われているものの成功事例がまだ多くはない。そこで、国内外の観光振興に関する現状や事例を検討し、課題の所在や問題意識等を高めていく。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

発表、グループディスカッション、レポート作成、事例研究等により各自、受動的な講義だけではなく、考えながら観光振興について学んでいく。

本講義は、調査研究機関で観光ビジネスに関する企業支援や調査等を行っていた実務経験のある教員が担当し、観光ビジネスの実務経験を活かし授業を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

本講義は、シンクタンクで旅行・観光関連、地域振興の計画策定や調査研究実績のある教員が、その実績や経験を活かし、授業を実施します。各講義の課題に関しては、授業内で解説講義等するとともに関連資料等を配布します

■授業計画

以下の内容を予定する。

- ①ガイダンス
- ②観光振興、地域政策について（基本）
- ③観光振興、地域政策について（応用）
- ④事例研究（国レベル）（基本）
- ⑤事例研究（国レベル）（組織）
- ⑥事例研究（国レベル）（政策等）
- ⑦事例研究（県・地域レベル）（基本）
- ⑧事例研究（県・地域レベル）（組織）
- ⑨事例研究（県・地域レベル）（政策等）
- ⑩事例研究（市町村レベル）（基本）
- ⑪事例研究（市町村レベル）（組織）
- ⑫事例研究（市町村レベル）（政策等）
- ⑬事例研究（地域産業）（基本）
- ⑭事例研究（地域産業）（応用）
- ⑮観光振、地域政策興研究に関するまとめ・整理

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

次年度において、観光に関する論文を書く上で必要な参考文献や、調査方法、資料についてその構成や内容、記述方法、分析方法等について基本的事項等を学ぶ。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

以下のうち、特に①、②の項目に関して文献からその知識や考える能力を得る。

- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- ②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

発表及び各時間作成・提出のレポート；50%

最終レポート；50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜指示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

新聞やTV等関連する事項について日頃、興味を持って接し学ぶこと（事前学習）。
授業のなかで得られた知識や項目について、より深く図書館やネットで調べ、整理しておくこと（事後学習）。

【必要な時間】

概ね事前・事後各2時間を想定する。

■その他

進行その他詳細は、担当教員の判断と受講者の希望により実情に即して対応する。

科目名	観光研究テーマ演習
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	齊藤 巧弥

■講義の目的および概要

本講義の目的は、修士2年次の「修士論文指導演習Ⅰ・Ⅱ」の準備として、各自の研究課題、問題意識、研究の問い、研究方法（フィールドや対象者、データ収集、データ分析の手法）、結果の表象についての書式を学ぶことである。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

・授業形態

対面、遠隔、または両方を組み合わせたハイブリッド型の授業を行う。遠隔やハイブリッド型の授業では、遠隔会議システム「Zoom」、学習管理システム「manaba」、出席登録・アンケートアプリ「Respon」などを使用する。

・授業内容

論文の構成や書式についての講義を行う。その後、各自の研究計画書を見直し、修正する。さらに、関連の先行事例や研究、文献調査、パイロット調査などを行い、研究計画書をブラッシュアップする。

教員からの講義と指導だけでなく、院生同士のディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなども適宜取り入れる。

観光やビジネスの実務経験を有する担当教員は、関連領域の実務経験を活かして、実務専門家や分野横断型のレクチャーおよびフィールドワークを行う可能性がある。

【課題に対するフィードバックの方法】

各自の研究テーマを決定し、論文の構成、書式、内容、文章表現、論述の仕方などについて、適宜意見交換を通じた助言や指導を行う。

■授業計画

- ①ガイダンス（自己紹介、研究テーマや計画書の共有等）
- ②論文の書き方1（講義）
- ③論文の書き方2（講義）
- ④論文の書き方3（講義）
- ⑤研究計画の精査1（発表・ディスカッション）
- ⑥研究計画の精査2（発表・ディスカッション）
- ⑦研究計画の精査3（発表・ディスカッション）
- ⑧先行研究・関連文献調査1（発表・ディスカッション）
- ⑨先行研究・関連文献調査2（発表・ディスカッション）
- ⑩先行研究・関連文献調査3（発表・ディスカッション）
- ⑪研究計画の再構築1（発表・ディスカッション）
- ⑫研究計画の再構築2（発表・ディスカッション）
- ⑬研究計画の再構築3（発表・ディスカッション）
- ⑭研究計画書修正版の発表
- ⑮研究計画書修正版に対するフィードバックとまとめ

※受講生の希望や授業の進捗によって順序や内容を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

適切な構成と書式に基づき研究計画書を作成・修正できる。
 研究の背景について事実・根拠に基づき日本語で説明できる。
 先行事例や先行研究の文献・資料を調べて入手できる。
 先行研究レビューの結果について成果と課題を要約できる。
 研究目的や研究の問いについて日本語で論理的に説明できる。
 先行事例や先行研究に基づき研究方法を調べることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光研究テーマ演習は、観光学研究科DP（ディプロマ・ポリシー）の下記3つに関連する。

- (1) 観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- (2) わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- (3) 高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

授業内課題、レポート：30%
 プレゼンテーション：40%
 質疑応答、ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】
適宜必要な資料を配布する。

【参考文献】
適宜必要な資料を配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】
学期末の時点で修士論文の要旨を完成させることを目指し、研究計画書の修正、修士論文の目次案の作成、草稿執筆に向けて段階的に進めていく。

【必要な時間】
予習・復習の時間はそれぞれ4時間を目安とする。

■その他

- ・新型コロナウイルス感染予防策のため、対面、遠隔、ハイブリッド型の授業を組み合わせて授業を行う。担当教員により、授業形態や評価方法などが変わる可能性がある。詳しくは授業の中で説明する。
- ・授業でも段階的に取り入れるが、社会状況に応じて柔軟にさまざまなツールを使いこなす意欲を持つこと。

科目名	観光研究テーマ演習
開講期・単位	1年 春秋学期・必修 2単位・演習
担当者	呉 泰均、池見 真由、田村 こずえ

■講義の目的および概要

本講義の目的は、修士2年次の「修士論文指導演習Ⅰ・Ⅱ」の準備として、各自の研究課題、問題意識、研究の問い、研究方法（フィールドや対象者、データ収集、データ分析の手法）、結果の表象についての書式を学ぶことである。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

・授業形態

対面、遠隔、または両方を組み合わせたハイブリッド型の授業を行う。遠隔やハイブリッド型の授業では、遠隔会議システム「Zoom」、学習管理システム「manaba」、出席登録・アンケートアプリ「Respon」などを使用する。

・授業内容

論文の構成や書式についての講義を行う。その後、各自の研究計画書を見直し、修正する。さらに、関連の先行事例や研究、文献調査、パイロット調査などを行い、研究計画書をブラッシュアップする。

教員からの講義と指導だけでなく、院生同士のディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなども適宜取り入れる。

観光やビジネスの実務経験を有する担当教員は、関連領域の実務経験を活かして、実務専門家や分野横断型のレクチャーおよびフィールドワークを行う可能性がある。

【課題に対するフィードバックの方法】

各自の研究テーマを決定し、論文の構成、書式、内容、文章表現、論述の仕方などについて、適宜意見交換を通じた助言や指導を行う。

■授業計画

- ①ガイダンス（自己紹介、研究テーマや計画書の共有等）
- ②論文の書き方1（講義）
- ③論文の書き方2（講義）
- ④論文の書き方3（講義）
- ⑤研究計画の精査1（発表・ディスカッション）
- ⑥研究計画の精査2（発表・ディスカッション）
- ⑦研究計画の精査3（発表・ディスカッション）
- ⑧先行研究・関連文献調査1（発表・ディスカッション）
- ⑨先行研究・関連文献調査2（発表・ディスカッション）
- ⑩先行研究・関連文献調査3（発表・ディスカッション）
- ⑪研究計画の再構築1（発表・ディスカッション）
- ⑫研究計画の再構築2（発表・ディスカッション）
- ⑬研究計画の再構築3（発表・ディスカッション）
- ⑭研究計画書修正版の発表
- ⑮研究計画書修正版に対するフィードバックとまとめ

※受講生の希望や授業の進捗によって順序や内容を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

適切な構成と書式に基づき研究計画書を作成・修正できる。
 研究の背景について事実・根拠に基づき日本語で説明できる。
 先行事例や先行研究の文献・資料を調べて入手できる。
 先行研究レビューの結果について成果と課題を要約できる。
 研究目的や研究の問いについて日本語で論理的に説明できる。
 先行事例や先行研究に基づき研究方法を調べることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光研究テーマ演習は、観光学研究科DP（ディプロマ・ポリシー）の下記3つに関連する。

- (1) 観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- (2) わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- (3) 高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

授業内課題、レポート：30%
 プレゼンテーション：40%
 質疑応答、ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】
適宜必要な資料を配布する。

【参考文献】
適宜必要な資料を配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】
学期末の時点で修士論文の要旨を完成させることを目指し、研究計画書の修正、修士論文の目次案の作成、草稿執筆に向けて段階的に進めていく。

【必要な時間】
予習・復習の時間はそれぞれ4時間を目安とする。

■その他

- ・新型コロナウイルス感染予防策のため、対面、遠隔、ハイブリッド型の授業を組み合わせて授業を行う。担当教員により、授業形態や評価方法などが変わる可能性がある。詳しくは授業の中で説明する。
- ・授業でも段階的に取り入れるが、社会状況に応じて柔軟にさまざまなツールを使いこなす意欲を持つこと。

科目名	観光研究テーマ演習
開講期・単位	1年 春秋学期・必修 2単位・演習
担当者	有澤 恒夫

■講義の目的および概要

本講義の目的は、修士2年次の「修士論文指導演習Ⅰ・Ⅱ」の準備として、各自の研究課題、問題意識、研究の問い、研究方法（フィールドや対象者、データ収集、データ分析の手法）、結果の表象についての書式を学ぶことである。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

・授業形態

対面、遠隔、または両方を組み合わせたハイブリッド型の授業を行う。遠隔やハイブリッド型の授業では、遠隔会議システム「Zoom」、学習管理システム「manaba」、出席登録・アンケートアプリ「Respon」などを使用する。

・授業内容

論文の構成や書式についての講義を行う。その後、各自の研究計画書を見直し、修正する。さらに、関連の先行事例や研究、文献調査、パイロット調査などを行い、研究計画書をブラッシュアップする。

教員からの講義と指導だけでなく、院生同士のディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなども適宜取り入れる。

観光やビジネスの実務経験を有する担当教員は、関連領域の実務経験を活かして、実務専門家や分野横断型のレクチャーおよびフィールドワークを行う可能性がある。

【課題に対するフィードバックの方法】

各自の研究テーマを決定し、論文の構成、書式、内容、文章表現、論述の仕方などについて、適宜意見交換を通じた助言や指導を行う。

■授業計画

- ①ガイダンス（自己紹介、研究テーマや計画書の共有等）
- ②論文の書き方1（講義）
- ③論文の書き方2（講義）
- ④論文の書き方3（講義）
- ⑤研究計画の精査1（発表・ディスカッション）
- ⑥研究計画の精査2（発表・ディスカッション）
- ⑦研究計画の精査3（発表・ディスカッション）
- ⑧先行研究・関連文献調査1（発表・ディスカッション）
- ⑨先行研究・関連文献調査2（発表・ディスカッション）
- ⑩先行研究・関連文献調査3（発表・ディスカッション）
- ⑪研究計画の再構築1（発表・ディスカッション）
- ⑫研究計画の再構築2（発表・ディスカッション）
- ⑬研究計画の再構築3（発表・ディスカッション）
- ⑭研究計画書修正版の発表
- ⑮研究計画書修正版に対するフィードバックとまとめ

※受講生の希望や授業の進捗によって順序や内容を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

適切な構成と書式に基づき研究計画書を作成・修正できる。
 研究の背景について事実・根拠に基づき日本語で説明できる。
 先行事例や先行研究の文献・資料を調べて入手できる。
 先行研究レビューの結果について成果と課題を要約できる。
 研究目的や研究の問いについて日本語で論理的に説明できる。
 先行事例や先行研究に基づき研究方法を調べることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光研究テーマ演習は、観光学研究科DP（ディプロマ・ポリシー）の下記3つに関連する。

- (1) 観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- (2) わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- (3) 高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

授業内課題、レポート：30%
 プレゼンテーション：40%
 質疑応答、ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】
適宜必要な資料を配布する。

【参考文献】
適宜必要な資料を配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】
学期末の時点で修士論文の要旨を完成させることを目指し、研究計画書の修正、修士論文の目次案の作成、草稿執筆に向けて段階的に進めていく。

【必要な時間】
予習・復習の時間はそれぞれ4時間を目安とする。

■その他

- ・新型コロナウイルス感染予防策のため、対面、遠隔、ハイブリッド型の授業を組み合わせて授業を行う。担当教員により、授業形態や評価方法などが変わる可能性がある。詳しくは授業の中で説明する。
- ・授業でも段階的に取り入れるが、社会状況に応じて柔軟にさまざまなツールを使いこなす意欲を持つこと。

科目名	観光産業・事業特殊講義
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	呉 泰均

■講義の目的および概要

本講義では、観光産業・事業あるいはその関連テーマで論ずるときに必要な知見と方法論を習得するとともに、どのような課題を関連づけて検討を加えることができるかを考えます。また、論文・文献を批判的に読解していくことで、分析の上でどのような問題が生ずるかについて認識を深めていきます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

- ・関連分野の基礎知識について説明する「講義形式」の授業と関連するテーマについてプレゼンテーションやディスカッションを行う「演習形式」の授業を組み合わせ実施します。
- ・初回授業時に授業の進め方などについてガイダンスを行います。参加者の数や学習ニーズに応じて、進め方を調整します。

【課題に対するフィードバックの方法】

- ・毎回授業の冒頭に課題の解説およびフィードバックを行うとともに、前回の授業内容及び課題に関する質問や意見などを受け付けます。
- ・授業外学習の際は、電子メールや学習管理システム（manaba）などを活用してフィードバックを行います。

■授業計画

※Notice：進度によって変更や調整を行います。

- ① ガイダンス（授業目標・計画・評価等について）
- ② 観光を取り巻く現状と課題
- ③ ポストコロナ時代の観光産業・事業を考える1
- ④ ポストコロナ時代の観光産業・事業を考える2
- ⑤ 観光マーケットと戦略1
- ⑥ 観光マーケットと戦略2
- ⑦ アドベンチャーツーリズム1
- ⑧ アドベンチャーツーリズム2
- ⑨ アドベンチャーツーリズム3
- ⑩ アドベンチャーツーリズム4
- ⑪ 精読と発表・議論1
- ⑫ 精読と発表・議論2
- ⑬ 精読と発表・議論3
- ⑭ 精読と発表・議論4
- ⑮ 全体のまとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・ポストコロナの観光復興に向け、中長期的な滞在者やリピーターの増加や地域コンテンツの創出が模索されるなか、復活のカギとして世界的に注目されているアドベンチャーツーリズムの概念や現状を理解できることを目指します。
- ・北海道におけるアドベンチャーラベルの特徴や課題を客観的にとらえ、多角的に考えるための知見を習得し、分析を行うための基礎的能力を確立することを目標とします。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1) 専門知識・技能を活用する力
 (DP3) 課題を発見し、解決する力
 (DP6) 社会に貢献する姿勢

■成績評価基準と方法

主として「プレゼンテーション（40%）＋学期末のレポート（40%）」によりますが、平常の授業参加の状況（20%）を加えて、総合的に評価します。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特定の教科書は用いません。毎回ハンドアウトを配布します。

【参考文献】

必要に応じて、授業の中で紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

予習については、必要に応じて、指定されたテーマについて調べること、指定された関連文献を読むこと、配布する資料を読むこと、指定された問題を考えること、などを事前に指示します。復習については、毎回授業中に説明する用語や学習ポイントなどを理解しておくことが重要です。

【必要な時間】

前回の授業内容の復習は2時間、次回の授業内容の予習は2時間をを要します。

■その他

授業初回時に授業の進め方、取り上げるテーマなどを説明しますので、受講希望者は必ず出席してください。

科目名	観光産業・事業文献演習
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

観光産業や観光事業領域に関する文献を読み込み、観光産業の現状や課題、今後の在り方について研究することを目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

観光産業や事業に関連する文献を熟読した上で、レジメやパワーポイントを作成、発表し、討議する。

本講義は、調査研究機関で観光ビジネスに関する企業支援や調査等を行っていた実務経験のある教員が担当し、観光ビジネスの実務経験を活かし授業を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

本講義は、シンクタンクで旅行・観光関連の調査研究実績のある教員が、その旅行観光関連実務の実績や経験を活かし、授業を実施します。各講義の課題に関しては、授業内で解説講義等するとともに関連資料等を配布します

■授業計画

- ①ガイダンス
(関係論文等に説明)
 - ②交通事業Ⅰ(航空)
 - ③交通事業Ⅱ(鉄道)
 - ④交通事業Ⅲ(バス等)
 - ⑤宿泊事業Ⅰ(温泉旅館)
 - ⑥宿泊事業Ⅱ(ホテル)
 - ⑦宿泊事業Ⅲ(リゾート関連)
 - ⑧旅行会社Ⅰ(国内)
 - ⑨旅行会社Ⅱ(海外)
 - ⑩旅行会社Ⅲ(着地型)
 - ⑪観光情報産業Ⅰ(ガイドブック、出版)
 - ⑫観光情報産業Ⅱ(インターネット関連)
 - ⑬観光情報産業Ⅲ(映像、TV、映画関連)
 - ⑭日本の観光産業・事業の現状と課題
 - ⑮世界の観光産業・事業の現状と課題
- 履修者の要望によっては、上記のなかでも重きをつけることを想定している。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光産業や事業領域の文献についての理解と研究テーマの設定、目次作成に向けた例示的指導を目標とする。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

以下のうち、特に①、②の項目に関して文献からその知識や考える能力を得る。

- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- ②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

発表及び各時間作成・提出のレポート；50%
最終レポート；50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜指示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

新聞やTV等関連する事項について日頃、興味を持って接し学ぶこと（事前学習）。
授業のなかで得られた知識や項目について、より深く図書館やネットで調べ、整理しておくこと（事後学習）。

【必要な時間】

概ね事前・事後各2時間を想定する。

■その他

進行その他詳細は、担当教員の判断と受講者の希望により実情に即して対応する。

科目名	観光情報メディア演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	杉江 聡子

■講義の目的および概要

この授業では、様々な研究領域のアプローチで、現代社会、メディア、観光の關係に注目します。関連領域の知識や理論について調査し、理解したうえで、ディスカッションや作品制作を通して、現代社会におけるメディアと観光の新たな可能性を探索することを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

●授業形態

対面、遠隔、または両方を組み合わせたハイブリッド型の授業を行います。遠隔やハイブリッド型の授業では、遠隔会議システム「Zoom」、学習管理システム「manaba」、Microsoft365「Teams」などを使用します。メタバースの開発では主に「Spatial」とSketchfabなどのオンラインリソースを使用します。

●授業内容

観光メディア論や現代観光学に関する文献を読み、内容を要約し、日本語で発表します。また、発表内容に基づくディスカッションを行い、内容の理解を深めます。その上で、自身の研究関心を発見し、問いを立て、実際の調査（参与観察やインタビュー等）とデータ分析を行い、考察をまとめることを目指します。観光メディア産業での実務経験を有する教員が、コンテンツ開発の実際的な課題やスキルを用いて指導します。教員からの講義と指導だけでなく、院生同士のディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなども適宜取り入れます。学生の主体的かつ協動的な学びの態度が求められます。

【課題に対するフィードバックの方法】

授業で出した課題については、次回以降の授業でコメントや解説をします。オンライン課題については、学習管理システム「manaba」から回答や返信をします。研究デザインと実施の段階に入ったら、必要に応じて個別指導を行います。

■授業計画

- ①ガイダンス（自己紹介、研究関心の共有、ICT環境の確認等）
- ②観光の記号とメディア
- ③モバイルメディアとツーリズム
- ④ツーリズムとしての音楽フェス
- ⑤メディアとしての観光
- ⑥メタバースを用いた観光コンテンツの開発：企画
- ⑦メタバースを用いた観光コンテンツの開発：企画
- ⑧メタバースを用いた観光コンテンツの開発：ツールの使い方
- ⑨メタバースを用いた観光コンテンツの開発：実装
- ⑩メタバースを用いた観光コンテンツの開発：実装
- ⑪メタバースを用いた観光コンテンツの開発：実装
- ⑫メタバースを用いた観光コンテンツの開発：成果発表と相互評価
- ⑬観光研究の実践例について（ゲストレクチャー）
- ⑭観光研究の実践例について（ゲストレクチャー）
- ⑮最終課題の提出

※観光研究専門家によるゲストレクチャーは、スケジュール調整により実施時期を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・観光学や観光メディア論の理論や研究手法について日本語で説明できる。
- ・文献を読み、要点をまとめ、わかりやすい日本語で話す・書くことができる。
- ・人の発表を聞き、批判的思考に基づき質問やコメントができる。
- ・授業で学んだ理論やスキルを自分の研究と結び付け、研究をデザインすることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

この授業は、観光学研究科ディプロマポリシーのうち
①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
に該当します。

■成績評価基準と方法

出席と授業への取り組み、発表内容と完成度、質疑応答やディスカッションへの参加2023(令和5)4月1日
状況等に基づき総合的に評価します。

- ・授業内活動への取り組み、課題提出と完成度（30%）
- ・質疑応答とディスカッション（30%）
- ・発表内容と完成度（40%）

■テキスト・参考文献

『観光メディア論』（「シリーズ」メディアの未来）（遠藤英樹他著，2014，ナカニシヤ出版）

必要に応じてプリント等の資料を配布します。

【参考文献】

『現代観光学』（ワードマップ）（遠藤英樹他著，2019，新曜社）

■授業外学習

【具体的な内容】

授業では主に発表とディスカッションを行います。文献を読み、疑問点をまとめる等、事前の準備を十分に行ってください。自身の研究関心と関連する領域・分野について自主的に先行研究や事例を調べるなどしてください。

【必要な時間】

文献を読む時間を確保してください。発表準備がある場合、発表資料をまとめるのに数時間から数日程度必要です。

■その他

授業でも段階的に取り入れるが、社会状況に応じて柔軟にさまざまなプラットフォーム、アプリ、ツールなどを使いこなす意欲を持つこと。

科目名	観光振興特殊講義
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

観光振興に関して、法制度・観光振興計画を総合的・体系的に学習します。観光振興における注目すべきテーマを抽出・着眼し、各テーマ毎に観光振興の留意事項・着眼点について学習します。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

基本的に講義形式で行いますが、毎回テーマを変えた教材を配布するとともに、教員・学生間で議論を深めます。またレポートもしくはプレゼンテーションを学生に行ってもらい、議論を行い理解を深めます。

本講義は、コンサルタント会社において観光振興の実務経験のある教員が担当し、実践的な知識とスキルを身につけられる講義とします。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題はレポート形式またはプレゼンテーション形式によりますが、発表後に教員・学生間で議論を行い、内容や構成について議論します。

■授業計画

以下の予定で実施する予定である。

- ①ガイダンス
- 【観光施策・計画全般】
- ②観光に関わる法制度・計画の基本的枠組み
- ③観光白書Ⅰ－観光統計
- ④観光白書Ⅱ－観光施策
- ⑤北海道における観光振興計画
- 【テーマ別観光振興】
- ⑥観光産業と観光振興
- ⑦景観形成と観光振興①
- ⑧景観形成と観光振興②
- ⑨地域協働と観光振興
- ⑩ICTと観光振興
- ⑪イベントと観光振興
- ⑫ものづくりと観光振興
- ⑬交通と観光振興
- ⑭広域連携と観光振興
- ⑮持続可能な観光振興の取り組み

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

基本的に留意しなければならない法制度および観光計画等を理解し、観光振興に関する研究を進める際に活用できるようにすることを目標とします。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識を有する学生に学位を授与する」に基づき、理論・実践両面で観光振興に対応できる能力を身につけます。

■成績評価基準と方法

レポートとプレゼンテーションで評価 各50点 * 2 = 100点

■テキスト・参考文献

【テキスト】

必要に応じてプリント等を配布します。

【参考文献】

テーマ等により、その都度指示します。

■授業外学習

【具体的な内容】

次回授業で検討するテーマについて関連情報等を収集し、予習を欠かさないこと。また観光関連の新聞記事や観光白書等を熟読し、観光の現状や課題について予習を欠かさないでください。

【必要な時間】

3時間/各授業

■その他

その他 授業では学生と教員間での議論をしますので、課題に対する自分なりの見解を持って授業に臨んでください。

科目名	観光振興文献演習
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

我が国では地域の観光振興について多くの検討が行われているものの成功事例がまだ多くはない。そこで、国内外の観光振興に関する文献を検討し、課題の所在や問題意識等を高めていく。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

発表、グループディスカッション、レポート作成、事例研究等により各自、受動的な講義だけではなく、考えながら観光振興について学んでいく。

本講義は、調査研究機関で観光ビジネスに関する企業支援や調査等を行っていた実務経験のある教員が担当し、観光ビジネスの実務経験を活かし授業を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

本講義は、シンクタンクで旅行・観光関連に係る地域振興の調査研究実績のある教員が、その実務の実績や経験を活かし、授業を実施します。各講義の課題に関しては、授業内で解説講義等するとともに関連資料等を配布します

■授業計画

以下の内容を予定する。

- ①ガイダンス
- ②観光振興文献について（基本）
- ③観光振興文献について（応用）
- ④文献研究（国レベル）（基本）
- ⑤文献研究（国レベル）（組織）
- ⑥文献研究（国レベル）（政策等）
- ⑦文献研究（県・地域レベル）（基本）
- ⑧文献研究（県・地域レベル）（組織）
- ⑨文献研究（県・地域レベル）（政策等）
- ⑩文献研究（市町村レベル）（基本）
- ⑪文献研究（市町村レベル）（組織）
- ⑫文献研究（市町村レベル）（政策等）
- ⑬文献研究（地域産業）（基本）
- ⑭文献研究（地域産業）（応用）
- ⑮観光振興文献研究に関するまとめ・整理

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光に関する論文を書く上で必要な参考文献や資料についてその構成や内容、記述方法、分析方法等について基本的事項等を学ぶ。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

以下のうち、特に①、②の項目に関して文献からその知識や考える能力を得る。

- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- ②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

各時間作成・提出のレポート；50%

最終レポート；50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜指示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

新聞やTV等関連する事項について日頃、興味を持って接し学ぶこと（事前学習）。
授業のなかで得られた知識や項目について、より深く図書館やネットで調べ、整理しておくこと（事後学習）。

【必要な時間】

概ね事前・事後各2時間を想定する。

■その他

進行その他詳細は、担当教員の判断と受講者の希望により実情に即して対応する。必要に応じ、ゲスト講師を招聘する場合がある。

科目名	観光宣伝研究
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	有澤 恒夫

■講義の目的および概要

観光業における宣伝広告の役割は、マーケティング活動の一つの要素として理解することが基本です。マーケティングとは企業の顧客・消費者やその市場を分析して、顧客が潜在的に求める欲求を探り出すことで既存顧客の満足度向上や新たな顧客の獲得につながる活動のことです。観光ビジネスはサービスや商品売って利益を上げることで成り立っていますので、顧客獲得につながるための活動であるマーケティングは、そのまま企業戦略であると言えるでしょう。宣伝広告とは、新聞や雑誌、ウェブサイト、TVなどのメディアを通じて、会社や商品の特徴などを顧客に広めるためのものです。「狭義の宣伝広告は、具体的には新聞やTVなどのメディアの広告枠を買い取って、そこに宣伝を載せるものです。すなわち費用を払って情報を載せてもらう宣伝広告を主な対象とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

従来、宣伝広告には大きく分けてマス広告・セールス・プロモーション広告・インターネット広告の3種類に分けて考えられました。しかし今や、デジタル化、ビッグデータを抜きには考えられません。とりわけ観光ビジネスでは、ICTを活用したマーケティングや広告宣伝をいかに効果的に行えるかが問われています。受講者は、講義で最近の事例を学ぶとともに実践的に宣伝広告を企画制作します。

【課題に対するフィードバックの方法】

各自の研究テーマの枠組み作成に生かす。

■授業計画

- ①マーケティング
- ②観光ビジネスとマーケティング活動
- ③ブランディング
- ④宣伝広告と広報
- ⑤マス広告
- ⑥セールス・プロモーション
- ⑦インターネット広告
- ⑧リスティング広告
- ⑨アフィリエイト広告
- ⑩アドネットワーク
- ⑪動画広告
- ⑫SNS
- ⑬宣伝広告の企画制作・発表1
- ⑭宣伝広告の企画制作・発表2
- ⑮宣伝広告の企画制作・発表3

注：計画は変更することがあります。ゲストスピーカーの招聘を予定しています。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光関連企業に関し、宣伝広告手法の知識を有し、適切な宣伝広告企画を立案することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「高度な専門職業人として要求される汎用技能を有する学生に学位を授与する」に基づき、観光宣伝に関する高度な専門職人として要求される汎用技能を身につける。

■成績評価基準と方法

中間レポート（30%）、宣伝広告制作・発表（30%）、最終レポート（40%）

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜必要な資料を配布します。

【参考文献】

適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】
研究論文・発表論文等の要旨・構成、および論文の完成に向けて学習を進めてください。

【必要な時間】
予習・復習の時間はそれぞれ2時間を目安とします。

■その他

科目名	観光調査法
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	杉江 聡子

■講義の目的および概要

この授業の目的は、観光研究に関連する人文学分野の基礎的な理論や概念、調査研究の方法論、データ分析と表象の手法などを学び、実践スキルを身につけることです。観光研究プロジェクトを通じて、調査計画、データ収集、データ分析、成果のまとめ方などについて実践的に学びます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

・授業形態

対面、遠隔、または両方を組み合わせたハイブリッド型の授業を行います。遠隔やハイブリッド型の授業では、遠隔会議システム「Zoom」、学習管理システム「manaba」、Microsoft365「Teams」などを使用します。メタバースの開発には、「Spatial」「Unity」及び必要な各種リソースを使用します。

・授業内容

観光研究プロジェクトに参加しながら、個人学習またはグループワークによる調査を計画、実施します。プロジェクトを通じて、テーマの背景を整理し、目的と問いを明確にし、研究方法と調査計画（現地調査、参与観察やインタビュー等）を立てます。一部、観光関連分野の専門家によるゲストレクチャー（ワークショップ型授業）を行います。観光コンテンツ開発の実務経験を有する教員が、コンテンツ開発の実際的な課題やスキルを用いて指導します。教員からの講義と指導だけでなく、学生同士のディスカッション、プレゼンテーション、グループワークなどが中心になるので、主体的かつ協調的な学びの態度が求められます。

【課題に対するフィードバックの方法】

授業中に出た課題や質問については、次回以降の授業でコメントや解説をします。オンライン課題については、学習管理システム「manaba」を通じて回答や返信をします。

■授業計画

- ①ガイダンス（シラバス確認、自己紹介、研究関心の共有等）
- ②社会調査法の基本（1）
- ③社会調査法の基本（2）
- ④博物館での調査、文化観光コンテンツの企画
- ⑤博物館での調査、文化観光コンテンツの企画
- ⑥メタバース開発：専門家によるワークショップ型授業①
- ⑦メタバース開発：専門家によるワークショップ型授業②
- ⑧メタバース開発：専門家によるワークショップ型授業③
- ⑨メタバース開発：設計と実装
- ⑩アンケート調査の準備
- ⑪成果物の中間発表（プレゼンテーションとアンケート調査）
- ⑫データ収集（7月1日・2日の大学祭の学科企画としてデータ収集）
- ⑬データ分析とまとめ
- ⑭最終成果の発表に向けた準備
- ⑮最終成果の発表と相互評価

※専門家（海外・遠隔）によるゲストレクチャーは、スケジュール調整により実施時期を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・観光研究に必要な調査の手法について理解し、実践できる。
- ・文献を読み、要点をまとめ、わかりやすい日本語で話す・書くことができる。
- ・人の発表を聞き、批判的思考に基づき質問やコメントができる。
- ・観光研究に必要な理論的・概念的枠組み、先行研究の成果と課題、研究方法、調査方法を自身の研究計画に反映できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

レジュメ発表と完成度（30%）
質疑応答とディスカッション（30%）
課題提出と完成度（40%）

2023(令和5)4月1日

■テキスト・参考文献

【テキスト】
必要に応じて資料を配布する。

【参考文献】
「観光調査のキーコンセプト」David Botterill, Vincent Platenkamp著、同友館発行

■授業外学習

【具体的な内容】
・授業では主に発表とディスカッションを行う。文献を事前に読み、疑問点をまとめる等、事前の準備を十分に行うこと。
・自身の研究関心と関連する領域・分野について自主的に先行研究や事例を調べ、研究計画書を改善すること。

【必要な時間】
文献を事前に読むために2時間程度必要。
発表準備がある場合、レジュメ作成に数時間から数日程度必要。

■その他

・初回ガイダンスは特に、遠隔授業の受講環境（通信や端末の環境、連絡方法等）を確認するので、必ず出席すること。
・授業でも段階的に取り入れるが、社会状況に応じて柔軟にさまざまなアプリやツールを使いこなす意欲を持つこと。

科目名	観光文化特殊講義
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

人びとの社会・経済・生活・環境と関係性がある観光について、文化とのつながりから学習し、理解を深めることを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

講義毎に指定した文献を熟読してもらい、レジュメを作成し、口頭発表をしてもらいます。また発表内容を基にディスカッションを行います。

【課題に対するフィードバックの方法】

文献を読み、内容のまとめと考察に関するレジュメおよび口頭発表を授業内で評価します。他の履修生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスも行います。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②観光と文化
- ③観光の世界史
- ④観光の日本史
- ⑤国民生活を豊かにする観光政策
- ⑥観光の社会・文化的効果
- ⑦観光と経済
- ⑧環境と調和する観光
- ⑨観光と地域社会
- ⑩持続可能な観光開発
- ⑪人間生活における余暇と観光
- ⑫自然と文化に対する観光の行動
- ⑬暮らしと交流に対する観光の行動
- ⑭教育・福祉と観光
- ⑮総括

※以上の構成で進める予定ですが、講義の進行具合や履修生の数などにより適宜変更することがあります。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

文化を観光と結び付けて捉える視点を養い、観光を取り巻く人間の行動や生活、社会、経済、環境などとの関係性を理解し、自分の言葉で説明することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP6) 社会に貢献する姿勢

■成績評価基準と方法

- 口頭発表・レジュメ：40%
- 課題レポート：30%
- ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

授業内で適宜指示します。

【参考文献】

- ・島川崇『新しい時代の観光学概論』ミネルヴァ書房、2020年
- ・前田勇編『新現代観光総論』学分社、2015年
- ・山下晋司編『観光文化学』新曜社、2007年
- ・北川宗忠編『観光文化論』ミネルヴァ書房、2004年

■授業外学習

【具体的な内容】

予習としては指定文献の熟読・レジュメの作成・口頭発表に向けた準備、復習としては授業での口頭発表後のディスカッション内容に基づく振り返り作業が必要です。

【必要な時間】

予習・復習はそれぞれ4時間を目安とします。

科目名	観光文化文献演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

観光文化領域に関する文献を輪読し、受講生間で討議することで、観光文化領域の知見を深めることを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

毎回全員が指定された文献を熟読した上で、担当者がレジュメを作成し、口頭発表を行います。またこれを踏まえて、受講生全員で議論します。

【課題に対するフィードバックの方法】

事前に文献を読み、内容のまとめと考察に関するレジュメ・口頭発表を授業内で評価します。他の受講生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスも行います。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②持続可能な文化観光 1
- ③持続可能な文化観光 2
- ④観光経験を構築するガイド 1
- ⑤観光経験を構築するガイド 2
- ⑥構築される地域文化観光 1
- ⑦構築される地域文化観光 2
- ⑧観光経験の「ものがたり」 1
- ⑨観光経験の「ものがたり」 2
- ⑩観光と文化の真正性 1
- ⑪観光と文化の真正性 2
- ⑫エコ・ツーリズムと文化 1
- ⑬エコ・ツーリズムと文化 2
- ⑭生活文化と観光開発 1
- ⑮生活文化と観光開発 2

※以上の各テーマに基づく文献輪読を行う予定ですが、受講生の要望によっては別の文献に変更する可能性もあります。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

文献の読解力を養い、観光文化領域でどのような研究が蓄積されているかを理解し、自分の言葉で説明することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP6) 社会に貢献する姿勢

■成績評価基準と方法

文献の読解力：40%
レジュメ・口頭発表による学習内容の理解度：40%
ディスカッション・質疑応答：20%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

授業内で指示します。

【参考文献】

- ・Martha Honey (高梨洋一郎・真板昭夫監修)『エコツーリズムと持続可能な開発』くんぶる, 2016年
 - ・橋本和也『観光経験の人類学』世界思想社, 2011年
 - ・橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』世界思想社, 2003年
- その他、適宜文献を追加します。

■授業外学習

【具体的な内容】

予習としては指定文献の熟読・レジュメの作成・口頭発表に向けた準備、復習としては授業での発表後に振り返り作業が必要です。

【必要な時間】

予習・復習はそれぞれ4時間を目安とします。

科目名	観光文化研究演習
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

観光文化領域の専門研究を通して、様々な国際問題との関連から考察し、国内・海外の観光文化に関する研究動向について習熟することを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

毎回履修生全員が指定された文献を熟読した上で、担当者がレジュメを作成し、口頭発表を行います。これを踏まえて、全員で議論します。

【課題に対するフィードバックの方法】

各自文献で調べてきた内容に関するレジュメおよび発表を授業内で評価します。他の履修生とのディスカッションの中で解説やコメント、アドバイスも行います。

■授業計画

①オリエンテーション

②～⑧（前半）：

- ・島川崇『新しい時代の観光学概論－持続可能な観光振興を目指して』ミネルヴァ書房, 2020年
 - ・岩原紘伊『村落エコツーリズムをつくる人びと－バリの観光開発と生活をめぐる民族誌』風響社, 2020年
 - ・山下晋司『観光人類学の挑戦』講談社, 2009年
 - ・エドワード M. ブルーナー『観光と文化－旅の民族史』学文社, 2007年
 - ・堀川紀年・石井雄二・前田弘編『国際観光学を学ぶ人のために』世界思想社, 2003年
- のいずれか、または関連する分野のテキストを適宜決めて授業を進めます。

⑨～⑮（後半）：

- ・受講生が個々の関心に基づいた文献を調べて紹介する形をとります。

※日本観光研究学会学術論文集や日本国際観光学会論文集などから、観光文化領域において自らの関心と重なる文献を収集してもらいます。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光文化研究の概念、内容、水準、動向などに習熟し、関連する国際的な様々な問題の現状を理解した上で、自らの研究に反映することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP5) 能動的に学び続ける力

■成績評価基準と方法

- レジュメ・発表：40%
- 課題レポート：30%
- 質疑応答・ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

授業内で指示します。

【参考文献】

- ・島川崇『新しい時代の観光学概論－持続可能な観光振興を目指して』ミネルヴァ書房, 2020年
- ・岩原紘伊『村落エコツーリズムをつくる人びと－バリの観光開発と生活をめぐる民族誌』風響社, 2020年
- ・山下晋司『観光人類学の挑戦』講談社, 2009年
- ・エドワード M. ブルーナー『観光と文化－旅の民族史』学文社, 2007年
- ・堀川紀年・石井雄二・前田弘編『国際観光学を学ぶ人のために』世界思想社, 2003年
- ・その他、日本観光研究学会学術論文集や日本国際観光学会論文集など

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習としては、自身の研究内容に関する先行研究論文の収集・まとめを行う作業、事後学習としては、授業内で議論された内容を整理し復習する作業が必要です。

【必要な時間】

予習・復習はそれぞれ4時間を目安とします。

■その他

科目名	観光振興研究演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	有澤 恒夫

■講義の目的および概要

政府は、経済力回復の柱の一つとして、観光立国日本の実現を掲げ、国際観光の振興等に取り組んでいます（観光庁2008年設置）。地域における観光振興は、多くの自治体が「地方創生」、「地域振興」の根幹として位置付けています。観光振興は、経済面だけでなく、地域の社会的、歴史・文化的側面からもさまざまな取り組みが行われているのが現状です。この演習では、観光振興のあり方や実際の計画策定の方法論について理解することを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

基本的にゼミナール形式で行い、教員と学生間で議論を深めます。企業で、マネジメントやマーケティングの実務、DMOに関わった経験のある実務家教員が担当し、実践的な知識とスキルを身につけられる講義とします。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題はレポート形式またはスライド形式によります。発表後に議論を行い、一人ひとりの問題意識を深め課題解決力を鍛えます。

■授業計画

- ①はじめに
- ②観光振興政策
- ③地域創生と観光振興
- ④観光振興とNPO
- ⑤観光振興と企業
- ⑥?⑪事例研究、ディスカッション
- ⑫⑬中間発表
- ⑭⑮振興研究のまとめと発表

注：授業計画は変更することがあります。事例研究では、ゲストスピーカーの招聘を予定しています。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光振興に関する計画策定が出来るようになる。また、そのために必要な条件について把握することを目標とします。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識を有する学生に学位を授与する」に基づき、理論・実践両面で観光振興に対応できる能力を身につけます。

■成績評価基準と方法

テーマに関するレポート 30点、中間報告 30点、最終報告 40点

■テキスト・参考文献

【テキスト】

- ・特に指定しないが、必要な資料を配布します。

【参考文献】

- ・適宜紹介します。

■授業外学習

【テキスト】

- ・特に指定しないが、必要な資料を配布します。

【参考文献】

- ・適宜紹介します。

■その他

活発な議論を期待しています。自分なりの見解を持って授業に臨んでください。

科目名	観光産業・事業研究演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	黄 旭暉

■講義の目的および概要

観光産業・事業に関わる修士論文の完成を目的とし、修士論文のテーマの決め方、構成方法、先行研究のまとめ方等について指導を行い、作成させる。また、修士論文で使用する日本語表現、表、グラフの作成方法、引用の方法等についても指導を行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】論文作成の方法に関する教材を使用し、テーマの決め方を初めとする論文作成に必要な様々な事柄について指導を行うとともに、論文作成の手順に沿った課題を毎週提出し、作成させる。

【課題に対するフィードバックの方法】課題を提出した翌週の講義において、作成されたものについて検討、訂正を行う。

■授業計画

- ①講義についてのガイダンス
- ②修士論文アウトラインの作り方
- ③修士論文アウトラインの検討
- ④修士論文テーマの決め方
- ⑤修士論文テーマの検討
- ⑥研究の目的・方向性の検討
- ⑦修士論文構成の方法
- ⑧修士論文構成の検討
- ⑨先行研究の収集方法
- ⑩先行研究の検討
- ⑪先行研究の整理法・まとめ方
- ⑫先行研究のまとめの検討
- ⑬調査の方法
- ⑭調査のアウトライン・調査項目の検討
- ⑮成果報告

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】
修士論文の先行研究をまとめ上げる、調査項目を決定する

【卒業認定・学位授与の方針との関連】
修士論文作成能力

■成績評価基準と方法

課題提出及び課題に取り組む態度60%、成果報告40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】
特定のものはないが、その都度、必要な資料を配布する

【参考文献】
特定のものはないが、その都度、必要な資料を配布する

■授業外学習

【具体的な内容】
修士論文作成に沿った課題に対し、自分なりにまとめたり、訂正を行ったりする。

【必要な時間】課題作成に2時間程度を目安とする。

■その他

課題は必ず提出する。

科目名	観光目的地研究
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

魅力的な観光の目的地形成に関する地域・まちの特色を活かした計画論および現場に即した知識を習得します。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義は集中講義となるため、実施は概ね夏期休暇期間に実施します。
本講義は対象となる観光地に関する事前学習→フィールドワーク→事後学習の形式で行います。

【課題に対するフィードバックの方法】

受講生が準備・発表した課題について、教員・受講生間でのディスカッションを通して追加的な情報提供やアドバイスをを行い、受講生の理解を深めてもらいます。

■授業計画

以下の内容で授業は実施する計画である。なお、集中講義での実施予定である。

- ①ガイダンス
・ケーススタディ
観光目的地として展開する地域を基本とし受講生の研究テーマに関連する地域を選定し、実施する。
- ②③対象地域の概要（講義）
- ④⑤対象地域の観光特性（講義）
- ⑥～⑨主要観光エリアでの現地調査（フィールドワーク）
- ⑩～⑬観光関連機関での現地調査（フィールドワーク）
- ⑭⑮調査結果のまとめ、ケーススタディの総括（レポート・プレゼンテーション）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光目的地の計画論について理解し、現場に即した視座と知識を習得する。
設定する地域を事例として、観光地の形成過程や今後の観光動向を踏まえた地域・まちのあり方について、受講生自身の見解も含めて口頭や文章で説明することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識を有する学生に学位を授与する」に基づき、理論・実践両面で観光振興に対応できる能力を身につける。

■成績評価基準と方法

講義（提出物・ディスカッション）40点
フィールドワーク（現地調査・レポート・プレゼンテーション）60点

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜指示します。

【参考文献】

適宜指示します。

■授業外学習

【具体的な内容】

事前に配布する当該地域関連の文献や新聞記事等を読み、対象地域の現況や課題について把握することが必要です。事後学習としては、調べた内容を整理して分析する作業が必要です。

【必要な時間】

予習・復習ともに2時間を目安とします。

■その他

今年度は道東地域（2泊）でのフィールドワークを予定しています。学生の自己費用負担は、札幌と対象地域の往復交通費と訪問先での飲食代が想定されます。また、経費の一部は補助が出る可能性もあります。
なお、コロナやその他の学習環境の変化により、授業内容を変更する場合があります。

科目名	観光振興研究
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	田村 こずえ

■講義の目的および概要

観光振興の研究領域として持続可能な観光の観点から観光振興に関して実践的な思考力を身につけ、観光産業の発展のプロセスと観光を通じた地域づくりの実践知識の習得を目指します。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

観光振興に関する学生の関心事項等を、学生同士の討論を重視して講義を進めます。また、必要に応じてグループワークなどのディスカッション、地域社会等において実践的な学びの機会等により、能動的な学修を目指します。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題に対して、講義の中でフィードバックします。課題はレポート形式またはプレゼンテーション形式によりますが、発表後に教員・学生間で議論を行い、内容や構成について議論します。

■授業計画

- ①ガイダンス
- ②地域社会と観光の現状1
- ③地域社会と観光の現状2
- ④地域社会と観光の現状3
- ⑤観光産業の発展1
- ⑥観光産業の発展2
- ⑦観光産業の発展3
- ⑧観光を通じた地域振興1
- ⑨観光を通じた地域振興2
- ⑩観光を通じた地域振興の実践1
- ⑪観光を通じた地域振興の実践2
- ⑫観光振興の提案1
- ⑬観光振興の提案2
- ⑭観光振興の提案3
- ⑮発表・まとめ 総括

※以上の内容にて進める予定ですが、受講生の人数や進捗状況などにより適宜変更になる場合があります。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光振興の研究領域として観光産業の発展と観光を通じた地域づくりの実践知識の習得を目指す。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識」に基づき、観光振興の視点から観光産業の発展と観光を通じた地域づくりの実践知識の習得を目指す。

■成績評価基準と方法

- ・課題レポート：40%
- ・ディスカッション・発表：30%
- ・最終課題：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。

【参考文献】

受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

常日頃からニュース・新聞・文献・雑誌等から講義内容に関連する情報を収集するように心掛けてください。
講義ではしっかり傾聴してメモをとり、事後学修として講義の内容の理解に努める。
講義の課題や発表資料の作成及び準備等を行う。

【必要な時間】

受講生の興味関心や研究テーマなどに関連した資料の収集と収集した資料をまとめるための十分な時間を確保すること。

■その他

- ・観光と地域振興に関する情報を常日ごろから収集しておいてください。
- ・主体的に学修する態度で講義に臨んでください。
- ・フィールドワークや実習等の費用は、基本的に自己負担ですが、一部助成があります。

科目名	観光ビジネス研究
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	千葉 里美

■講義の目的および概要

現代における観光ビジネスは観光の多様化、IT社会の進展によりこれまでの中核的観光ビジネスである交通、旅行、宿泊ビジネスに加え、新興の観光ビジネスもみられる。
本授業ではこうした変容する現代社会と観光ビジネスを概観し、それらの現状と課題について理解することを目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

毎週与える専門書や先行研究についてレジュメを事前に提出してもらい、授業はその発表と出席者全員でのディスカッションを実施し、現状、課題、研究の視点などを確認する。

※遠隔授業の間は、ZOOMでの授業を45-50分程度し、その後、大学LMSシステムmanabaを使い、授業の復習、映像による理解、資料配布、次週の課題、課題の提出とする。

【課題に対するフィードバックの方法】

すべての課題について、授業内で適宜フィードバックする。

■授業計画

- ①ICTによる多様な予約システムのビジネスモデル
- ②エンターテインメント施設のビジネスモデル
- ③LCCビジネスモデル
- ④webビジネスモデル
- ⑤アライアンス提携による航空会社のビジネスイノベーション
- ⑥旅行会社のグローバル展開に向けたビジネスイノベーション
- ⑦経験価値マーケティング
- ⑧メディカルツーリズム
- ⑨交通需要マネジメント
- ⑩観光まちづくりプラットフォームと地域経営(DMO含む)
- ⑪コミュニティビジネス
- ⑫模倣と創造的適応におけるマーケティング
- ⑬コンテンツツーリズムによる観光需要創造戦略
- ⑭移動ビジネス
- ⑮発表・まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・「何が」中核的観光ビジネスなのかを説明することができる。
- ・中核的観光ビジネスが「どのような仕組みで成立しているのかを説明することができる。
- ・観光地における「伝統型ビジネス」と「新興観光ビジネス」について説明することができる。
- ・現代の観光ビジネスの動向・アプローチを理解し、現在や今後に向けての課題を説明することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

■成績評価基準と方法

レジュメ 5点×10回=50点
中間発表 20点
最終レポート 30点

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜資料の配布をする

【参考文献】

『令和4年度 観光白書』(2022年) 観光庁

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習:指示した文献や配布資料を熟読し、レジユメの作成・口頭発表の準備。
事後学習:課題のフィードバックを振り返り、その内容と重要用語をまとめる。

【必要な時間】

事前・事後学習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

観光に関する最近の動向を新聞などから理解しておく。
外国人留学生は、N1を取得するなど日本語習得にも力を入れ、発表、レポート、修士論文を書けるレベルにしておく。

科目名	観光文化研究
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

観光文化領域における世界各国の特徴やトレンドを幅広く習熟し、現代の観光文化研究の射程を理解することを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

観光文化領域の文献をピックアップし、履修生全員が熟読してくることを前提に、担当者がレジュメを用いてその内容を報告します。これを基にディスカッションを行い、観光文化領域について理解を深めます。

【課題に対するフィードバックの方法】

研究内容をまとめたレジュメおよび報告に対するコメントや解説を、授業中適宜行います。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②観光文化学とは
- ③情報資本主義と近代観光
- ④ふるさとを演じる観光
- ⑤文化装置としてのホテル
- ⑥人文観光資源
- ⑦世界遺産という文化資源
- ⑧ヘリテージツーリズム
- ⑨若者と観光のメディア史
- ⑩バックパッカー
- ⑪巡礼と観光
- ⑫パワースポット
- ⑬アニメの聖地
- ⑭ホストとゲスト
- ⑮まとめ

※以上の内容を扱う予定ですが、履修生の興味関心に応じて適宜内容を変更することがあります。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光文化領域の専門研究について把握し、説明することができる。
観光文化研究の現代的なトレンドやアプローチを理解し、これについて自分の意見や考えを述べることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP5) 能動的に学び続ける力

■成績評価基準と方法

- レジュメ・発表：40%
- 課題レポート：30%
- 質疑応答・ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

授業内で指示します。

【参考文献】

- ・機関紙『観光文化』日本交通公社
- ・高橋一夫・大津正和・吉田順一編『1からの観光』碩学舎、2012年
- ・山下晋司『観光学キーワード』有斐閣、2011年
- ・橋本和也『観光人類学の戦略』世界思想社、1999年 他

■授業外学習

【具体的な内容】

指定した文献を事前に熟読し、内容をまとめ、レジュメを作成して授業で報告するための準備作業に取り組みます。授業後には報告内容について出された意見や追加情報を整理する復習作業に取り組みます。

【必要な時間】

事前・事後学習ともに4時間程度を目安とします。

科目名	アウトドアレクリエーション計画
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

北海道におけるアウトドア・レクリエーションの現状と課題について、事例研究とフィールドワークを中心に理解することを目的とします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業は集中講義方式で行うため、夏季休業期間内に行います。また授業の流れは事前学習→フィールドワーク→事後学習の形式で行います。

本講義はアウトドアレクリエーションの実務経験者を講師に招き、担当教員と指導に当たるため、理論的かつ実践的な知識とスキルを現場で学びます。

【課題に対するフィードバックの方法】

受講生との活発なディスカッション、実習への参加、コメント・アドバイスを行うことを通して、受講生の研究課題に対する理解をさらに深めるようフィードバックを行います。

■授業計画

【集中講義 1 日目】

- ①ガイダンス
- ②アウトドア・レクリエーション計画とは
- ③北海道におけるアウトドア・レクリエーションの現状と課題
- ④アウトドア・レクリエーション活動および企画立案において留意すべき点
- ⑤フィールドワーク計画・準備

【集中講義 2 日目】

- ⑥～⑩フィールドワーク実施

【集中講義 3 日目】

- ⑪～⑭プレゼンテーション、レポート作成
- ⑮まとめ

※以上の授業計画を予定していますが、受講者数およびフィールドワーク訪問先の都合により適宜変更することがあります。実施日程は8月下旬～9月上旬を予定しています。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

アウトドア・レクリエーション計画立案に必要な総合的視座を身につけると共に、各種レクリエーションメニュー作成のための知見を得ることを目標とします。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP2) コミュニケーション能力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP4) 多様性の理解と協働する力

■成績評価基準と方法

レポート・ワークシート：40%

フィールドワーク：60%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

必要に応じてプリントを配布します。

【参考文献】

必要に応じて提示します。

■授業外学習

【具体的な内容】

フィールドワーク実施前後に情報収集、調査準備およびワークシート記入作業に取り組んでもらいます。

【必要な時間】

4時間／各項目予習・復習

■その他

科目名	観光経営演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

観光経営の手法と戦略について、様々な事例を取り上げながら論じる。特に、各地域を拠点として出発した観光事業会社や地域住民を巻き込んだ取り組みを検証しながら、その経営形態やマーケティング、顧客管理、多面的な経済効果などについて焦点を当て、理解を深める。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

観光経営の基礎に関する文献資料を適宜配布し、精読する。
観光経営のケーススタディに関する論文を適宜配布し、精読する。
観光経営に関連するテーマを各自設定して調査し、プレゼンテーションを実施する。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回の講義でレジュメ・レポートの作成を義務付け、それに基づきコメントおよびディスカッションすることを通してフィードバックを行う。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②観光経営の基礎 1
- ③観光経営の基礎 2
- ④観光経営の基礎 3
- ⑤観光経営の基礎 4
- ⑥民間セクターの観光事業の現状と課題についての検討
- ⑦地域に根差した観光ビジネスの現状と課題についての検討
- ⑧グローバルな観光経営の現状と課題についての検討
- ⑨観光経営のケーススタディ 1
- ⑩観光経営のケーススタディ 2
- ⑪観光経営のケーススタディ 3
- ⑫観光経営のケーススタディ 4
- ⑬北海道の今後の観光経営のあり方についての検討
- ⑭日本および海外の今後の観光経営のあり方についての検討
- ⑮総括

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

観光経営の基礎と特性に関する業種別、地域別の違いを理解し、様々なケーススタディの検証を通じて提言を示すことができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1) 専門知識・技能を活用する力
(DP3) 課題を発見し、解決する力
(DP6) 社会に貢献する姿勢

■成績評価基準と方法

レジュメ・レポート：40%
プレゼンテーション：30%
ディスカッション：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

個別に指示します。

【参考文献】

日本交通公社(編)『観光地経営の視点と実践』丸善出版、2019年。
岡本伸之『観光経営学(よくわかる観光学1)』朝倉書店、2013年。
十代田朗(編)『観光まちづくりのマーケティング』学芸出版社、2010年。

■授業外学習

【具体的な内容】

北海道、日本および海外の観光事情について関心を持ち、毎日ニュース等をチェックしながら情報の収集と整理を行う。

【必要な時間】

事前のレジュメ・レポート作成に4時間、事後の復習・まとめに2時間程度を目安とする。

■その他

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	斉藤 巧弥

■講義の目的および概要

修士論文執筆の準備を行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

指導教員による個別指導の下、研究テーマに関する文献資料の収集、読解、分析、整理、調査に取り組み、修士論文のフレームワークと目次を作成する。

【課題に対するフィードバックの方法】

受講生が調べてきた文献資料に関する概要と考察について報告してもらい、対話形式で適宜コメントとアドバイスを行う。

■授業計画

- ① ガイダンス、研究計画
- ②～⑩ 先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑪～⑬ 調査の準備および実施
- ⑭ 調査結果のまとめ
- ⑮ 修士論文のフレームワークと目次の作成

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性を身に付け、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。修士論文のフレームワークを作成し、目次を完成させる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光文化を研究領域とし、わが国の観光産業の発展と観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門職業人を養成するという本研究科の目的を達成するために、修得すべき知識と能力を備えた質の高い修士論文を執筆する。

■成績評価基準と方法

先行研究：50%

調査内容：30%

修士論文目次作成：20%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

講義中指示します。

【参考文献】

適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

毎回先行研究を調べて熟読し、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要です。事後学習としては研究材料を整理し、修士論文の内容構成に組み込む作業が必要です。

【必要な時間】

事前・事後学習ともに10時間を目安とします。

■その他

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	藤崎 達也

■講義の目的および概要

この授業では修士課程2年の大学院生を対象に、各自が設定したテーマに即して修士論文が執筆できるように指導する。各自が質の高い修士論文を実際に執筆することが最終目標である。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

各大学院生の学習・研究の進捗に応じて指導を進める。下記の「授業計画」は研究の進め方の例を掲げた。

【課題に対するフィードバックの方法】

■授業計画

- 第1回：研究方法と論文の書き方（1）
- 第2回：研究方法と論文の書き方（2）
- 第3回：論文を完成させる心構え
- 第4回：研究テーマと論文の方向性の確認
- 第5回：論文の仮説と理論枠組み
- 第6回：資料探索
- 第7回：論文の構成
- 第8回：文献リストの作成
- 第9回：主要参考文献と理論枠組みの彫琢
- 第10回：主要資料の読み込み
- 第11回：論文の基本ルール
- 第12回：研究テーマ設定上の悩み解決
- 第13回：草稿の一部の執筆
- 第14回：論文の構想、仮説、理論枠組みの確認
- 第15回：まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性を身に付け、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。修士論文のフレームワークを作成し、目次を完成させる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
- (DP3) 課題を発見し、解決する力
- (DP5) 能動的に学び続ける力

■成績評価基準と方法

【評価方法】

修士論文本体を主査（指導教員）および複数の副査が読み、口述審査会（公開）での発表や質疑への受け答えを加味しつつ、評価を行う。最終評価は専攻会議にて、主査・副査を含む全教員により決定する。

【評価基準】

論文及び発表に反映された実証的研究が、明確な目的をもってなされ、方法や分析、結果に対する考察に関して、観光学研究の実証研究として一定の水準に達しているかどうかを中心に評価がされる。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

【参考文献】

■授業外学習

【具体的な内容】

2023(令和5)4月1日

【必要な時間】

■その他

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	有澤 恒夫

■講義の目的および概要

修士論文執筆の準備を行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

指導教員による個別指導の下、研究テーマに関する文献資料の収集、読解、分析、整理、調査に取り組み、修士論文のフレームワークと目次を作成する。

【課題に対するフィードバックの方法】

受講生が調べてきた文献資料に関する概要と考察について報告してもらい、対話形式で適宜コメントとアドバイスを行う。

■授業計画

- ① ガイダンス、研究計画
- ②～⑩ 先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑪～⑬ 調査の準備および実施
- ⑭ 調査結果のまとめ
- ⑮ 修士論文のフレームワークと目次の作成

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性を身に付け、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。修士論文のフレームワークを作成し、目次を完成させる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光文化を研究領域とし、わが国の観光産業の発展と観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門職業人を養成するという本研究科の目的を達成するために、修得すべき知識と能力を備えた質の高い修士論文を執筆する。

■成績評価基準と方法

先行研究：50%
調査内容：30%
修士論文目次作成：20%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

講義中指示します。

【参考文献】

適宜紹介します。【テキスト】

■授業外学習

【具体的な内容】

毎回先行研究を調べて熟読し、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要です。事後学習としては研究材料を整理し、修士論文の内容構成に組み込む作業が必要です。

【必要な時間】

事前・事後学習ともに10時間を目安とします。

■その他

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	田村 こずえ

■講義の目的および概要

修士論文の執筆に向けて、観光学の学識を高め、テーマおよび問題意識を明確化して、論理的な内容となるように文献調査や先行研究など吟味をして、観光事業・観光振興に寄与できるような修士論文を目指す。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

学生の能動的学修の充実を図るために、発表や討論などにより研究テーマに関わる思考力を育成して、実践的な学びの機会を取り入れながら実践力を身につける。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題に関しては、授業中にフィードバックする。
発表や課題などの研究内容に関して、討論などにより研究テーマに関わる思考力や判断力を育成する。

■授業計画

- ①ガイダンス
- ②問題意識の明確化 修士論文の概要
- ③問題意識の明確化 修士論文の概要
- ④テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑤テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑥テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑦テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑧テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑨テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑩テーマの検討及び先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑪調査方法の検討と準備及び実施
- ⑫調査方法の検討と準備及び実施
- ⑬調査方法の検討と準備及び実施
- ⑭修士論文中間報告の準備
- ⑮修士論文中間報告の準備

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・修士論文のテーマを設定する
- ・修士論文作成計画書を作成する
- ・修士論文中間報告へ向けて、準備して発表を行う

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの基盤となる専門理論および応用知識、それらを活用して地域づくりの実践に資するコミュニケーション能力等の習得を目指す。

■成績評価基準と方法

修士論文テーマの提示：20%
修士論文作成計画書の提示：30%
修士論文中間報告が可能な状況の提示：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。

【参考文献】

受講生の興味関心や研究テーマなど必要に応じて適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

先行研究等を調べて熟読し、内容をまとめて授業で報告するための準備を行うことが必要です。事後学習としては研究内容を整理し、修士論文の枠組みや構成を考えることが必要です。

【必要な時間】

学生の能力や研究テーマ、進捗程度等に合わせて、担当教員との相談のもとで適宜設定する。

■その他

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	河本 光弘

■講義の目的および概要

個々の研究テーマに合わせ研究指導する。
具体的には、研究テーマの設定や研究計画、研究方法、先行研究、調査方法、分析方法、論文のまとめ方等について、論文作成に向け指導する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

修士論文を作成するための資料や作成中の論文等を適宜、提出し、それに基づいて報告・討議を進めていき、完成させる。

【課題に対するフィードバックの方法】

本講義は、シンクタンクで旅行・観光、地域振興関連の調査研究実績のある教員が、その実務の実績や経験を活かし、授業を実施します。各講義の課題に関しては、授業内で解説講義等するとともに関連資料等を配布します

■授業計画

- ①これまでの準備状況の整理・確認
- ②研究テーマ設定の確認
- ③研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野） I
- ④研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野） II
- ⑤研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野） III
- ⑥先行研究 I
- ⑦先行研究 II
- ⑧調査手法 I
- ⑨調査手法 II
- ⑩調査（分析） I
- ⑪調査（分析） II
- ⑫論文概要作成 I
- ⑬論文概要作成 II
- ⑭論文中間報告 I
- ⑮論文中間報告 II

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマ、研究計画の策定
先行研究、研究に関する調査や分析の完成
論文中間報告の完成

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- 以下のうち、特に①、②の項目に関して文献からその知識や考える能力を得る。
- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
 - ②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
 - ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

各時間作成・提出のレポート；50%
最終レポート；50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

適宜指示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

新聞やTV等関連する事項について日頃、興味を持って接し学ぶこと（事前学習）。
授業のなかで得られた知識や項目について、より深く図書館やネットで調べ、整理しておくこと（事後学習）。

【必要な時間】

概ね事前・事後各2時間を想定する。

■その他

進行その他詳細は、担当教員の判断と受講者の希望により実情に即して対応する。必要に応じ、フィールドワークを実施する。

科目名	修士論文指導演習 I
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	池見 真由

■講義の目的および概要

修士論文執筆の準備を行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

指導教員による個別指導の下、研究テーマに関する文献資料の収集、読解、分析、整理、調査に取り組み、修士論文のフレームワークと目次を作成する。

【課題に対するフィードバックの方法】

院生が調べてきた文献資料に関する概要と考察について報告してもらい、対話形式で適宜コメントとアドバイスをを行う。

■授業計画

- ① ガイダンス、研究計画
- ②～⑩ 先行研究（文献資料の収集、読解、分析、整理）
- ⑪～⑬ 調査の準備および実施
- ⑭ 調査結果のまとめ
- ⑮ 修士論文のフレームワークと目次の作成

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性を身に付け、修士論文執筆に向けた研究計画を立案し、到達目標を院生自身で設定して、これに見合う量・質の文献調査を遂行する。
修士論文のフレームワークを作成し、目次を完成させる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1) 専門知識・技能を活用する力
(DP3) 課題を発見し、解決する力
(DP5) 能動的に学び続ける力

■成績評価基準と方法

先行研究：50%
調査内容：30%
修士論文目次作成：20%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

講義中指示します。

【参考文献】

適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

毎回先行研究を調べて熟読し、内容をまとめて授業で報告するための準備作業が必要です。事後学習としては研究材料を整理し、修士論文の内容構成に組み込む作業が必要です。書籍・論文・資料等合わせて参考文献を最低100本以上読むこと。

【必要な時間】

事前・事後学習ともに10時間を目安とします。

■その他

科目名	修士論文指導演習Ⅱ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	藤崎 達也

■講義の目的および概要

この授業では修士課程2年の大学院生を対象に、各自が設定したテーマに即して修士論文が執筆できるように指導する。各自が質の高い修士論文を実際に執筆することが最終目標である。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

各大学院生の学習・研究の進捗に応じて指導を進める。下記の「授業計画」は研究の進め方の例を掲げた。

【課題に対するフィードバックの方法】

■授業計画

第1回：中間発表会での結果を受けての研究方針の検討（1）：中間発表会で寄せられたコメントを参考に、研究方法の適切性やデータの質や量、分析の適切性を検討する。

第2回：中間発表会での結果を受けての研究方針の検討（2）

第3回：本調査／本実験のデータ収集（1）

第4回：本調査／本実験のデータ収集（2）

第5回：本調査／本実験のデータ収集（3）

第6回：本調査／本実験のデータ収集（4）

第7回：データ分析（1）

第8回：データ分析（2）

第9回：データ分析（3）

第10回：データ分析（4）

第11回：修士論文の作成（1）：論文の構成の適切性、論旨の明確性と一貫性、文章表現や図表の適切性に配慮し、知見の学術的・社会的寄与を明確化しながら論文を作成する。

第12回：修士論文の作成（2）

第13回：修士論文の作成（3）

第14回：修士論文の作成（4）

第15回：修士論文の作成（5）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性を身に付け、修士論文執筆に向けた研究計画を立案する。修士論文のフレームワークを作成し、目次を完成させる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1) 専門知識・技能を活用する力

(DP3) 課題を発見し、解決する力

(DP5) 能動的に学び続ける力

■成績評価基準と方法

【評価方法】

修士論文本体を主査（指導教員）および複数の副査が読み、口述審査会（公開）での発表や質疑への受け答えを加味しつつ、評価を行う。最終評価は専攻会議にて、主査・副査を含む全教員により決定する。

【評価基準】

論文及び発表に反映された実証的研究が、明確な目的をもってなされ、方法や分析、結果に対する考察に関して、観光学研究の実証研究として一定の水準に達しているかどうかを中心に評価がされる。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

【参考文献】

■授業外学習

【具体的な内容】

2023(令和5)4月1日

【必要な時間】

■その他

科目名	修士論文指導演習Ⅱ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	斉藤 巧弥

■講義の目的および概要

修士論文を執筆するための指導を行う。受講生個々の研究テーマに合わせ研究指導する。具体的には、研究テーマの設定や研究計画、研究方法、先行研究、調査方法、分析方法、論文のまとめ方等について、論文作成に向け指導する予定である。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

修士論文を作成するための資料や作成中の論文等を適宜、提出し、それに基づいて報告・討議を進めていき、完成させる。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題や修正については、相互に検討し、修士論文に反映させていけるようにフィードバックしていく。

■授業計画

- ①これまでの準備状況の整理・確認
- ②研究テーマ設定の確認
- ③研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野）Ⅰ
- ④研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野）Ⅱ
- ⑤研究計画（研究のねらい、研究計画、研究方法、関連分野）Ⅲ
- ⑥先行研究Ⅰ
- ⑦先行研究Ⅱ
- ⑧調査手法Ⅰ
- ⑨調査手法Ⅱ
- ⑩調査（分析）Ⅰ
- ⑪調査（分析）Ⅱ
- ⑫論文作成Ⅰ
- ⑬論文作成Ⅱ
- ⑭論文報告・修正Ⅰ
- ⑮論文報告・修正Ⅱ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ・研究テーマ、研究計画の整理・確認
- ・先行研究、研究に関する調査や分析の完成
- ・論文の完成

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

以下のうち、下記の項目に関して、その知識や考える能力を得る。

- ①観光産業の発展および観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門的理論および応用知識
- ②わが国の観光産業および観光を通じた地域づくりに貢献し得るコミュニケーション能力
- ③高度な専門職業人として要求される汎用技能

■成績評価基準と方法

研究テーマ、研究計画の策定や先行研究、研究に関する調査や分析の完成状況、論文内容、独創性、研究姿勢等について評価します（総合評価：100点）

■テキスト・参考文献

テーマ、作成段階に沿って適宜、指示します。

■授業外学習

【具体的な内容】

これまで準備してきた研究資料、作成中の論文等を整理、検討しておくこと。

【必要な時間】

概ね各2時間とする。

■その他

休暇期間中にも指導する予定である。

科目名	修士論文指導演習Ⅱ
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	黄 旭暉

■講義の目的および概要

修士論文の完成を目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

修士論文の執筆作業に取り組み、指導教員が個別指導を行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

修士論文作成過程において、文章添削や対話形式で適宜コメントとアドバイスを行う。

■授業計画

- ① 修士論文執筆計画
- ②～⑫ 論文各章の執筆作業
- ⑬ 第一原稿の完成
- ⑭ 修正作業（問題意識、課題設定、内容構成、論理展開、独自性、社会への貢献性の各項目に対する評価と再検討）
- ⑮ 修士論文の完成

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマに関する専門性、研究能力を高める。
修士論文を完成する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

観光文化を研究領域とし、わが国の観光産業の発展と観光を通じた地域づくりの実践に資する高度な専門職業人を養成するという本研究科の目的を達成するために、修得すべき知識と能力を備えた質の高い修士論文を執筆する。

■成績評価基準と方法

修士論文の内容：50%
授業への参画状況：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

授業毎に論文執筆作業の経過を報告してもらい、内容の添削を行うので、事前・事後学習をしっかりと行うこと。

【必要な時間】

事前・事後学習ともに20時間を目安とします。

■その他

科目名	臨床心理学特論 I
開講期・単位	1年 春学期・必修 2単位・講義
担当者	橋本 久美

■講義の目的および概要

本講義は、臨床心理に関する高度な知識と技能を修得することを目的とする。心理援助として、あらかじめ備えておく知識として望ましい心理療法各論の基本的考え方や諸技法を理解し、現実の面接場面での対人援助法について模擬実習を交え具体的に学ぶ。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義では、公認心理師・臨床心理士資格を持ち、教育領域におけるスクールカウンセラーや産業領域でのカウンセリングなど実務経験のある教員が、「臨床心理学的面接の理論とその技法」について知識の習得を目的とした講義を行う。テキストや論文を分担してレポートし発表する。重要な概念や技法を理解しやすいように具体的な実践を通して、討議しながら進める。一部DVD視聴を用いた学習を含める。

【課題に対するフィードバックの方法】

発表後のディスカッションや指摘されたコメントをまとめたものを提出し、コメントを受ける。適宜、manabaを通じて資料を配布する。

■授業計画

- ①心理療法の学び方 ガイダンス
- ②精神力動アプローチ1
- ③精神力動アプローチ2
- ④ロジャースと集団療法アプローチ1
- ⑤ロジャースと集団療法アプローチ2
- ⑥家族療法と短期精神療法1
- ⑦家族療法と短期精神療法2
- ⑧その他の理論（森田療法・交流分析等）における心理療法
- ⑨認知行動療法アプローチ1
- ⑩認知行動療法アプローチ2
- ⑪治療過程に応じて導入すべき諸技法1
- ⑫治療過程に応じて導入すべき諸技法2
- ⑬治療過程に応じて導入すべき諸技法3
- ⑭心理療法の効果測定について
- ⑮まとめ

臨床心理の実践現場で扱う心理療法を精選して学習するが、受講生のニーズに応じてシラバスの内容を変更する可能性がある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

各心理療法の基本的理論と技法の展開法を理解する。また、クライアントの問題や課題について、心理療法理論を援用した理解ができるようになる。漠然としたイメージではなく、具体的な療法の展開について考えられるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理に関する高度な知識と技能」を実践学習するために、個別での実践発表を行う。授業での実践を通じてクライアントに対する援助を模擬体験する。
 (DP1) 【専門知識・技能を活用する力】

■成績評価基準と方法

課題提出評価：40%
 発表内容評価：30%
 最終レポート：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

必要に応じて紹介する。

【参考文献】

必要に応じて紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

心理療法各論について、文献を探し、発表レジュメにまとめる。ディスカッションで得られた知見を広げ深めるために関連文献や資料を探して授業後の課題とする。また、心理療法に関する外部の研修会などにも積極的に参加し、知見を広げることを勧める。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	臨床心理学特論Ⅱ
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・講義
担当者	高野 創子

■講義の目的および概要

臨床心理学の理論の実践的な基礎である心理療法とは、どのようなプロセスで進んでいくのかを理解することを通して、その意義と価値を評価できるようになることが目標となる。また、知的な理解にとどまりがちな臨床心理学の諸概念を、実際の現象として把握することによって、実践的な概念として活かすことができるようになることを期待している。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

力動的・精神分析の文献を用いて、その治療プロセスを学ぶ。講師の解説の後、それぞれの講義のテーマに沿った課題を提示し、受講者全員でディスカッションを行ない、理解を深める。

本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラー、ボランティア活動などの地域支援の経験のある教員が心理支援の発想と技術をクライアントに活かす視点と対人コミュニケーション能力を養う演習を実施します。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回の課題、グループワークでまとめた内容を紙面にて提出したものについて、講義内で内容の確認と添削指導を行う。

■授業計画

- ① イントロダクション
- ② 心理療法の中の精神分析的な心理療法の位置づけ
- ③ 精神力動的な心理療法とは
- ④ ヘンゼルとグレーテルの物語
- ⑤ 初回面接
- ⑥ 契約という関係
- ⑦ 協力感の形成
- ⑧ 転移と逆転移①
- ⑨ 転移と逆転移②
- ⑩ 夢とその扱い
- ⑪ 抵抗
- ⑫ ワークスルー①
- ⑬ ワークスルー②
- ⑭ 心理療法の終結
- ⑮ まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ① 精神力動的な心理療法の特徴を説明することができる。
- ② 心理療法の大まかなプロセスについて説明することができる。
- ③ 心理療法の中で生じる様々な現象を人間理解の手がかりとして考えることができるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

DP1「臨床心理に関する高度な知識と技能」
DP4「現代社会の臨床心理的課題の理解」

■成績評価基準と方法

- ① 毎回のミニ・レポート60%
- ② 学期末課題：40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

必要に応じて適宜プリントを配布する。

【参考文献】

『サイコセラピー練習帳』丸田俊彦著 岩崎学術出版社

■授業外学習

大学の図書館やインターネットなどを使って、専門領域に関連した必要な情報を積極的に収集・活用すること。日ごろから、ニュースや新聞などで心や福祉に関する情報を入手するよう心掛けること。テーマに関する議論で自分の意見が言えるように、テキストや配布された資料以外の文献も自主的に調べて学修をつむこと。

【必要な時間】

本演習は、自身の発表回の事前準備はもちろんのこと、講義時間外にも課題の実施などが必要となる。これらを予習・復習の時間の活動内容とし、併せて4時間を目安とする。

■その他

科目名	臨床心理面接特論 I
開講期・単位	1年 春学期・必修 2単位・講義
担当者	高野 創子

■講義の目的および概要

臨床心理学の理論の実践的な基礎である心理療法について、とりわけ自我心理学の技法をもとに、面接初期から終結までのプロセスを学びます。また、知的な理解にとどまりがちな臨床心理学の諸概念を、実際の現象として把握することによって、ケース担当時に実践的な概念として活かすことができるようになることが目的です。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

指定のテキストや論文の各章について受講生が担当を分担してレポートし、そのテーマごとに受講生でディスカッションを行う。

本講義は、心療内科精神科の心理士、またスクールカウンセラー、地域支援の経験のある教員が心理支援の基本的理論と姿勢をケースに生かす視点を養う演習を実施する。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回の課題、グループディスカッションでまとめた内容を紙面にて提出したのについて、講義内で内容の確認と添削指導を行う。

■授業計画

- ① ガイダンス
- ② 精神分析的な心理療法とは
- ③ 心理療法の基本的な枠組み I
- ④ 心理療法の基本的な枠組み II
- ⑤ インテーク面接について（導入、動機づけ、合意、査定）
- ⑥ インテーク面接（初期の聴き方と構造）
- ⑦ 治療場面で起こりうる現象（人間理解の手立て 転移 I）
- ⑧ 治療場面で起こりうる現象（人間理解の手立て 転移 II）
- ⑨ 治療場面で起こりうる現象（抵抗の意味と対応）
- ⑩ 治療的介入と解釈（その1・その2）
- ⑪ 中断と終結
- ⑫ 児童期・思春期の面接 I
- ⑬ 児童期・思春期の面接 II
- ⑭ 精神分析理論に関する諸概念
- ⑮ 振り返り

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

1. 精神力動的な心理療法の特徴（心理面接における約束事や守るべき面接構造、クライアントの内面を尊重することや心の真実を扱うことの重要性）について説明できるようになる。
2. 心理療法の大まかなプロセスについて説明することができるようになる。
3. 心理療法内で生じるさまざまな現象を人間理解の手がかりとして考え、実践に生かすことができるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

DP1「臨床心理に関する高度な知識と技能」
DP4「現代社会の臨床心理的課題の理解」

■成績評価基準と方法

- ① ミニ・レポート（章ごとのまとめ）提出：60%
- ② 学期末課題（担当発表）：40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

馬場 禮子「精神分析的な心理療法の実践」（岩崎学術出版社）

【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

大学の図書館やインターネットなどを使って、専門領域に関連した必要な情報を積極的に収集・活用すること。日ごろから、ニュースや新聞などで心や福祉に関する情報を入手するよう心掛けること。テーマに関する議論で自分の意見が言えるように、テキストや配布された資料以外の文献も自主的に調べて学修をつむこと。

【必要な時間】

本演習は、自身の発表回の事前準備はもちろんのこと、講義時間外にも課題の実施などが必要となる。予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

- ・欠席による就学の遅れは、毎回のグループワークのディスカッションに支障をきたす。そのため毎回出席すること。
- ・メールや電話での連絡については必ず応答すること。日ごろから、メールを確認し、返信を忘れずにすること。

科目名	臨床心理面接特論Ⅱ
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・講義
担当者	松浦 秀太

■講義の目的および概要

「臨床心理面接特論Ⅰ」の学びを基に、臨床心理面接の実際を具体的に学ぶ。特に本科目では臨床心理面接の導入期からアセスメント、心理療法に至るまでの過程に焦点を当て、基本的な面接技法を確認する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義は臨床心理士資格を有し、医療分野、福祉分野、教育分野において心理士としての実務経験がある教員が担当する。概ね講義形式で行うが、必要に応じてグループワークやディスカッションなどを取り入れるなど、能動的な学修を目指す。受講者には適宜資料を配布する。

【課題に対するフィードバックの方法】

講義内で解説する。

■授業計画

概ね以下の順序で展開する。受講生の理解度により、順序が変更となる場合がある。

- ① オリエンテーション、グループワーク
 - ② 臨床心理面接とは何か
 - ③ 面接を始める（設定、基本的姿勢）
 - ④ 来談理由と主訴の確認
 - ⑤ モチベーションの確認
 - ⑥ 現病歴、生活歴
 - ⑦ 成育歴・生育歴
 - ⑧ 作業同盟の構築
 - ⑨ 情報の統合とアセスメント
 - ⑩ 家族や同伴者の扱い
 - ⑪ 発達とトラウマという観点
 - ⑫ 面接プロセスで生じる出来事
 - ⑬ 終結
 - ⑭ 面接検討会(1)
 - ⑮ 面接検討会(2)
- ※ ⑭と⑮は春休み中に行う予定。日程は別途知らせる。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ① 臨床心理面接が人間理解の方法のひとつであることが理解できる。
- ② 臨床心理面接を展開を理解できる。
- ③ 面接プロセスで生じることを理解できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1)【専門知識・技能を活用する力】

■成績評価基準と方法

以下の3点で評価する。

- A) 課題図書 of 感想文×3回：29%
- B) 面接記録の提出×15回：30%
- C) 面接の振り返りレポート：41%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

初回講義時に指示する。

【参考文献】

- ・青木省三（2017）. こころの病を診るといこと—私の伝えたい精神科診療の基本. 医学書院.
 - ・土居健郎（1992）. 新訂 方法としての面接—臨床家のために. 医学書院.
 - ・神田橋條治（1997）. 対話精神療法の初心者への手引き. 花クリニック神田橋研究会.
 - ・笠原嘉（2007）. 精神科における予診・初診・初期治療. 星和書店.
 - ・成田善弘（2007）. 新訂増補 精神療法の第一歩. 金剛出版.
- その他、適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

事前事後に教科書および講義内で紹介された文献をよく読み、予習復習を行うこと。
また、面接課題に取り組むこと。

【必要な時間】

上述のような事前及び事後学習はそれぞれ2時間を目安とする。

■その他

- ・本科目は心理学研究科の必修科目であり、かつ臨床心理士の必修科目である。
- ・講義資料はmanabaで電子データを配布し、講義時に紙媒体を配布する。
- ・提出物（課題、レポートなど）は、公欠などの特別な事情がない限り遅刻提出は認めない。遅刻提出する場合、大学で指定された公欠届と一緒に提出すること。

科目名	心理学研究法特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	岡田 顕宏

■講義の目的および概要

心理学における研究の方法（調査、実験、観察、事例など）を理解し、修士論文執筆に必要な具体的な作業方法（文献収集・読解、研究デザイン、論文の構成および体裁）を修得することを目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

前半では臨床心理学研究の方法論や基本的な作業法について概説する。中盤以降は、受講者の文献発表を中心に、文献の批判的読解、研究方法の理解、論文の構成などについて、演習形式で授業を進める。

【課題に対するフィードバックの方法】

最終的に論文を完成させることを目標として指導を進めるため、毎回、課題に対するフィードバックが個別に行われる。

■授業計画

- ①ガイダンスと臨床心理学研究の意義
- ②臨床心理学研究の方法論 (1) 研究計画の立案
- ③臨床心理学研究の方法論 (2) 研究計画の検討
- ④臨床心理学研究の方法論 (3) 研究計画の完成
- ⑤文献発表と研究実施報告 (1)
- ⑥文献発表と研究実施報告 (2)
- ⑦文献発表と研究実施報告 (3)
- ⑧文献発表と研究実施報告 (4)
- ⑨文献発表と研究実施報告 (5)
- ⑩文献発表と研究実施報告 (6)
- ⑪結果の分析とまとめ (1)
- ⑫結果の分析とまとめ (2)
- ⑬結果の分析とまとめ (3)
- ⑭プレゼンテーションの方法
- ⑮研究発表

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

心理学の実証研究の計画を立案・実行し、結果の分析と論文作成を行う。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

A群の選択必修科目の一つである。
学位授与方針の中の「臨床心理学的研究法と観察事実の分析法」の修得に関連した科目である。

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
(DP3)【課題を発見し、解決する力】
(DP5)【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

授業中に課されるレポート課題&発表 (30%)
調査報告 (30%)
研究発表 (40%)

■テキスト・参考文献

【テキスト】

指定なし

【参考文献】

フィンドレイ (著) 「心理学 実験・研究レポートの書き方」. 北大路書房.
日本心理学会「執筆・投稿の手引き 2015年版」

■授業外学習

【具体的な内容】

修士論文につながる自分自身の研究作業を授業時間外に行う必要がある。具体的には、文献を探して読むこと、研究計画を立てること、調査研究の作業、レポートの執筆などが含まれる。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

大学院心理学研究科を修了するためには、同じA群の「臨床心理学研究法特論」か本 2023(令和5)4月1日
科目かのいずれかを修得する必要があります。

科目名	認知心理学特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	岡田 顕宏

■講義の目的および概要

人間の心理学的なメカニズムを解明する心理学的研究のメインストリームである認知心理学について、その方法論を理解することを目的とする。特に、この講義では、認知心理学的手法の応用分野である、認知神経科学および感情神経科学的アプローチを通じた、人間の共感メカニズムの解明に関する最新知見について概説する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

認知心理学および認知神経科学的な観点から人間の行動・思考・感情を扱っている文献を講読する。受講者の発表と教員による解説、そしてディスカッションを中心に授業を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

発表のための資料作成と発表が課題の中心となる。受講者の発表に対する解説を通して、課題に対するフィードバックを行う。

■授業計画

- ①認知心理学の背景
- ②共感の概念について
- ③共感の基盤となる情動感染現象について
- ④自動的模倣の効果
- ⑤知識の投影による認知的共感
- ⑥認知的共感の正確さについて
- ⑦共感的反応：同情および個人的苦悩
- ⑧教育における共感について
- ⑨臨床的共感について(1)
- ⑩臨床的共感について(2)
- ⑪共感的共鳴現象について
- ⑫精神障害における共感
- ⑬他者の苦痛の知覚
- ⑭共感に関する進化的視点
- ⑮テストと解説

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

認知心理学の基本的な知識や方法論を理解し、人間の行動・思考・感情を認知心理学的な視点からとらえる、という見方を身につける。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

この科目は「臨床心理に関する高度な知識と技能」に相当する。認知心理学の学びを通して人間の心理の基本メカニズムを理解することは、臨床心理学の知識と技能の獲得に欠かせないものである。

(DP1)【専門知識・技能を活用する力】

■成績評価基準と方法

毎回の発表（50%）と筆記試験（50%）で評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

ジャン・デセティ、ウィリアム・アイクス（著）『共感の社会神経科学』勁草書房

【参考文献】

授業中に指示する

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習としては、次回の発表箇所の資料作成が毎回必要となる。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	臨床心理関連行政論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	佐藤 千裕

■講義の目的および概要

本講義は、子どもの教育・福祉をめぐる問題（児童虐待、いじめと不登校、障害のある子どもの支援、DV、親の離婚と子どもの親権・養育費・面会交流、少年非行など）について、その実情と課題、行政・司法の基盤となる法規及び制度、関係機関の種類と役割などについて解説します。また、これらの問題への対応や支援における心理職の職務、職務遂行上の留意点などについても学びます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

教員は、公認心理師です。家庭裁判所調査官として児童虐待、いじめ、DV、親の離婚と子どもの親権・養育費・面会交流、少年非行など、子どもの教育・福祉をめぐる問題に関わってきました。その実務経験を踏まえて、これらの問題の実情と課題、行政・司法の基盤となる法規及び制度、関係機関の役割と機能、心理職の職責や職務遂行上の留意点について、実務の視点や立場を踏まえて講義します。

授業は、基本的に講義形式で行いますが、必要に応じてディスカッションを取り入れます。また、公認心理師の試験問題の解説も行いたいと思います。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説するとともに、必要に応じて資料を配付します。

■授業計画

- ①はじめに～臨床心理に関連する5つの行政分野と子どもの教育・福祉をめぐる問題
- ②子どもの教育・福祉をめぐる問題1（児童虐待）
- ③児童相談所の役割と機能
- ④社会的養護と児童福祉施設
- ⑤子どもの教育・福祉をめぐる問題2（障害のある子どもの教育と支援）
- ⑥子どもの教育・福祉をめぐる問題3（子どもの暴力行為、いじめ、不登校）
- ⑦学校の体制づくりと児童生徒への対応
- ⑧子どもの教育・福祉をめぐる問題4（DVと子どもの保護）
- ⑨子どもの教育・福祉をめぐる問題5（親の離婚と子どもの親権・養育費・面会交流）
- ⑩家庭裁判所と夫婦・親族の紛争の解決
- ⑪家庭裁判所と関係機関との連携
- ⑫子どもの教育・福祉をめぐる問題6（少年非行）
- ⑬家庭裁判所と少年審判、少年鑑別所、保護観察所、少年院
- ⑭犯罪被害者への支援、医療観察制度
- ⑮全体まとめと振り返り

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

子どもの教育・福祉をめぐる問題の実情と課題、行政・司法の基盤となる法規及び制度、関係機関の種類と役割、その中で心理職が果たしている職責などについて、その概要を説明できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「各専門領域において高度専門職業人としての実践能力を身に付けた学生に学位を授与する」に基づき、子どもの教育・福祉をめぐる問題の実情と課題、心理的支援の在り方などに関して、実務の視点や立場から専門的かつ実践的な知識を身に付ける。

(DP1)【専門知識・技能を活用する力】

(DP2)【コミュニケーション能力】

(DP6)【社会に貢献する姿勢】

■成績評価基準と方法

授業期間内の小レポート 50%

期末レポート 50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

テキストは使用しません。毎回、授業時に講義レジュメ、資料等を配付します。

【参考文献】

必要に応じて授業の際に紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

児童虐待、いじめと不登校、障害のある子どもの支援、DV、親の離婚と子どもの親権・養育費・面会交流、少年非行などについて、日ごろから関心を持ち、ニュース・新聞などで最新の情報を入手するなどして知識と関心を深めてください。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	精神医学特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	安岡 譽

■講義の目的および概要

本講義の目的は、各種の精神疾患（こころの病）について、その臨床的、実践的な知識を学ぶだけでなく、とくに現実のケースを呈示し、ケースに対する心理的対応の要諦について論じる。精神疾患患者に対する専門家として姿勢、態度を身につけることと、病に対する偏見を除去し、正しく患者を理解する能力を向上させることを目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

講義形式（オンライン方式等を含む）で行う。
積極的な質疑応答、討論への参加を促す。

■授業計画

- ①精神医学とは何か — 精神医学の概念、精神医療の歴史と現状
- ②精神医学の予備知識 — 精神の構造と機能とその発達
- ③精神医学総論 (1) 精神医学の基礎：精神（こころ）の理解学
- ④ (2) 精神医学の基礎：脳の構造と機能の生物学
- ⑤精神医学各論 (1) 精神疾患の原因、症状、診断（分類）と治療
- ⑥ " (2) 統合失調症
- ⑦ " (3) 気分（感情）障害
- ⑧ " (4) 神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害
- ⑨ " (5) 睡眠・摂食・性関連障害
- ⑩ " (6) 脳の急性障害と慢性障害（認知症を含む）
- ⑪ " (7) アルコール・薬物関連障害
- ⑫ " (8) 人格障害（パーソナリティ障害）
- ⑬精神医学の関連領域 (1) ライフサイクル（児童・青年・成人・老年の医学）
- ⑭ " (2) 児童青年期精神医学（「発達障害」など）
- ⑮社会の変動と人のこころ（最終講、まとめ）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

精神疾患への理解を深め、精神の正常性と異常性の相違を学び、偏見なき人間理解を深める態度を身につけ、その結果、専門家として適切に精神障害者に対し臨床的能力が発揮できるようになることを目標とする。

(DP1)【専門知識・技能を活用する力】

(DP4)【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

最終定期試験（60%）、および重要課題に関する4回のレポート提出とその評価（1回10%、合計40%）と合わせて評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

毎回独自に作成した講義レジメを予め配布する。

【参考文献】

適宜紹介し、また関連資料を配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】

講義レジメの予習・復習、レポート作成の準備で、毎回、長時間を要する義務を課す。

【必要な時間】

予習・復習の時間はそれぞれ2時間を目安とします。

■その他

ケースに関する討論への積極的参加を必須とする。

科目名	障害者心理学特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	田実 潔

■講義の目的および概要

障害のある人、特に青年期以降に社会適応などの問題が顕在化してくる発達障害のある子どもや大人について、その心理や発達、社会性、コミュニケーション等について学ぶ。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

パワーポイントで作成した資料を配付し、それをテキストに講義を行う。トピックスにより、短時間の討論を設定する。出席は毎回取る。
特に授業担当者は、かつて特別支援学校での教員経験が長かったことから、発達障害のある人の具体的な臨床像について、映像や経験から話題提供し、具体例について討論する機会を設定する。

【課題に対するフィードバックの方法】

講義内に、適宜質疑応答形式で行う。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②障害とは何か
- ③自閉スペクトラム症(ASD)の診断
- ④ASDの心理Ⅰ(社会性の発達)
- ⑤ASDの心理Ⅱ(コミュニケーションの障害)
- ⑥ASDの心理欠如多動症(ADHD)の臨床と診断
- ⑧ADHDの心理Ⅰ(コミュニケーションとことば)
- ⑨ADHDの心理Ⅱ(社会適応)
- ⑩ADHDの心理Ⅲ(行動障害)
- ⑪ADHDの支援プログラム
- ⑫限局性学習症(LD)の診断
- ⑬LDの心理(ディスレパシー)
- ⑭発達障害児・者と特別支援教育
- ⑮発達障害児・者の親支援について

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

発達障害児・者とその関係者(特に両親)について共感的理解を得ることができるような客観的知識の獲得と障害理解の深化を目標とし、発達障害についてその心理特性を説明できるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

ディプロマポリシー、特に①『臨床心理に関する高度な知識と技能』に関して、臨床場面で頻繁に遭遇すると思われる発達障害のある人への高度な理解と臨床知識の獲得、およびそれらの高度な知見に立脚した臨床支援技能の獲得を目指している。

(DP1) 【専門知識・技能を活用する力】

(DP4) 【多様性の理解と協働する力】

(DP5) 【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

レポート、もしくは口頭試問を行う。

評価は上記結果を70%、受講態度や課題への対応状況(討論)15%、出席状況15%を総合して判断する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特に指定しない。資料を毎回配布する。

【参考文献】

特に指定しない。

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習としては、特殊教育から特別支援教育に移行した背景を、ノーマライゼーションをキーワードに調べておくこと。また、新聞等の発達障害に関するニュースにも目を通しておくこと。
事後学習では、毎回の講義に基づく討論内容を整理しノート等にまとめて記録しておくこと。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	投映法特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	佐々木 淑子

■講義の目的および概要

心理査定の中の投映法の概略を理解し、その基本となる考え方や諸技法、解釈法を学ぶ。単独の投映法検査による解釈だけではなく、テスト・バッテリーを組むことで重層的に人間を理解することを目指す。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

精神科臨床で心理査定、特に投映法の長い実務経験を持つ教員が、投映法の持つ意義や実施上の要点・スキルを伝えていく。人間の心理を奥深い次元で捉える投映法の考え方について、講義で学ぶ。その後、幾つかの投映法検査について理論的に学んだ後、実際に検査者・被検査者のロールプレイ実習を通して体験する。それらの検査について、実施法、採点法、解釈法、報告書作成等の一連のプロセスを実践的に習得する。

【課題に対するフィードバックの方法】

取り上げられる種々の投映法ごとに、課題の説明、フィードバックを行う。

■授業計画

- ① ガイダンスおよび心を投映することとはどういうことか
- ② 質問紙法と投映法の比較
- ③ SCT
- ④ PFスタディ1～実施&理論を学ぶ
- ⑤ PFスタディ2～採点&集計表作成
- ⑥ PFスタディ3～解釈&レポートの作成
- ⑦ PFスタディ4～レポート提出&発表&ディスカッション
- ⑧ TAT
- ⑨ 夢解釈
- ⑩ 描画法1～HTP
- ⑪ 描画法2～風景構成法、その他
- ⑫ 描画法3～レポート作成&ディスカッション
- ⑬ 投映法を含めたテスト・バッテリーの組み方1
- ⑭ 投映法を含めたテスト・バッテリーの組み方2
- ⑮ 投映法を含めた心理査定による事例検討会～ディスカッション

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

投映法の諸技法を習熟し、それぞれの技法の特徴と使い方を理解する。知能検査や質問紙法と合わせて適切なテスト・バッテリーを組み、そこから具体的な人間像を描き出せるようなレポートを書くことを目指す。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」に基づき、「投映法」に関する高度な知識と技能の習得を目指し、心理臨床家としての歩みを確実にする。

■成績評価基準と方法

- ① PFスタディに関するレポート&ディスカッション：25%
- ② 描画法に関するレポート&ディスカッション：25%
- ③ 学期末課題：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

【参考文献】

テキストおよび参考文献については、適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

各投映法に関する文献調査および資料から解釈を含めたレポート作製、さらにテスト・バッテリーを組んだ多量のデータからのまとめなど、予習・復習に費やす努力が求められる。特に、PFスタディと描画については、時間をかけて扱われるため、それぞれ丁寧なデータの読み取りと考察を膨らませる思考が求められる。

【必要な時間】

上記2つのミニレポート作成、および学期末課題の作成には、予習・復習の時間、それぞれ2時間が必要。

■その他

本授業と関連のある査定科目と調整しながら、授業計画を柔軟に組み進める。

科目名	臨床心理査定演習 I
開講期・単位	1年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	澤田 信也

■講義の目的および概要

臨床心理的援助は多くの情報の総合的な判断に基づいて行われますが、本講義では行動観察や面接、心理検査の中では質問紙法を中心に学び、心理検査を実際に体験しながらレポート作成まで取り組みます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

情報収集の様々な方法について概説したのち、実習やグループワークなどによって学びを深めます。臨床心理士として実務経験がある教員が指導します。

【課題に対するフィードバックの方法】

レポートは講評を加えて返却し、検討を重ねながら一定の水準に達するまで援助します。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②行動観察及び面接法
- ③心理検査の概要
- ④質問紙法 1 (YG性格検査)
- ⑤質問紙法 2 (エゴグラム)
- ⑥質問紙法 3 (その他)
- ⑦知能検査の概要
- ⑧知能検査 1 (ビネー式)
- ⑨知能検査 2 (ビネー式)
- ⑩知能検査 3 (WISC)
- ⑪知能検査 4 (WAIS)
- ⑫知能検査 5 (WAISの実施)
- ⑬知能検査 6 (結果処理と解釈)
- ⑭バッテリーを組む
- ⑮事例検討とまとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

心理査定的重要性を理解し、自立して実施、処理、解釈しつつ実際の援助に役立てられる水準を目指します。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」という本研究科の目的を達成するため、下記の知識・技能を修得するものとします。

- ① 臨床心理に関する高度な知識と技能
- ② 臨床心理学的研究法と観察事実の分析法
- ③ 自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能
- ④ 現代社会の臨床心理的課題の理解

■成績評価基準と方法

小レポート	30%
検査実技	30%
まとめのレポート	40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

指定はありません。資料を配布します。

【参考文献】

授業中に紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

検査データの分析やレポート作成には講義外の時間が必要です。

【必要な時間】

事前、事後共に2時間程度。

■その他

科目名	臨床心理査定演習Ⅱ
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	澤田 信也

■講義の目的および概要

臨床心理査定Ⅰにおいて心理査定の基本を学んだ後、さらに投影法を含めた諸技法を身につけ、テストバッテリーを組むことで、人間理解の深化を図ります。本講義では主に片口法を用いたロールシャッハ法を学びます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

ロールシャッハ法を含め、精神科臨床で多様な査定実務経験のある教員が指導します。検査の実施、採点、解釈からレポート作成まで実習やグループワークを取り入れて進めていきます。後半ではテストバッテリーを組んだ事例検討を行い、実践に即した知識、技能の獲得を目指します。

【課題に対するフィードバックの方法】

実施や処理過程、レポートの検討を通じて、指導を重ねます。

■授業計画

- ①ガイダンス
- ②ロールシャッハ法（実施1）
- ③ロールシャッハ法（実施2）
- ④ロールシャッハ法（実施3）
- ⑤実技試験
- ⑥スコアリング
- ⑦サマリーテーブル作成
- ⑧解釈とレポート作成1
- ⑨解釈とレポート作成2
- ⑩解釈とレポート作成3
- ⑪継起分析と力動的解釈
- ⑫事例理解のために1
- ⑬事例理解のために2
- ⑭事例検討1
- ⑮事例検討2

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

片口法によるロールシャッハテスト実施が可能で、心理査定の実践的な実力が実務レベルに達することを目指します。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」という本研究科の目的を達成するため、下記の知識・技能を修得するものとします。

- ① 臨床心理に関する高度な知識と技能
- ② 臨床心理学的研究法と観察事実の分析法
- ③ 自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能
- ④ 現代社会の臨床心理的課題の理解

■成績評価基準と方法

実技審査	30%
小レポート	30%
まとめのレポート	40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

資料は随時配布します。

【参考文献】

片口安史『改訂・新心理診断法』

■授業外学習

【具体的な内容】

データの処理や解釈、レポート作成には繰り返しの検討や、講義外の考察が不可欠となります。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	臨床心理基礎実習 I
開講期・単位	1年 春学期・必修 1単位・実習
担当者	松浦 秀太、澤田 信也

■講義の目的および概要

「臨床心理基礎実習」では、臨床心理士として心理臨床活動を実践していく上で必要となる（1）クライアントと関わる際に必要となる基本的な心構え、（2）臨床心理士として必要となる基本的な知識と技能、（3）職業倫理（心理職の職責）、という3点の修得を目指す。
特に本実習科目「臨床心理基礎実習 I」では上記目標を達成するため、VTR学習とロールプレイを中心に行い、事例担当に必要な知識と技能、倫理を身につける。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本科目は臨床心理士としての医療保健領域、福祉領域、教育領域、産業領域での実務経験のある教員が担当する。形式は講義＋演習＋実習形式で行う。特に本科目ではロールプレイを中心に心理面接に必要な知識と技能を体験的に学習する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題および見学施設先からの評価については、講義内でフィードバックを行う。

■授業計画

概ね以下のように行う。受講者の理解度によっては変更が生じる場合があり得る。

- ① オリエンテーション（「実習の手引き」などの確認）
- ② 心理相談研究所の見学、倫理的側面の確認
- ③ 心理面接の基礎（1）インテーク面接とは—概論／VTR視聴
- ④ 心理面接の基礎（2）インテーク面接—親／VTR視聴
- ⑤ 心理面接の基礎（3）インテーク面接—子ども／VTR視聴
- ⑥ 心理面接の基礎（4）インテーク面接—青年・成人／VTR視聴
- ⑦ 心理面接の基礎（5）VTR視聴／ロールプレイ
- ⑧ 表現療法体験
- ⑨ 心理相談研究所での電話受付演習（1）基本文献確認
- ⑩ 心理相談研究所での電話受付演習（2）ロールプレイ
- ⑪ 心理相談研究所での電話受付演習（3）ロールプレイ
- ⑫ 心理相談研究所での電話受付演習（4）ロールプレイ
- ⑬ 心理相談研究所での電話受付演習（5）ロールプレイ
- ⑭ 心理相談研究所での電話受付演習（6）模試
- ⑮ ケース担当一次審査（※別日程で行う予定）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

臨床心理士に必要な基本的な心構え、倫理的態度、基礎的な面接技法を身につける。また、それらに対する自分自身の課題を自覚する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 【専門知識・技能を活用する力】
(DP2) 【コミュニケーション能力】
(DP4) 【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

以下の3点によって評価する。

- | | |
|--------------|-------|
| ① 実習記録（15回分） | : 45% |
| ② ディスカッション | : 25% |
| ③ 審査の評価 | : 30% |

■テキスト・参考文献

【テキスト】

森田美弥子・金子一史（編）（2004）. 臨床心理学実践の基礎 その1—基本的姿勢からインテーク面接まで. ナカニシヤ出版.

【参考文献】

下山晴彦（2000）. 心理臨床の発想と実践. 岩波書店.

■授業外学習

【具体的な内容】

- ・事前に「臨床心理面接特論Ⅰ」のテキストや心理療法、心理査定関連の書籍を読み込み、面接や査定についての理解を深めておくこと。
- ・事後学習としてロールプレイなどの記録を書き、自身の面接スタイルについて理解を深めておくこと。
- ・「臨床心理学特論Ⅰ」「臨床心理面接特論Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅰ」で学習した知識や理論と実習内容を常に総合することが重要となる。

【必要な時間】

- ・上述のような事前及び事後学習はそれぞれ2時間を目安とする。

■その他

本実習を履修するにあたり、以下の注意事項をよく読み、理解しておくことが必要となる。

【注意事項】

- やむを得ない理由で欠席もしくは遅刻する場合、担当教員（澤田、松浦）に事前に連絡すること（事前連絡が難しい場合は、連絡が取れる状況となった後、早急に連絡すること）。欠席した回から2日以内に連絡がない場合、実習活動が中止となる場合がある。
- 課題などの提出物が期限内に提出されなかった場合、評価は「不可」となる場合がある。
- 初回講義時に春学期オリエンテーションで配布された「心理学研究科便覧」を持参すること。

科目名	臨床心理基礎実習Ⅱ
開講期・単位	1年 秋学期・必修 1単位・実習
担当者	佐々木 淑子、澤田 信也

■講義の目的および概要

臨床心理行為の基本的な心構えや技能を確実に身に付け、実践の場での活用方法を実習体験を通して学ぶ。具体的には、心理相談研究所をベースとして行われる種々の活動に指導教員の指導を受けながら参加し、心理臨床行為の実践訓練を積む。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

精神科臨床および本大学心理相談研究所で実務経験を有する教員が担当する。基本技法のスキルアップおよび陪席実習を重ね、実践現場への応用力を図る。ケース担当が可能となった段階で、機会に恵まれる場合はケース担当へ進む。

【課題に対するフィードバックの方法】

受講生間で行うロールプレイおよび陪席面接等で触れた事例報告等に、授業時に疑問点や種々の課題を解説し、フィードバックを行う。事例の紹介をしない受講生も、同時に聴講する形で模擬的に事例を学ぶ。

■授業計画

概ね以下の内容を扱う。

- ①オリエンテーション：実習に臨む基本態度の確認&心理面接基礎知識の確認1
- ②心理面接基礎知識の確認2
- ③心理面接ロールプレイ1
- ④心理面接ロールプレイ2
- ⑤心理面接ロールプレイ3
- ⑥心理面接ロールプレイ4
- ⑦心理面接ロールプレイ5
- ⑧臨床心理学の基礎知識の確認1
- ⑨臨床心理学の基礎知識の確認2
- ⑩陪席面接1～陪席ケースからの発表、討議
- ⑪陪席面接2～陪席ケースのまとめ方
- ⑫事例検討会参加の振り返り
- ⑬担当ケース1～ケースの見立て、面接記録の書き方、発表
- ⑭担当ケース2～スーパービジョンの受け方、集団討議
- ⑮振り返り

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

「臨床心理基礎実習Ⅰ」で見いだされた各自の課題を振り返り、それらを確実に吸収していく。心理相談研究所に来談するケースに対して、様々な情報を総合して援助計画を立て、ケース担当へ進む。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学に関する高度な知識と技能」について、具体的なケースとの関わりにより集団討議や教員からの臨床事例指導を繰り返し受けることで修練を積み、卒業後の現場実践に対応できるよう十分な能力を持てるようになる。

■成績評価基準と方法

- ① ロールプレイによる臨床理解力・実践力：30%
- ② ミニレポート（面接記録など）：40%
- ③ 発表および討議：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

竹内健児著「Q&Aで学ぶ心理療法の考え方・進め方」創元社
竹内健司著「Q&Aで学ぶ遊戯療法と親面接の考え方・進め方」創元社

【参考文献】

適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

「実習の手引き」を熟読しておく。ロールプレイでは、授業時の振り返りでの内容をまとめ次回に活かすよう努める。「心理面接の基礎知識」「臨床心理学の基礎知識」の学習には、上述紹介のテキストを用いるが、授業時だけではなく、予習・復習時も併せて熟読し、実践との照合に生かしていく。陪席もしくは担当した場合の事例については、面接終了後に各自事例報告書を作成し、授業で発表することになる。それらの分量や適切な表現のあり方については授業にて具体的に指導を行う。事例報告書の作成および授業時の指導後の報告書訂正や関連文献の読解にはかなりの時間が求められるだろう。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

対面授業を基本とするが、状況によっては遠隔による場合もある。状況を見ながら、柔軟に授業の進め方を調整していく。そのため、授業日程やレポート提出方法や提出期限などの確認をしっかりと行い、齟齬がないよう進めていきたい。受講生もそれらをしっかりと確認し守ってほしい。

オリエンテーション時に「実習の手引き」に触れ説明するが、各々熟読し理解しておくことが望ましい。

科目名	福祉分野に関する理論と支援の展開
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	山本 創

■講義の目的および概要

本講義では福祉、特に精神保健福祉の歴史、理論、制度、現在の状況を学ぶ。その上で心理として福祉分野で働くということについて、そのための一方法を学びながら、現場の実践家として自らの役割を俯瞰的に理解し、主体的に思考できる視点を獲得することを目指す。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

精神科病院、福祉事業所にて臨床心理士・公認心理師として心理的援助に携わった実務経験を持つ教員による講義を基本としつつ、映像による現場の実状理解、それについてのディスカッション、シナリオロールプレイによる知的・情的な追体験、グループワークによる体験的な相互学習などを行う予定。

【課題に対するフィードバックの方法】

講義中の小レポートに対するコメントなどを通して行う。

■授業計画

- ①イントロダクション・・・心理職と福祉領域
- ②福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(欧米1)
- ③福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(欧米2)・振り返り小レポート1
- ④福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(日本1)
- ⑤福祉の歴史 精神障害者と社会の関係史(日本2)
- ⑥福祉の理論 精神保健福祉に関わる諸法規・諸概念1・ふり返し小レポート2
- ⑦福祉の理論 精神保健福祉に関わる諸法規・諸概念2
- ⑧精神保健福祉の現在 就労支援1
- ⑨精神保健福祉の現在 就労支援2・ふり返し小レポート3
- ⑩一方法としての集団力動的視点(その理論)
- ⑪集団力動的視点を持ったデイケア実践
- ⑫集団力動的視点を持った就労継続支援プログラム・ふり返し小レポート4
- ⑬シナリオロールプレイ
- ⑭グループワーク
- ⑮心理職としての視点と役割、とは何だろうか?

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- (1) 公認心理師に必要な福祉分野に関する基本的な知識を獲得する。
- (2) 心理として福祉分野に関わって実践を行うための思考や判断の元となる視点を各自が確立する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP4) 【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

授業期間内のふり返し小レポート(計4回:20%)と終了後の総合レポート(80%)の提出による。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

なし

【参考文献】

毎回の講義に関連する参考文献・引用文献については、その都度紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

特になし

【必要な時間】

特になし

■その他

本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	教育分野に関する理論と支援の展開
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	本間 芳文

■講義の目的および概要

教育分野において、スクールカウンセラー等の支援者として求められる知識と理解、支援方法等について学ぶ。その内容は、教育における支援の基盤を定める法律と行政の動向およびいじめや不登校などの心理社会的な課題の予防や対応の方法、それに加えて特別な支援の配慮を要する障害のある子どもの理解と対応がある。また、健全な学校生活を送るためのすべての子どもたちを対象にした心理教育的啓発を含む。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

講義と課題発表形式で進める。教材としては、授業のねらいに対応したテキスト、報道資料、先行文献、ビデオ教材などを使用する。分担された課題を各自資料等を当たって調べ、レポート発表を行ない、協議する。また、必要に応じて心理検査も体験する。

【課題に対するフィードバックの方法】

予習、復習、授業内での提出された課題については、授業内で後日解説をし、要点を指摘する。

■授業計画

- ①オリエンテーション。授業のねらいと進め方について話し、園、学校における心理的教育課題について、主に不登校に関するテキストを活用しながら取り上げる。
- ②教育分野を支える法律について理解する。
- ③今日の学校教育を進める行政の動向について理解する。
- ④「学校心理学」の理念と概要を理解する。
- ⑤分担した子どものいじめの理解と対応の基本を発表する（1）
- ⑥分担した子どもの不登校の理解と対応を発表する（2）
- ⑦分担した子どもの自閉症スペクトラル障害の理解と対応を発表する（3）
- ⑧分担した子どものADHDの理解と対応を発表する（4）
- ⑨分担した子どもの学習障害の理解と対応を発表する（5）
- ⑩分担した子どもの、その他の情緒的に不安定な子どもの理解と対応を発表（6）
- ⑪分担した子どもたちの学級崩壊の理解と対応を発表する（7）
- ⑫分担した子どもの保護者との連携について発表する（8）
- ⑬発表された子どもの心理社会的課題から、今日の園、学校教育の心理臨床的課題をまとめる。
- ⑭今日の子どもの心理臨床的課題をまとめる。
- ⑮授業のまとめと、心理的支援者となるための自己課題について考察する。
「定期テスト」
心理臨床的支援者になるための素養と実践力について論述させる。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】不登校課題を題材にして、心理的支援者として求められる知識と理解、支援方法等について、以下の3点を説明できる。

- ①教育分野を支える法律と行政的動向
- ②主な子どもの心理社会的な課題の予防や対応の方法の理解
- ③その支援者として求められる資質や実践力についての理解

【卒業認定・学位授与の方針との関連】「自立して生きていくための専門知識、技能を身に付けている学生に学位を授与する」に基づき、学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識や支援方法を学ぶことを通じて、自らも自立できる能力を身につける。

- (DP3) 課題を発見し、解決する力
(DP4) 多様性の理解と協働する力

■成績評価基準と方法

- ①「講義内容の理解と検討力」50%
- ②「分担された課題やレポート課題の内容」50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】小野昌彦「不登校の本質～不登校問題で悩める保護者の皆さんのために～」(2017)風間書房

【参考文献】①一般社団法人日本心理研修センター監修「公認心理師現任者講習会テキスト」(金剛出版、②星野仁彦「発達障害に気づかない 大人たち」(2017)祥伝社新書、③井上雅彦監修、三田地真美・岡村章司著「応用行動分析入門ハンドブック」(2019)金剛出版

■授業外学習

【具体的な内容】 子どもの心理社会的課題に関する報道資料、図書、論文をもと 2023(令和5)4月1日
に、その概要、課題の分析、支援の方法についてまとめ、発表準備をする。

また、教育分野の報道に関心を寄せ、そのテーマについて討論をするので、その
準備を日常的に行うこと。

【必要な時間】

予習、復習には概ね各2時間を想定する。

■その他

修士論文の構想のヒントをたくさん得られるよう視野を広げること。

※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で
定められている科目に該当する。

科目名	保健医療分野に関する理論と支援の展開
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	米島 広明

■講義の目的および概要

保健および医療の分野における心理職の役割と、支援の考え方を整理していくことを基本としますが、実際の臨床の中で起こる具体的な事例から、必要な知識を学び、支援の方法を柔軟に考えていけることを目標にした授業を考えています。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

対面での講義を中心にし、所々で実務経験の中で経験した具体例に関して、学生の意見を聞きながら、考え方の整理をし、視野を広げ、柔軟なものを見方ができるようディスカッションができると良いと考えています。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題に関しては授業の中でその内容についてフィードバックしながら進めていく予定である。

■授業計画

- ①実際の医療機関の紹介
- ②精神医学に関すること
- ③児童精神医学に関すること
- ④幼児期における精神医学的な問題と対応①
- ⑤幼児期における精神医学的な問題と対応②
- ⑥保健領域における幼児期への関り
- ⑦学齢期における精神医学的な問題と対応（神経発達症を中心に）①
- ⑧学齢期における精神医学的な問題と対応（神経発達症を中心に）②
- ⑨学齢期における精神医学的な問題と対応（不登校など）
- ⑩家族への支援を考える①
- ⑪家族への支援を考える②
- ⑫家族への支援を考える③
- ⑬保健医療分野と他領域との連携
- ⑭災害時の心のケアについて
- ⑮まとめ

※授業では実際の臨床的な問題を考えていくので、それぞれの内容を切り離して考えることができないために、この順で授業が進むわけではありません。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

様々な支援・援助場面において多角的な視点で柔軟に考える姿勢が身についていること（マニュアル的な見方ではなく、自分で情報をとらえ、考えていこうとする姿勢）

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
(DP5)【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

最終レポート：50%
授業内での意見と発言：30%
課題レポート：20%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

特にありません

【参考文献】

■授業外学習

【具体的な内容】

特に必要ありませんが、毎回の授業の際に質問等のやり取りがあると思いますので、授業に関係することに関して色々と興味を持って考えていただけると良いです。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とします。

■その他

少人数ですので、自分の考えを発言していただくことが多くなると思います。

科目名	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	鈴木 憲治

■講義の目的および概要

本講義では、「司法・犯罪心理学」で理解した、基礎的な理論及び各種技法をもとに、より高度で実務的な理論及び各種技法を習得することを目的とします。犯罪・非行にかかわる心理学の理論のみならず、関連する国内法（実体法、手続法）について関連付けて学びます。

司法における《刑事手続き分野》においては、犯罪行為や非行行動に至る心理や、犯罪被害者となった方々の心理とそのケア等、非行・犯罪のリスクアセスメント・リスクマネジメントに関する基本と刑事司法にかかわる心の問題を学びます。

司法における《民事手続き分野》においては、子どもの権利を中心に、家庭内で生じる紛争について、家族法や家族社会学、生涯発達心理学などの知見、当事者の方々への心理的援助法を学びます。

心理専門職である公認心理師として連携を求められる可能性が高い関係組織、関係機関や他職種の業務の内容、実態について知見を深めます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義では、司法領域で実務経験のある教員が、人間に対する深い理解、深い人間理解に根ざした支援を実践できるようにするため以下の方法をとります。

- ア) 知識をパワーポイントによる講義形式で提供します。
- イ) 両価的なテーマについてのディスカッションを実施して、知識を確かなものにします。
- ウ) 臨床の現場を見学することで、リアルな心理臨床を体感し、職業選択を考える上でも役に立つ知見とします。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回、授業計画にあるテーマに沿って、受講生は事前に課題が与えられ、授業冒頭に提出されたレポートをもとに、課題を解決する形式で講義が進められます。

■授業計画

概ね以下の予定に沿って授業を展開します。

①司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開の概要

《刑事手続き分野》

- ②RNR原則とリスクアセスメント
- ③各機関における活動（裁判所）
- ④各機関における活動（児童相談所、児童養護施設、児童自立支援施設）
- ⑤各機関における活動（少年鑑別所、少年院、少年刑務所、刑務所）
- ⑥各機関における活動（保護観察所、更生保護施設）
- ⑦各機関における活動（医療少年院、病院精神科、保健所）
- ⑧犯罪・非行分野への支援（被害者ケア）
- ⑨犯罪・非行分野への支援（修復的司法）
- ⑩事例検討

《民事手続き分野》

- ⑪家庭紛争（家事）事件の理解
- ⑫家庭紛争（家事）事件における家族支援
- ⑬親の紛争下における子の意思の把握と考慮
- ⑭高齢者への支援（成年後見制度）
- ⑮事例検討

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

本授業では、以下の事項について基礎的理解をもとに、実務的な知見を得ていることが求められます。

《刑事手続き分野》

- 1) 少年法等基本法規が理解できる
- 2) 少年事件の審判手続きが理解できる
- 3) 非行臨床機関の概要が理解できる
- 4) 少年非行の動向、特質、心理的背景が理解できる
- 5) 非行臨床で用いられるアプローチが習得できている
- 6) 司法・犯罪分野における心理社会的支援の課題が理解できる

《民事手続き分野》

- 1) 家族法等基本法規が理解できている
- 2) 司法手続きにおける子どもの権利について理解できる
- 3) 司法手続きに関わる関係機関の概要について理解できる
- 4) 司法手続き下にある子どもの心理的背景が理解できる
- 5) 司法手続き下にある成人の心理的背景が理解できる
- 6) 司法手続き下における心理社会的支援の課題が理解できる

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学領域における基礎的知識、技能の修得およびそれを基にした専門知識、技能の修得」を身に付けている学生に学位を授与するDPに基づき、司法・犯罪分野における心理的支援に不可欠な枠組を理解した上で、その基礎理論及び各種技法に関する基礎的知識を習得します。

本研究科の学位授与に関する総合的に身につけるべき能力は以下の通りです。

- DP1「臨床心理に関する高度な知識と技能」
 DP2「臨床心理学的研究法と観察事実の分析法」
 DP3「自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能」
 DP4「現代社会の臨床心理的課題の理解」

具体的に求められるものは以下の通りです。

- ① 司法・犯罪分野の制度・法・職種についての基礎知識を得る。
- ② 司法・犯罪分野における犯罪者心理・被害者心理を知る。
- ③ 司法・犯罪分野の関係組織、関係機関、他職種との連携の在り方を知る。

■成績評価基準と方法

以下の2点で評価します。

毎回提出のレポート評価	: 60%	5%×12回
事例検討レポート	: 40%	20%×2回

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜プリントを配布します

【参考文献】

「① 司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開の概要」時に「参考文献等リスト」を配布します。

■授業外学習

【具体的な内容】

授業の前後に、裁判所、少年鑑別所、少年院、刑務所、更生保護施設等の関係機関見学の実施を予定しています。

毎回、授業の最後に次回授業内容の予習レポートを出題します。必ず予習をして授業冒頭に提出して授業に参加してください。

【必要な時間】

関係機関見学に要する時間は、各6時間が目安です。詳細は、受講者と相談の上決定します。

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とします。

常日ごろからニュース、新聞、インターネットなどで、社会的な事件についての情報を入手するように心掛けてください。

■その他

本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

関係機関見学時の現地までの交通費は各人の負担となります。

なお、新型コロナウイルスの感染拡大等の影響により、関係機関の見学が中止となる場合があります。

科目名	産業・労働分野に関する理論と支援の展開
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	中川 貴美子

■講義の目的および概要

本講義は産業・組織心理学の知識を前提として、産業・労働分野における心理的支援について実践的に学ぶことを目的とする。産業・就業構造の変化等の社会背景および関連法規を理解した上で、労働者に対する相談支援、労働環境の改善や労働者のパフォーマンス向上に資する活動について、主体的に考え、創造する力を養う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

講義、課題についての個人・グループワークと発表、ディスカッション

【課題に対するフィードバックの方法】

産業・労働現場にて事業場内・事業場外の心理職として支援に携わる教員が、実践に必要な知識と考え方について、知見や経験を活用した講義を実施する。講義内で実施する課題発表においては、その場で協議や質疑応答のうえコメント。提出されたレポートには、コメントし後日返却。

■授業計画

- ①ガイダンス（本講義の全体像、支援を行う場と活動内容のイメージづくり）
- ②職場のメンタルヘルス支援
- ③産業・就業構造と社会背景
- ④労働関連法規や産業保健の施策
- ⑤産業分野における多職種連携と協働、倫理
- ⑥個人・組織への介入（ストレスチェック）
- ⑦個人・組織への介入（キャリア形成・開発支援）
- ⑧個人・組織への介入（ハラスメント）
- ⑨個人・組織への介入（両立支援）
- ⑩個人・組織への介入（障害者支援）
- ⑪個人・組織への介入（職場復帰支援）
- ⑫個人・組織への介入（自殺予防と危機介入）
- ⑬個人・組織への介入（ポジティブメンタルヘルス）
- ⑭個人・組織への介入（リスクマネジメント）
- ⑮個人・組織への介入（職場環境改善）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ①産業・労働の現場で起こっている主要な今日的トピックについて理解できる。
- ②個人や組織への介入に必要な基本的知識を学び、支援の具体策を考えることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「各専門領域において高度な専門知識、研究能力、技能を身に付ける」及び「高度専門職業人としての実践能力を身に付ける」との目的を目指すものである

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
(DP3)【課題を発見し、解決する力】

■成績評価基準と方法

課題の発表内容（30%）
ディスカッション参加態度と内容（40%）
レポート（30%）

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜資料配布

【参考文献】

「産業と組織の心理学」池田浩 サイエンス社
「<キーワード心理学シリーズ12>産業・組織」角山剛 新曜社
「産業心理臨床実践」金井篤子（編） ナカニシヤ出版
「産業心理学への招待」佐々木土師二 有斐閣ブックス
「産業・組織心理学エッセンシャルズ〔改訂三版〕」外島裕・田中堅一郎（編） ナカニシヤ出版
「産業・組織心理学〔改訂版〕」馬場昌雄・馬場房子・岡村一成（監） 白桃書房
「よくわかる産業・組織心理学」山口裕幸・金井篤子（編） ミネルヴァ書房

■授業外学習

学部習得レベルの「産業・組織心理学」について、テキスト等を参照し該当部分に関2023(令和5)4月1日
する予習や、疑問点の洗い出しをする(60分程度)
講義内で得た知識や課題について、理解を深めるための復習をする(60分程度)
日頃より社会情勢やニュースについて興味・関心を持ち、企業や労働者、消費者を取り
巻く現象や現実を理解する。

■その他

多角的に物事を捉える力や具体的に考える力を身に付けるため、積極的で活発なディスカッションを期待する。

※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	心理支援に関する理論と実践
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	松浦 秀太、鈴木 憲治

■講義の目的および概要

本講義の目的は、公認心理師の実践で用いられる心理支援のアプローチ（①力動論、②認知論・行動論、③その他の心理療法）について基本的な理論と方法、その実践を学ぶことである。そしてその上で、それらの相談、助言、指導等への応用、支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整についての理解を深めることを目的としている。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義は医療保健、教育、福祉、司法犯罪に関わる臨床現場で実務経験のある教員が担当する。なお、講義の多くは講義もしくは演習形式で行う。パワーポイント使用。受講者には適宜資料を配布する。必要に応じてグループワークやディスカッションを取り入れるなど、能動的な学修を目指す。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、講義内で解説する。

■授業計画

概ね以下の予定に沿って講義を展開する。進行状況によって、順序や内容は変更が生じる可能性がある。

- ① オリエンテーション・代表的な心理療法について【鈴木・松浦】
- ② 力動論に基づく心理療法の理論と方法(1)総論【松浦】
- ③ 力動論に基づく心理療法の理論と方法(2)見立て【松浦】
- ④ 力動論に基づく心理療法の理論と方法(3)分析的枠組みと態度【松浦】
- ⑤ 力動論に基づく心理療法の理論と方法(4)分析的関わり【松浦】
- ⑥ 力動論に基づく心理療法の理論と方法(5)心的変化【松浦】
- ⑦ 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法(1)総論【鈴木】
- ⑧ 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法(2)CRAFT【鈴木】
- ⑨ 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法(3)司法・犯罪分野での実践【鈴木】
- ⑩ 行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法(4)教育分野での実践【鈴木】
- ⑪ その他の心理療法の理論と方法(1)総論【鈴木】
- ⑫ その他の心理療法の理論と方法(2)家族療法【鈴木】
- ⑬ その他の心理療法の理論と方法(3)司法・犯罪分野、教育分野での実践【鈴木】
- ⑭ 心理に関する相談、助言、指導等一事例検討①【鈴木・松浦】
- ⑮ 心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じた適切な支援方法の選択・調整一事例検討②【鈴木・松浦】

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

代表的な心理療法並びにカウンセリングの歴史、概念、意義及び適応について概説できる。

訪問による支援や地域支援の意義について概説できる。

心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じて適切な支援方法を選択・調整することができる。

良好な人間関係を築くためのコミュニケーション能力を身につける。

心理療法やカウンセリングの適用には限界があることを説明できる。

心理に関する支援を要する者等のプライバシーに配慮できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

(DP1) 【専門知識・技能を活用する力】

(DP2) 【コミュニケーション能力】

(DP4) 【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

以下の3点で評価する。

- A) 毎回のリフレクションシート：40%
- B) 心理療法に関するレポート：30%
- C) 支援に関するレポート：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】
講義時に紹介する。

【参考文献】

- ・吾妻 壮 (2018). 精神分析的アプローチの理解と実践. 岩崎学術出版社.
- ・藤山直樹 (2008). 集中講義・精神分析(上)―精神分析とは何か／フロイトの仕事. 岩崎学術出版社.
- ・松木邦裕 (2016). 改訂増補 対象関係論的心理療法入門―精神分析的アプローチのすすめ. 金剛出版.
- ・成田善弘 (2015). 新版 精神療法家の仕事―面接と面接者. 金剛出版.
- ・山崎孝明 (2021). 精神分析の歩き方. 金剛出版.

■授業外学習

【具体的な内容】

毎回の授業の前に指定された文献を読む事で、講義の理解が深められ、ロールプレイやディスカッションもより有益になります。必ず文献を読んで授業に参加してください。

心理療法と支援についてのレポートを提出してもらう。

心理的支援が必要な人の特性や、適切な支援を行うために、心理的な問題を含む社会問題（不登校・自殺対策・高齢者対策・就労支援など）について普段から情報収集をすること。

【必要な時間】

事前事後学習として概ね2時間を目安とする。

■その他

※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	心理的アセスメントに関する理論と実践
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	渡邊 紀子

■講義の目的および概要

昨今、神経発達症（発達障害）の過剰診断と過少診断が問題となっています。この問題の解消のためには、適切な心理アセスメントが求められます。心理アセスメントはセラピストがクライアントを知る手掛かりであり、同時に、クライアント自身が自分を知る手立てとなります。本講義では、日々の臨床実践に直結できるよう、「クライアントの役に立つアセスメント」という視点を拠り所として、アセスメントの技術と解釈を学びます。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義は、医療機関および教育機関にて心理検査を用いたアセスメント実務経験のある教員が、心理検査の理論と技術を習得できるよう、講義と実習を実施します。具体的には、神経発達症の基本的知識を解説した後、アセスメントツールとして臨床的に使用頻度の高い心理検査を幾つか取り上げ、その技術修得のための検査実習を行います。

【課題に対するフィードバックの方法】

授業内で適宜、解説およびフィードバックを行います。

■授業計画

【Ⅰ 公認心理師の実践における心理的アセスメントの意義】

①ガイダンス

【Ⅱ 心理的アセスメントに関する理論と実践】

- ②児童・成人それぞれの神経発達症の臨床的特徴
- ③M-CHAT
- ④PARS-TR
- ⑤MSPA
- ⑥AQ-J
- ⑦CAARS
- ⑧Conners3
- ⑨ADOS-2（モジュール3）
- ⑩ADOS-2（モジュール4）
- ⑪Vineland-II 適応行動尺度

【Ⅲ 心理に関する相談、助言、指導等への上記Ⅰ及びⅡの応用】

- ⑫データに基づいた支援計画に関する概説
- ⑬アセスメントからトリートメントへの繋げ方
- ⑭AFS（アセスメント・フィードバック・セッション）の意義と基本原則
- ⑮AFS（アセスメント・フィードバック・セッション）の実施方法

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

各心理検査の正しい実施、データ解析、臨床的解釈ができる。
それをもとに、適切な心理アセスメントを行うことができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

クライアントの役に立つ心理アセスメントを実践できる能力を身に付ける。

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
 (DP2)【コミュニケーション能力】
 (DP3)【課題を発見し、解決する力】
 (DP6)【社会に貢献する姿勢】

■成績評価基準と方法

単位認定レポート提出：40%
 小課題提出：30%
 検査実技：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜レジュメを配布

■授業外学習

【具体的な内容】

必ず前回の授業内容を復習してから出席してください。
 予習・復習の時間はそれぞれ2時間を目安とします。

■その他

本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	心の健康教育に関する理論と実践
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	橋本 久美

■講義の目的および概要

本講義は、臨床心理に関する高度な知識と技能の修得及び現代社会の臨床心理学的課題の理解を目的とする。将来の公認心理師としてクライアントに関わっていく上で不可欠な「心の健康教育に関する理論と実践」について学び、具体的に実践する力を身につける。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義では、公認心理師・臨床心理士資格を持ち、教育領域におけるスクールカウンセラーや産業領域でのカウンセリングなど実務経験のある教員が、「心の健康教育に関する理論とその実践」について知識の習得を目的とした講義を行う。基本的に講義形式ではあるが、担当の文献を調べてレジュメを作成した上での発表や、テーマを設けての討議を交えて進行する。

【課題に対するフィードバックの方法】

発表におけるディスカッション内容の記録にコメントをする。また、内容の理解が不十分だと判断した場合には追加課題を課し、到達度をコメントする。適宜、manabaを通じて資料を配布する。

■授業計画

- ①心の健康とは何か
- ②感情と健康のメカニズム
- ③認知と行動のメカニズム
- ④心理的ストレスについて
- ⑤社会的感情と健康行動
- ⑥心的外傷体験と健康の維持
- ⑦生活習慣と社会的行動：喫煙・飲酒・食行動など
- ⑧睡眠と身体活動
- ⑨健康の維持・予防としての医療サポート
- ⑩健康心理学の応用とその可能性
- ⑪心の健康を維持・向上するための心理療法：自律訓練法・筋弛緩法
- ⑫心の健康を維持・向上するための心理療法：バイオフィードバック
- ⑬心の健康を維持・向上するための心理療法：マインドフルネス（セルフコンパッションを中心に）
- ⑭心理療法と生物学的エビデンス
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

心の健康教育に関わる基本的理論を理解し、その応用的実践事例での学びを、自らのクライアント理解・実践に活かすこと。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理に関する高度な知識と技能」の修得をすることで、現場実践におけるより応用的な課題に対応できる能力を身につける

■成績評価基準と方法

担当文献レジュメ及び発表の評価 30% 小テストで測定する理論と技法の理解度 30% 最終レポート 40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】必要に応じて紹介する

【参考文献】保健と健康の心理学 ポジティブヘルスの実現 大竹恵子 編著 ナカニシヤ出版

■授業外学習

【具体的な内容】予習として心の健康教育に関する論文や技法を個々人で調べ、発表レジュメを作成する。また、授業で個々人が選んだ心理的技法を模擬実践する。復習として毎回の授業内ディスカッションで得られた知見を広げ深化させるために文献を探し、プリントとしてまとめる。

【必要な時間】事前事後学習にはそれぞれ2時間以上かけるのが望ましい

■その他

本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学院においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	心理実践実習 I
開講期・単位	1年 通年・選択 2単位・実習
担当者	佐々木 淑子、岡田 顕宏

■講義の目的および概要

公認心理師に必要な基本的な心構えや態度を確実に身に着けるため、大学付属機関での実習活動を行う。具体的には、心理相談研究所をベースとして行われる種々の活動に、指導教員の指導を受けながら参加する。その活動を通して、公認心理師を目指す上で大事な学問的知識、倫理、社会性、コミュニケーション能力などを理論と実践のフィールド両面から学ぶ。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

精神科臨床の経験を有し、さらに、本授業のフィールドとなる心理相談研究所でカウンセリング業務や子育て支援・地域支援等の実務経験のある教員が、心理臨床の実務および多職種連携や地域支援等の要点を伝えていく。心理相談研究所が行う種々の活動に、指導教員の事前指導・フィールドでの指導および事後指導など、その段階ごとに受講学生と協議を重ね、振り返りを行いながら進めていく。

【課題に対するフィードバックの方法】

多様な活動が行われるのだが、それぞれに対して、事前指導・実践の場、さらに事後指導等で、直接的なフィードバックと実習報告書へのコメントという形でフィードバックを行う。

■授業計画

概ね以下の内容を扱う。90時間の実習内容と、事前・事後指導内容を記す。

- ① オリエンテーションおよび実習計画作成・各実習への事前指導
- ② 子育て支援活動1
- ③ 子育て支援活動2
- ④ 子育て支援活動3
- ⑤ 子育て支援活動4
- ⑥ 子育て支援活動5
- ⑦ 子育て支援活動6
- ⑧ 子育て支援活動7
- ⑨ 野外で遊ぶでの活動
- ⑩ 心理相談研究所電話受付・事務受付実習1
- ⑪ 心理相談研究所電話受付・事務受付実習2
- ⑫ 心理相談研究所陪席実習1
- ⑬ 心理相談研究所陪席実習2
- ⑭ 事例検討会1
- ⑮ 事例検討会2

各実習は総計して90時間行う。以下の実習が含まれる。

【子育て支援活動】定期的に開催される子育て支援活動である

「安心子育て応援倶楽部」への参加および夏冬開催予定の「野外で遊ぶ」への参加。これらの活動は、対面を基本として実施予定であるが、状況を見ながら、オンラインによる方式、子育て通信の発行など多様な形を取りながら運営される可能性がある。

【心理相談研究電話受付・事務受付実習】

【陪席実習】

【事例検討会】

【心理相談研究所保管のフィールド活動資料閲覧】

それぞれの実習に、教員は関わる。また、実践した実習の報告・実習記録への振り返り、教員からのコメントなども含まれる。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

実習活動を通して、公認心理師として必要な実践的な基礎知識、コミュニケーション・スキル等の社会性を身につけ、心理学的支援についての理解を深める。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通じ、地域社会に貢献する人材を輩出する」に基づき、臨床心理学の知識の現場への活用及び地域社会への貢献の実際を体験的に学習することで、専門家としての土台作りを行う。

■成績評価基準と方法

- ① 心理相談研究所における実習評価：50%
- ② 実習記録および報告書評価：50%

■テキスト・参考文献

適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

「実習の手引き」を読んでおく。次回の実習前に、必要な資料や用具をそろえ、資料や文献を読み実習内容を把握する。事後学習としては、フィールドでの実習後、速やかに実習記録をまとめ、学内での振り返りに備える。教員からのコメントを読み、次回の実習に活かせるように努める。

【必要な時間】

事前・事後学習の時間はそれぞれ2時間を目安とする。

■その他

現場に赴いての実践活動になるため、迅速かつ柔軟な判断力、活動性、マナーや協調性等の社会性が求められる。事前連絡のない遅刻や欠席は認められない。

「授業計画」で述べてあるように、社会状況や心理相談研究所の開閉状況を見ながら柔軟に実習活動を組み立て調整していく。よって、担当教員との相互連絡をしっかりとっていくことが求められる。

また、本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められている。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要がある。

科目名	心理実践実習Ⅱ
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・実習
担当者	本間 芳文、鈴木 憲治

■講義の目的および概要

「教育分野」、「福祉分野」、「産業・労働分野」、「司法・犯罪分野」から2、3分野を取り出し、支援を必要とする人の①「心理状態の観察と分析」、②「心理相談に応じ、助言、指導をする」、③その関係者に対する相談に応じ、助言、指導を行う」、④「心の健康に関する教育や情報の提供」について実習を通して、公認心理師の役割について学ぶ。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

大学院で授業のねらいと実習の進め方の講義を行う。その指示に従って、上記の2、3の分野に向き合わせて実習時間90時間を満たす実習を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

授業内、あるいは実習先で出された課題は、それぞれの実習先の指導者や講義担当者の指導の中で指導を行うこととする。

■授業計画

- ①～大学院で、授業のねらいと実習の進め方や留意事項について説明を行う。
- ②～⑦ 上記の指示内容に基づき、「前半の45時間」を満たす実習を行う。その実習には、必要に応じて大学院教員も出向き、実習先指導者と連携を取りながら実習の目的に対応した実習を行う。実習生が実習後速やかに「実習の記録」を書き、実習先指導者の指導を受け、後日大学院教員にその旨報告する。
ここでの実習は、「教育分野」、「福祉分野」、「産業・労働分野」、「司法分野」から大学院教員が計画を立てて選び、個別に振り分ける。
- ⑧大学院で上記②～⑦の実習記録と報告をもとに、大学院教員が実習の成果が得られるよう実習前半の振り返りの指導を行う。
- ⑨～⑭大学院教員の計画に基づき、各自二つ目の分野の後半45時間の実習を行う。ここでは、前半と実習分野を変える。他は、上記の「前半の実習」に準じる。
- ⑮大学院で、上記⑨～⑭の実習記録と報告をもとに、大学教員が実習の成果が得られるよう後半実習の振り返りと、全体のまとめの指導を行う。
また、必要に応じて「司法・犯罪」の分野の観察実習を1.5時間程度行うこともある。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】主に「教育分野」、「福祉分野」、「産業・労働分野」、「司法分野」から2、3分野を取り出し、支援を必要とする人の「①心理状態の観察と分析」、②「心理相談に応じ、助言、指導をする」、③その関係者に対する相談に応じ、助言、指導を行う」、④「心の健康に関する教育や情報の提供」について実習を通して、公認心理師の役割について具体的に説明できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】「自立して生きていくための専門知識、技能を身に付けている学生に学位を授与する」に基づき、学習上又は生活上の心理的困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識や支援方法を学ぶ。
(DP4) 多様性の理解と協働する力

■成績評価基準と方法

- ①実習先の実習評価：
- ②大学院での講義の理解と報告や提出物の内容：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】特に指定しない。

【参考文献】一般財団法人「日本心理研修センター」監修「公認心理師現任者講習会テキスト」（金剛出版）

■授業外学習

【具体的な内容】

実習先が決まったら、事前に実習先の業務概要や特色などを調べる。
実習後は、その日のうちに実習日誌を書き、翌日実習先指導者に提出し、指導を受けること。

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

①自分の体調管理に努めること。②実習先はすべて対人支援の場なので、実習指導者2023(令和5)4月1日の指示を必ず守って実習すること。③困った事や迷うことは、実習指導者や教員に速やかに申し出て、指示に従うこと。※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目である。また実習費は2施設分で20,000円事前に証紙で納付すること。

科目名	臨床心理実習Ⅱ
開講期・単位	2年 通年・必修 2単位・実習
担当者	鈴木 憲治、高野 創子

■講義の目的および概要

本科目は、日本臨床心理士資格認定協会第1種指定校として修了認定の方針に基づく。本実習の目的は、修士1年目で学習してきた理論やスキルを実際の事例に活かせるようになることが目的である。具体的には心理相談研究所で担当する事例を通して、指導を受けるための事例のまとめ方、発表の仕方などを学び、アセスメントとセラピーをつなぐ事例理解、臨床家として必要な資質を自覚することを目標とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本科目は、教育現場におけるスクールカウンセラー、医療機関における個別心理療法、心理検査、司法領域で家族療法の実務経験のある教員が、心理支援における視点を生かしてアセスメントとセラピーの基本を理解できる講義を実施する。講義展開については、大きく分けて事例担当実習と事例発表実習の二つの実習で構成されている。

- ①心理相談研究所の事例を担当し、毎回のケース終了後に記録をつける。
- ②担当事例の記録を基に事例検討会に向けた報告書を作成し、事例検討会形式の実習講義にて発表（プレゼンテーション）し、ディスカッションを通して教員と他の受講者からの意見・助言を受ける。それらの意見・助言を事例の展開、解決に活かす。

【課題に対するフィードバックの方法】

事例検討会形式の実習講義の中で、ケース記録の付け方に関する添削指導を行う。また事例理解の視点についてディスカッションを重ねる過程で、事例理解を一層深め、その後の面接対応に活かす。

■授業計画

実習の進捗状況に応じて概ね、それぞれ以下のように進める。
心理相談研究所内での実習については★、事例検討会形式での実習講義は☆とする。

- | | |
|---|------------------|
| 1☆オリエンテーション | 実習記録の付け方 |
| 2★初回来談時 面接陪席 | 主訴の確認 |
| 3☆上記面接陪席報告とディスカッション | 主訴内容の検討Ⅰ |
| 4★アセスメント面接陪席Ⅰ | 成育歴聴取 |
| 5☆上記面接陪席報告とディスカッション | 成育歴からの見立て作成 |
| 6★アセスメント面接陪席Ⅱ | 家族関係の聴取 |
| 7☆上記面接陪席報告とディスカッション | 家族力動の見立て |
| 8★アセスメント面接陪席Ⅲ | 治療・支援方針の検討 |
| 9☆上記面接陪席報告とディスカッション | 治療契約の確認 |
| 10★初期面接Ⅰ | ラポール形成（傾聴） |
| 11☆上記面接に対するディスカッション | ラポール形成確認とフィードバック |
| 12★初期面接Ⅱ | ラポール形成（傾聴） |
| 13☆上記面接に対するディスカッション | ラポール形成確認とフィードバック |
| 14★初期面接Ⅲ | ラポール形成（傾聴） |
| 15☆上記面接に対するディスカッション | 面接中期に向けての見立て再検討 |
| 16★中期面接Ⅰ | 面接の状況把握と介入 |
| 17☆上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討 | 面接状況の把握と介入 |
| 18★中期面接Ⅱ | 面接状況の把握と介入 |
| 19☆上記面接に対する進捗状況に応じた介入方法の再検討 | 面接の状況把握と介入 |
| 20★中期面接Ⅲ | 面接の状況把握と介入 |
| 21☆上記面接に対する面接終結に向けての治療計画の検討 | |
| 22☆事例検討のための資料の作り方 | |
| 23☆M1との合同事例検討会 | |
| 24☆M1との外部講師を招聘しての検討会 | |
| 25★終結に向けた面接Ⅰ | 終わりを告げること |
| 26☆上記面接に対する関わりの確認とクライアントの変化について | |
| 27★終結に向けた面接Ⅱ | 別れに対する心の痛みに関する支援 |
| 28☆上記面接に関するクライアントの反応に対する支援の検討 | |
| 29★最終面接 | 別れ、または引き継事項について |
| 30☆本実習のまとめ 担当事例の支援の有効性について検討 ケースを終えてクライアントから学んだこと | |

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ①実際に事例を担当することを通し、臨床心理学的実践に関する知識や理論が、実践の場で如何に役立つかを理解し、面接の中で役立てることができる。
- ②実践的学習であるスーパービジョンや事例検討会が臨床心理学的学習及び研究に占める重要性を理解し、報告資料をまとめることができる。
- ③記録の取り方、保管、管理について、臨床心理士の守秘や倫理を理解した上で厳重に取り扱うことができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

本研究科の学位授与に関する下記の能力を総合的に身につける。

- DP1「臨床心理に関する高度な知識と技能」
DP2「臨床心理学的研究法と観察事実の分析法」
DP3「自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能」
DP4「現代社会の臨床心理的課題の理解」

■成績評価基準と方法

- ①担当事例の発表内容評価：30%
- ②他が担当した事例発表内容への関与度、貢献度：20%
- ③事例の記録内容、記録の保管・管理：10%
- ④学期末課題評価（事例検討会資料）：40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

本研究科の実習の手引き、その他、適宜プリントを配布する。

【参考文献】

「心理臨床の発想と実践（心理臨床の基礎 1）」下山晴彦著 2000年 岩波書店
「精神分析的な心理療法の実践—クライアントに出会う前に」馬場禮子著 1999年 岩崎学術出版社

■授業外学習

【具体的な内容】

1年次に学んだ知識や実習体験を振り返り、実際の事例担当に備えておくこと。また、担当症例に関連する幾つかの事例研究論文、文献を読んで研鑽すること。

【必要な時間】

概ね2時間を目安とする。
臨床心理事例指導Ⅰ・Ⅱを並行して受講しなければならない。

■その他

授業の進展は各受講者の担当するケースの進展状況を勘案しながら調整する。

科目名	課題研究指導Ⅰ
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	橋本 久美

■講義の目的および概要

担当者の基本テーマに沿いつつ、学生個々の興味・関心に基づいて研究テーマを設定し、研究計画をたてて、調査・研究を進め、中間報告としてまとめる。中間報告は春学期1回、秋学期1回行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】臨床現場で研究テーマに即した事例と関わったり、データ収集に努めながら、蓄積した資料を、ゼミ内での発表や討論を通して検討し、仮説を精査し、研究を進めていく。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が指導する。

【課題に対するフィードバックの方法】教員や学生の前でのプレゼンテーション発表に対して、参加者の評価を求め、そのフィードバックをすることで、修士論文のよりよい完成に近づけるよう、意欲を促進する。

■授業計画

1. 論文作成のための基本指導は既に1年次から始まっている。担当教員である研究アドバイザーの下で、臨床心理学に関連した研究を進める。
2. 1年次での成果を基礎に、さらに論文講読を重ね研究テーマを決定し、より詳細で具体的な研究計画をたてる(①～⑤)。
3. 調査研究計画に基づきデータの収集に努める。また、研究テーマに即した臨床現場のフィールドに赴いたり、事例との関わりを続け記録を蓄積していく(⑥～⑩)。
4. 担当教員の指導を受けながら、中間報告書をまとめる。中間報告発表会で、多くの教員からの評価や指導を受けたり、他の学生からの意見も参考にし、後期の論文完成に向かう(⑪)。中間発表は、途中経過の発表という意味合いにとどまるものではなく、これまでの成果を発表し、多くの議論と批判を頂いて、さらに論文を精査するものである。
中間発表でのフィードバックを踏まえて研究作業を進める(⑫～⑮)。
5. 担当教員として主たる研究アドバイザーである研究主査1名と、研究を側面からサポートする研究副査1名が関わる。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマを設定し、研究計画を具体的にたてて資料・論文を集めて中間報告書にまとめる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」という本研究科の目的を達成するため、下記の知識・技能を修得するものとする。

- ① 臨床心理に関する高度な知識と技能
- ② 臨床心理学的研究法と観察事実の分析法
- ③ 自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能
- ④ 現代社会の臨床心理的課題の理解

■成績評価基準と方法

授業への出席、調査・研究の進行状況の報告・発表の仕方、作成された中間報告書などを総合的に評価する。

中間報告は、論文提出の条件である。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

【参考文献】

個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

■授業外学習

【具体的な内容】

課題研究指導Ⅰ・Ⅱの準備として、1年目で心理学研究法や、臨床心理学研究法で学んだ内容を理解しておくこと。

【必要な時間】

事前・事後共におおむね2時間程度。

■その他

課題研究は、入学時に提出した研究テーマを元に準備を進める。1年目での講義、演習、実習などで、それぞれ研究に必要な知識や研究手法などを意識した履修をすること。また、アドバイザーとの相談の機会も活用し、準備を進めること。

科目名	課題研究指導Ⅱ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	橋本 久美

■講義の目的および概要

前期にまとめた中間報告書の内容をさらに発展させながら、それらの研究成果を研究として完成させる。

「課題研究指導Ⅰ」で培った理解・分析をさらに発展させていくことに努め、仮説を実証し、考察力を深め、最終的には論文にまとめていく。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

臨床現場での実践や調査の過程を報告し、全体での討議と担当者の指導を受けながら、各自で主体的に研究を進める。実践、調査、データ処理とまとめ、考察の過程を通して教員の指導を受けながら、学生が主体的に研究を進める。臨床現場での実務経験豊富な臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員が指導する。

【課題に対するフィードバックの方法】

検討内容を共有し、論文作成をすすめていく。

■授業計画

1. 前期に引き続き、臨床心理学の諸概念や心理的援助などの心理臨床に関連した研究を進めていく。
2. 各自実験調査もしくは臨床現場での実践によるデータを蓄積していく。
3. 授業内での発表や討論、担当教員の指導などから、臨床事例あるいは臨床心理学的データに対する理論的裏付けを得ていく。そして事例への分析・考察あるいはデータの統計的解析や考察も行いながら研究報告として論文にまとめていく。(①～⑩)
4. 第2回中間報告発表会の中で、参加した他の教員や学生から得た意見および指導を論文作成に活かす。(⑪)
5. これらの過程を重ねながら、最終的に修士論文を完成させ提出する。(⑫～⑮)

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

研究テーマを設定し、研究計画を具体的にたて、資料・論文を集めて論文を完成させ、提出する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通じ、地域社会に貢献する人材を輩出する」という本研究科の目的を達成するため、下記の知識・技能を修得するものとします。

- ① 臨床心理に関する高度な知識と技能
- ② 臨床心理学的研究法と観察事実の分析法
- ③ 自己の意見や思考を論理的に伝える論文作成能力と発表の技能
- ④ 現代社会の臨床心理的課題の理解

■成績評価基準と方法

提出された課題研究論文に関して、審査を行いその内容を評価する。併せて、研究科在籍期間全体を通しての、心理臨床の実践に関しても面接および記録を通して評価し、総合的な判断の上で、単位認定を行う。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

【参考文献】

個別に適宜推薦する。積極的に先行研究の論文収集に努めること。

■授業外学習

【具体的な内容】

課題研究指導Ⅰ・Ⅱの準備として、1年目で心理学の研究法や、臨床心理学研究法を必ず理解しておくこと。

【必要な時間】

事前・事後共に2時間程度。

■その他

課題研究は、入学前に提出した研究テーマをもとに準備を進める。1年目での講義、演習、実習などで、それぞれの研究に必要な知識や研究手法などを意識した履修をすること。また、アドバイザーとの相談の機会も活用し、準備を進めること。 2023(令和5)4月1日

科目名	臨床心理実習 I (心理実践実習IV)
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・実習
担当者	佐々木 淑子、松浦 秀太

■講義の目的および概要

学外施設（主に医療機関）での実習体験を通じ、臨床心理士／公認心理師の職責や役割を実践的に把握する。また、実際のケースに触れると同時に、施設の機能や社会的役割を知り、さまざまな職種との連携を通して、人間性や社会性豊かな専門家を指す上での下地を身につける。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本科目は実習である。精神科や児童精神科など医療機関での実務経験を有する教員が担当する。

実習施設での実習活動（外部実習、90時間以上）と学内講義・指導のふたつで構成されている。受講生はこのふたつの指導を受けることとなる。外部実習では、学外実習施設へ赴き、施設実習担当者の指導の下、心理臨床活動（ケース担当）を実践する。学内講義では各々の実習報告をもとに受講生全員で実習内容についてディスカッションを行う。心理に関する支援を要する者に関する技能や理解、チームアプローチの実際、職種間の連携や臨床心理士／公認心理師の倫理などについて幅広く学ぶ。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題および実習先からの評価については、講義内でフィードバックを行う。

■授業計画

概ね以下の予定に沿って講義を展開する。施設の受け入れ状況などにより、順序や内容は変更が生じる可能性がある。

- ① オリエンテーション・事前指導
- ② 事前学習、実習施設事前訪問
- ③ 施設実習（ケース担当実習）（1）
- ④ 施設実習（ケース担当実習）（2）
- ⑤ 施設実習（ケース担当実習）（3）
- ⑥ 施設実習（ケース担当実習）（4）
- ⑦ 施設実習（ケース担当実習）（5）
- ⑧ 施設実習（ケース担当実習）（6）
- ⑨ 施設実習（ケース担当実習）（7）
- ⑩ 施設実習（ケース担当実習）（8）
- ⑪ 施設実習（ケース担当実習）（9）
- ⑫ 施設実習（ケース担当実習）（10）
- ⑬ 施設実習（ケース担当実習）（11）
- ⑭ 施設実習（ケース担当実習）（12）
- ⑮ フィードバック

※ 実習のフィードバック（学内授業）は実習状況を見ながら適宜行う。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

到達目標は以下のふたつである。

- ① 心理臨床の現場に触れ、理論と実践を統合していくことの重要性を知る。
- ② 心理臨床家として必要な態度や技術および社会性の基本を身につけ、進むべき自らのフィールドを焦点化する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
 (DP2)【コミュニケーション能力】
 (DP4)【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

評価は、以下の3点で行う。

- A) 実習先の実習担当者の評価：40%
- B) 学内講義時の発表レポート、ディスカッション：30%
- C) 学期末レポート：30%

※ A)～C) 全てに点数がついていることを単位取得最低条件とする。

※ 所定の実習時間（40時間）が期限内に満たせない場合、評価は不可となる。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

日本デイケア学会 編 (2016). 新・精神科デイケアQ&A. 中央法規出版.
津川律子・橋玲子 編 (2022). 心理職を目指す大学院生のための精神科実習ガイド.
誠信書房.

【参考文献】

適宜紹介します。

■授業外学習

【具体的な内容】

実習開始前に実習に関するオリエンテーションを行う場合がある。受講を希望する学生はこれに必ず参加し、学外実習に臨む必要な態度を自覚する。実習先配属決定後は、施設の理念、概要など下調べをしておくことが必要である。事後には講義時に指摘された点について振り返り、実習活動に活かせるよう関連図書などを読むこと。また、便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておくこと。
本講義を履修する者は1年次の必修科目全てと「精神医学特論」、「保健医療分野に関する理論と支援の展開」の単位を修得していなければならない。

【必要な時間】

上述のような事前及び事後学習はそれぞれ2時間を目安とする。

■その他

本実習を履修するにあたり、以下の注意事項をよく読み、理解しておくことが必要となる。

【注意事項】

- 公欠・病欠以外の欠席は認められない。病欠の場合は必ず医療機関へ行き、欠席した回から1週間以内に必要な書類を提出すること。
- やむを得ない理由で欠席もしくは遅刻しなくてはならない場合、担当教員（松浦、佐々木）に事前に連絡をすること（事前連絡が難しい場合は、事後直ちに連絡すること）。欠席した回から2日以内に連絡がない場合、実習活動は中止される。
- 課題などの提出物が期限内に提出されなかった場合、評価は「不可」となる。
- 初回講義時に「心理学研究科便覧」を持参すること。
- 外部実習に赴くには、マナーや協調性などの社会性が必要となる。そのような自覚を持ち臨むことが必要である。
- 実習参加費として実習費を徴収する（1万円）。
- 「臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅳ）」の単位を修得していない者は、「心理実践実習Ⅴ」は履修できない。

※ 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

【実習時間】 90時間以上

【実習分野】 学外実習、医療機関

【実習種別】 ケース担当実習

科目名	心理実践実習Ⅲ
開講期・単位	2年 通年・選択 2単位・実習
担当者	佐々木 淑子、岡田 顕宏

■講義の目的および概要

学内施設である心理相談研究所において、ケース担当実習を行う。インテーク面接や心理検査業務、心理面接業務等を教員の指導を受けながら経験することで、公認心理師として必要な援助の実際を理解し、スキルを身に付けていく。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

精神科臨床心理査定および心理面接、多職種連携等の臨床の実務経験のある教員が、心理臨床の実際的な業務内容を指導する。具体的には心理相談研究所に来談し、受講生が担当するケースの心理面接および心理検査に対して準備段階から実際の臨床業務、さらに結果のまとめ方・報告・保管等の事後指導まで含めた過程を指導する。授業時の事例報告の場では、受講生および担当教員間でグループ・ディスカッションを重ね理解を深めていく。

【課題に対するフィードバックの方法】

心理相談研究所における心理面接及び心理検査の一連の流れを逐次指導する。および授業時の事例報告時には、様々な課題を解説し、フィードバックする。

■授業計画

受講生は、内部実習機関である心理相談研究所において、来談ケースに対して心理検査および心理検査実習を90時間以上、担当する。

- ① オリエンテーション
- ② ケース担当実習
- ③ ケース担当実習
- ④ ケース担当実習
- ⑤ ケース担当実習
- ⑥ ケース担当実習
- ⑦ ケース担当実習
- ⑧ ケース担当実習
- ⑨ ケース担当実習
- ⑩ ケース担当実習
- ⑪ ケース担当実習
- ⑫ ケース担当実習
- ⑬ ケース担当実習
- ⑭ ケース担当実習
- ⑮ ケース担当実習

各実習に対する記録作成法、報告書作成法、記録の保管法等諸々の指導も含まれる。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

実際にケースを担当し、理論と実践の照合、多面的で流動的な見立て等を心理面接や心理検査実施に活用することで、公認心理師としての実践的援助のありかたを自覚し、専門家としてスタートに立つ。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」に基づき、臨床実践を積み重ねる体験により、臨床心理学の知見の実際的運用の効用を実感することで、専門家としてスタートをきれるようにする。

- (DP1)【専門知識・技能を活用する力】
 (DP2)【コミュニケーション能力】
 (DP3)【課題を発見し、解決する力】
 (DP4)【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

- ① 心理相談研究所における実習評価：50%
- ② 実習記録・報告書・発表等の評価：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

なし

【参考文献】

適宜、紹介する

■授業外学習

【具体的な内容】

理論および知識を、出会った事例に活かせるように常に新しく吸収するように努めることが重要である。
便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておく。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

社会状況および心理相談研究所の開閉状況を見ながら、実習計画や授業計画を柔軟に組み立て調整していく。
本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省・厚生労働省で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

科目名	心理実践実習Ⅴ
開講期・単位	2年 春学期・選択 2単位・実習
担当者	品田 一郎、高野 創子

■講義の目的および概要

学外の精神科医療機関で実習し、公認心理師としてのモデルを実践的に把握する。心理実践実習Ⅳでの実習を踏まえ、実際のケースに触れること、施設の機能や社会的役割を知り、様々な職員との連携を通して、人間性や社会性豊かな専門家を指す上での下地とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本科目は実習である。精神科臨床および、司法臨床の実務経験のある教員が担当する。実習施設での実習活動（外部実習90時間以上）と学内講義・指導の二つで構成されている。受講生はこの二つの指導を受けなければならない。外部実習では学外実習施設へ赴き、施設実習担当者の指導のもとに、心理臨床活動を実践する。並行して行われる学内講義では各々の実習報告をもとに受講生全員で実習内容についてディスカッションを行う。多様な臨床現場があること、および職種間の連携などについて幅広く学ぶ。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題及び実習先からの評価については、講義内でフィードバックを行う

■授業計画

概ね以下の予定に沿って講義を展開する。施設の受け入れ状況などにより順序や内容が変更になることもある。

- ①オリエンテーション・事前指導：
 - 実習にあたって講義内容の説明と実習の留意点について
- ②事前学習・事前訪問：実習施設の理念、社会的役割、スタッフおよび利用者の概要について臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅳ）での実習を整理してまとめて報告を行う。また担当教員と実習予定学生が実習施設へ事前打ち合わせに出向く。
- ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬
 - 個々の実習施設・機関において週一回程度の現場実習を行う。施設内実習担当者の指導のもとインタビュー面接、心理査定、デイケアなどの臨床心理学的援助活動を行い、ケースと関わる。毎回実習日誌と面接記録の記載を義務付け、施設内実習担当者と担当教員へ報告し、指導を受ける。
- ⑭⑮ 実習先からの評価をもとに実習の振り返りと受講生同士でのグループディスカッションを通して、実習報告書を作成する。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ①心理臨床の現場に触れ、理論と実践を統合することの重要性を理解できる。
- ②心理臨床家として必要な態度や技術、および社会性の基礎を身につけ、進むべき自らのフィールドを焦点化できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「臨床心理学の実践を通し、地域社会に貢献する人材を輩出する」という学位授与の方針に基づき、精神科臨床における臨床心理士／公認心理師の役割を理解する。

- (DP1) 【専門知識・技能を活用する力】
- (DP2) 【コミュニケーション能力】
- (DP3) 【課題を発見し、解決する力】
- (DP4) 【多様性の理解と協働する力】

■成績評価基準と方法

- ①外部実習施設の実習指導担当者の評価：40%
- ②学内講義時の発表レポート、およびディスカッション：30%
- ③学期末レポート：30%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

津川律子・橋玲子 編（2009）. 臨床心理士をめざす大学院生のための精神科実習ガイド. 精神科書房.

【参考文献】

金子和夫（監修）（2016）. 心の専門家が会う法律〔新版〕. 誠信書房.
 下山晴彦（2003）. 臨床心理学全集4 臨床心理実習論. 誠信書房.

その他、実習の進捗状況によって必要なテーマの文献を適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

講義開始前に行う事前指導・事前相談を行う。受講を希望する学生はこれに必ず参加し、学外実習に臨む必要な態度を自覚する。便覧に掲載されている「実習の手引き」を熟読しておくこと。

実習先配属決定後は、施設の理念、概要などについて調べ、文章にまとめておくことが必要である。

実習期間中は講義時に指摘された点について振り返り、実習活動に活かせるよう関連図書などを読み研鑽すること。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

* 実習費として1万円を徴収する。

・ 本実習を履修する者は臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅳ）の単位を修得していない者は本実習科目を履修することができない。

・ 実習においては、マナーや協調性などの社会性が必要となるため、その自覚をもって臨むこと。

・ 学外実習および学内講義において、事前（または事後すぐに）連絡のない欠席や遅刻は認められない。

・ 実習参加費として実習費を徴収する（1万円）

* 本科目は、公認心理師となるために必要な科目として文部科学省令・厚生労働省令で定められています。公認心理師試験を受験するためには、大学においてこの科目を修得しておく必要があります。

【実習時間】 90時間以上

【実習分野】 学外実習、医療機関

【実習種別】 ケース担当実習

科目名	臨床事例指導 I
開講期・単位	2年 春学期・必修 2単位・演習
担当者	佐々木 淑子

■講義の目的および概要

「臨床事例指導」は心理相談研究所で担当した事例について個人指導を受ける。その中で担当事例に対する理解を深め、最終的には事例論文（心理相談研究所所報の事例論文）としてまとめることが本演習の目的である。

「臨床事例指導 I」では、事例論文作成のための個人指導を受けながら、事例記録の取り方の基礎を学ぶ。また、担当事例の中間報告書を完成させることを目指す。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

臨床心理士の資格を有し、医療保健分野など臨床現場での実務経験のある教員が担当する。学内施設で行った実習の記録をもとに指導を受けて担当事例への理解を深める。それらの過程と並行しながら、事例論文として文章化する作業も進める。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、講義内で解説する。

■授業計画

概ね、以下のように展開する。事例の進行具合などにより下記計画から変更する可能性がある。

- ① オリエンテーション、事例指導 (1)、プロセスノート (1)
- ② 事例指導 (2)、プロセスノート (2)
- ③ 事例指導 (3)、プロセスノート (3)
- ④ 事例指導 (4)、プロセスノート (4)
- ⑤ 事例指導 (5)、プロセスノート (5)
- ⑥ 事例指導 (6)、論文執筆指導 (1)
- ⑦ 事例指導 (7)、論文執筆指導 (2)
- ⑧ 事例指導 (8)、論文執筆指導 (3)
- ⑨ 事例指導 (9)、論文執筆指導 (4)
- ⑩ 事例指導 (10)、論文執筆指導 (5)
- ⑪ 事例指導 (11)、論文執筆指導 (6)
- ⑫ 事例指導 (12)、論文執筆指導 (7)
- ⑬ 事例指導 (13)、論文執筆指導 (8)
- ⑭ 事例指導 (14)、論文執筆指導 (9)
- ⑮ 事例指導 (15)、論文執筆指導 (10)

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ① 心理臨床家として必要な態度や技術を身につける。
- ② 担当した事例について理解を深める。
- ③ 担当した事例について文章化にできる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 【専門知識・技能を活用する力】
 (DP3) 【課題を発見し、解決する力】
 (DP5) 【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

- ① 事例記録：40%
- ② 事例中間報告書：60%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

なし

【参考文献】

特にテキストは定めていないが、授業内で重要と思われる著書や論文を適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

心理相談研究所での担当事例について理解を深めるため、事例論文は当然のこと、カウンセリングや心理療法に関する論文や書籍を熟読することが求められる。毎回の事例担当前に前回の記録を読んでおくこと、さらに面接終了後速やかに記録化すること、指導を振り返り、次回に活かすよう努める。

【必要な時間】

予習・復習の時間はそれぞれ2時間が目安となる。

■その他

「臨床心理実習Ⅱ」を並行して履修する。

科目名	臨床事例指導Ⅱ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	佐々木 淑子

■講義の目的および概要

「臨床事例指導」は心理相談研究所で担当した事例について個人指導を受ける。その中で担当事例に対する理解を深め、事例論文を完成させることを目的としている。「臨床事例指導Ⅱ」では、個人指導を受けながら、事例理解を更に深め、担当事例を文章化することを目指す。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

臨床心理士の資格を有し、精神科臨床現場での実務経験のある教員が担当する。学内施設で行った実習の記録をもとに指導を受ける。その上で担当事例への理解を深め、文章化の作業を進める。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、講義内で解説する。

■授業計画

概ね、以下のように展開する。

- ① オリエンテーション、事例指導 (1)、論文執筆指導 (1)
- ② 事例指導 (2)、論文執筆指導 (2)
- ③ 事例指導 (3)、論文執筆指導 (3)
- ④ 事例指導 (4)、論文執筆指導 (4)
- ⑤ 事例指導 (5)、論文執筆指導 (5)
- ⑥ 事例指導 (6)、論文執筆指導 (6)
- ⑦ 事例指導 (7)、論文執筆指導 (7)
- ⑧ 事例指導 (8)、論文執筆指導 (8)
- ⑨ 事例指導 (9)、論文執筆指導 (9)
- ⑩ 事例指導 (10)、論文執筆指導 (10)
- ⑪ 事例指導 (11)、論文執筆指導 (11)
- ⑫ 事例指導 (12)、論文執筆指導 (12)
- ⑬ 事例指導 (13)、論文執筆指導 (13)
- ⑭ 事例指導 (14)、論文執筆指導 (14)
- ⑮ 事例指導 (15)、論文執筆指導 (15)

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ① 心理臨床家として必要な態度や技術を身につける。
- ② 担当した事例について理解を深める。
- ② 担当した事例について論文にできる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 【専門知識・技能を活用する力】
 (DP3) 【課題を発見し、解決する力】
 (DP5) 【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

- ① 事例記録：40%
- ② 事例論文：60%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

なし

【参考文献】

特にテキストを定めませんが、重要と思われる著書や論文を授業内で適宜紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

心理相談研究所での担当事例について理解を深めるため、事例論文は当然のこと、カウンセリングや心理療法に関する論文や書籍を熟読することが求められる。毎回の事例担当前に前回の記録を読んでおくこと、さらに面接終了後速やかに記録化すること、指導を振り返り、次回に活かすよう努める。

【必要な時間】

予習・復習の時間はそれぞれ2時間が目安となる。

■その他

「臨床心理実習Ⅱ」を並行して履修する。

科目名	地域調査法
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	牛嶋 和夫

■講義の目的および概要

地域調査にはさまざまな方法があるが、代表的な地域調査方法を学修するとともに「疲弊する地域」をどう活性化するか調査データを基に（興部町を予定）地域再生の提言出来るスキルを修得する実践的講義とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

基本的には講義方式で展開するが、アンケート調査票の設計から集計、分析までの一連の流れはグループ演習形式で行う。その他にも、適宜グループワークを取り入れた能動的学修を目指す。また、ヒアリングシート調査分析結果に基づき改善提案書を策定し、報告会も実施予定である。本講義は北海道商工会連合会の講師に就任している、地域活性化に豊富な経験と指導実績を有する現役の経営コンサルタント（実務家）が地域を総合的に分析し提案出来る地域リーダーとなるために必要とされるスキルにつき講義する。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回授業時の課題、中間レポートの課題については、コメントを付して返却するとともに、授業内で特徴的なポイントについて解説する。

■授業計画

- ① ガイダンス～地域調査法とは
- ② 地域・自治体調査の進め方
- ③ 地域総合計画（興部町）の解析
- ④ 地域課題（興部町）の解析
- ⑤ スポーツによる地域振興策そのⅠ
- ⑥ スポーツによる地域振興策そのⅡ
- ⑦ マラニックによる地域活性化
- ⑧ 興部町活性化のポイント
- ⑨ 興部町ヒアリングシート策定
- ⑩ 興部町ヒアリングシート分析
- ⑪ 興部町SWOT分析（グループワーク）
- ⑫ 興部町の課題抽出と改善方向の検討そのⅠ（グループワーク）
- ⑬ 興部町の課題抽出と改善方向の検討そのⅡ（グループワーク）
- ⑭ 興部町（商工会青年部幹部）への改善報告書策定（グループワーク）
- ⑮ 報告会実施（興部町商工会青年部幹部来校予定）報告書策定・総まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

地域調査法の基礎を正確に理解すること。また、グループワークを通じて地域の課題を抽出し、併せて調査データを参考にしながら、定性分析も加え、地域課題の解決提案出来るスキルの修得。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

地域課題の問題解決能力は、今後スポーツ健康指導者にとり不可欠な専門知識であり本講義受講により、地域貢献できるスポーツ健康指導者を養成する。

■成績評価基準と方法

毎回授業時の課題提出：20%
 中間レポート：30%
 報告書の提出：50%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

毎回manabaにて事前にプリント配布する。

【参考文献】

地域調査から自治体政策づくり 遠藤 宏一 自治体研究社 2010年

■授業外学習

【具体的な内容】
興部町の総合戦略計画書や地域データ等につき事前に予習して頂きます。
また、毎回講義内容を復習し、次回授業時に復習課題に取り組んで頂きます。

【必要な時間】
予習・復習の時間はそれぞれ2時間を目安とします。

■その他

興部町のHP, 広報資料に事前に目を通しておいて下さい。

科目名	ジュニアスポーツ演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	佐藤 文亮、阿南 浩司

■講義の目的および概要

本講義では、小中学校期におけるスポーツを通じた体力づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修することを目指す。はじめに、身体機能の発達における身体活動・スポーツの効果に関する基本的な内容について概説を行う。次に、美咲市が主催するジュニアスポーツ教室および北海道体育協会のジュニアスポーツ活動に参加し、演習形式で学修する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

概説は講義形式で行い、フィールドワークは「協定等に基づく外部機関と連携した課題解決型授業」を演習形式で行う。本科目は集中講義である。本講義は、運動生理学、発育発達領域およびバイオメカニクスを専門とし、研究の実績を有する教員が担当する。担当者は地域でのスポーツレッスンおよび体力づくりに関する企画に参画した経験を有することから、学生とともに地域と共同開催するジュニアスポーツ・イベントに参画し、フィールドワーク形式で学修する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①ガイダンス・・・ジュニアスポーツ演習の授業の進め方と意義について解説する。
- ②身体構造の発育・・・形態の発育と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
- ③身体機能の発達（1）・・・感覚、知覚および認知の情報処理系の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
- ④身体機能の発達（2）・・・運動制御系の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
- ⑤身体機能の発達（3）・・・筋機能の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
- ⑥身体機能の発達（4）・・・呼吸循環機能の発達と、身体活動・スポーツによる効果について概説する。
- ⑦美咲市ジュニアスポーツ教室（1）・・・高速度カメラを使用して、ジュニアスポーツ教室での競技フォームの測定を行う。
- ⑧美咲市ジュニアスポーツ教室（2）・・・競技フォームの測定結果をもとに参加者・指導者に解説を行う。
- ⑨美咲市ジュニアスポーツ教室（3）・・・筋電計を利用して、競技時の筋活動の様相について測定を行う。
- ⑩美咲市ジュニアスポーツ教室（4）・・・競技時の筋活動の様相の測定結果をもとに参加者・指導者に解説を行う。
- ⑪北海道スポーツ協会とのジュニアスポーツ活動（1）・・・筋電計および床反力計を使用して、競技実施に関わるバランス機能の測定を行う。
- ⑫北海道スポーツ協会とのジュニアスポーツ活動（2）・・・バランス機能の測定結果をもとに参加者・指導者に解説を行う。
- ⑬北海道スポーツ協会とのジュニアスポーツ活動（3）・・・超音波計を使用して、競技実施に関わる筋機能の測定を行う。
- ⑭北海道スポーツ協会とのジュニアスポーツ活動（4）・・・筋機能の測定結果をもとに参加者・指導者に解説を行う。
- ⑮まとめ・・・授業全体の総括を行う。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

小中学校期におけるスポーツを通じた身体機能の発達を理解し、フィールドワークを通じて体力づくりの指導法について修得する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力」に基づき、子どもに対するスポーツ指導の高い実践能力を身につける。

■成績評価基準と方法

方法：フィールドワークでの取り組み状況（40%）、レポート（60%）
基準：作成された資料の構成と論理性を評価する。また、フィールドワークでの課題理解・解釈の正確さおよびグループワークでの発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】【参考文献】

テキスト：適宜、紹介する。
参考文献：適宜、紹介する。

■授業外学習

小中学校期におけるスポーツを通じた体力づくりについて、広く見聞を広め、コーチング特論や運動技術演習をはじめとする講義や演習を積極的に受講すること。毎時間、小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。これらをつまみ、事前および事後学習には、それぞれ、120分程度の時間を要する。

■その他

状況によってはオンラインでの授業を実施することもある。

科目名	高齢者スポーツ演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	国田 賢治、後藤 ゆり

■講義の目的および概要

本演習の目的は、高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修することである。はじめに、身体機能の老化と運動効果に関する基本的な内容について概説を行う。次に、高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例について解説する。さらには、清田区や厚別区にある高齢者運動実践活動に参加し、演習形式で学修する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

概説は講義形式で行い、フィールドワーク活動は演習形式で行う。本科目は集中講義である。本講義は、それぞれ、運動生理学や健康科学を専門とし、健康教育の実績を有する教員が担当する。高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①ガイダンス
- ②形態の老化
- ③身体機能の老化 (1) 姿勢制御と随意運動
- ④身体機能の老化 (2) 運動機能とトレーニング
- ⑤高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例 (1)
- ⑥高齢者のスポーツ・運動を通じた健康づくりの北海道での実践例 (2)
- ⑦高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定 (1) 清田区での事前準備
- ⑧高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定 (2) 清田区での実施
- ⑨高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定 (3) 清田区での指導実施
- ⑩高齢者ウォーキング実施会での心拍数の測定 (4) 清田区での事後指導
- ⑪高齢者健康づくり教室 (1) 厚別区での事前準備
- ⑫高齢者健康づくり教室 (2) 厚別区での健康づくり教室参加
- ⑬高齢者健康づくり教室 (3) 厚別区での健康づくり指導実施
- ⑭高齢者健康づくり教室 (4) 厚別区での事後指導
- ⑮まとめ①

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

高齢者の健康づくり実践法を、地域連携課題事業を通じて修得する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力」に基づき、高齢者におけるスポーツおよび健康運動を通じた体力づくりについて、地域と大学との連携事業を活用して学修し、スポーツ健康指導の高い実践能力を養成する。

■成績評価基準と方法

方法：作成された資料の構成と論理性を評価する。また、フィールドワークでの課題理解・解釈の正確さおよびグループワークでの発言などを総合的に評価する。
基準：フィールドワークでの取り組み状況 (40%)、レポート (60%)

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

高齢者におけるスポーツを通じた健康づくりについて、広く見聞を広め、関連する講義や演習を積極的に受講すること。あらかじめテキストや関連図書等を読んでおくこと。毎時間、小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。これらをふまえ、事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	身体運動機能特論
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・講義
担当者	国田 賢治

■講義の目的および概要

本講義の目的は、以下の5点である；①身体の構造や生理学の知見をもとに、運動力学の知見もふまえて身体運動時の運動機能を体系的に理解させる。②神経系・筋系に焦点を当て、最新の研究動向や研究成果等もふまえて概説し、理解させる。③ニューロン、感覚、運動の神経機構について解説するとともに、立位姿勢、歩行、打動作、蹴動作、跳動作および投動作の運動機能について解説する。④身体運動機能を身体の構造、生理学および運動力学の観点をもとに、体系的に理解する能力を習得させる。⑤身体運動機能の観点をふまえて、日常生活やスポーツ場面のスポーツ健康指導を実践する応用能力を習得させる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本講義では、パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。授業におけるプレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本講義は、運動生理学の研究を遂行してきた実務経験のある教員が、身体の構造、生理学、運動力学の知見をふまえて身体運動時の運動機能を体系的に理解させる講義を実施する。具体的には、立位姿勢、歩行、打動作、蹴動作、跳動作および投動作の運動機能に関する内容を明確に理解できる講義を実施する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①身体運動機能
- ②感覚（視覚・聴覚・体性感覚）
- ③運動の神経制御Ⅰ（ニューロン）
- ④運動の神経制御Ⅱ（中枢神経系）
- ⑤姿勢と歩行の制御機構
- ⑥神経系・筋系へのトレーニング効果
- ⑦神経機能の老化とトレーニング
- ⑧運動技能と神経調節
- ⑨立位姿勢保持のバイオメカニクス
- ⑩歩行・走行動作のバイオメカニクス
- ⑪打動作の運動機能
- ⑫蹴動作の運動機能
- ⑬跳動作の運動機能
- ⑭投動作の運動機能
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

身体運動機能を身体の構造、生理学および力学の観点から体系的に理解できる。さらに、日常生活やスポーツ場面のスポーツ健康指導を身体運動機能の観点をふまえて、自らその知識を応用できるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」に基づき、身体運動機能を身体の構造、生理学および力学の観点から体系的に理解できる講義を実施する。さらに、ここで修得した高度な専門知識をもとに、スポーツ健康指導の高い実践能力を養成する。

■成績評価基準と方法

方法：レポートによる評価（60%）、授業への取り組み状況（40%）
基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

藤原 勝夫 編著:姿勢制御の神経生理機構. 杏林書院.

【参考文献】

Rosenbaum DA: Human motor control. Elsevier

■授業外学習

【具体的な内容】

身体運動機能を身体の構造、生理学および力学の観点から体系的に授業を実施する。
あらかじめテキストや関連図書等を読んでおくこと。関係する資料検索・收拾を行い、
学習の準備をすること。毎時間、小レポートを課す。

【必要な時間】

事前および事後学習には、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	人体構造学特論
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・講義
担当者	樋口 善英

■講義の目的および概要

人体の構造と機能を体系的に理解することを目的とします。特に身体運動に関わる神経筋骨格系、呼吸循環器系、消化泌尿生殖系の（解剖学的）構造と（生理学的）機能について学修し、形態に基づく動作の成り立ちから人体の立体的かつ流動体としてイメージできるようにします。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

医学部解剖学教室の研究員、大学病院の臨床現場、スポーツ指導の医科学スタッフとしての実務経験を豊富にもつ教員が、有資格者としての必要な知識と技術をスライドを用いて講義します。
やむを得ない事情で対面形式の授業が展開できない場合は、オンライン形式とすることがあります。

【課題に対するフィードバックの方法】

身近にある身体の不思議や疑問などを題材に、人体の構造と機能について理解できるよう工夫します。

■授業計画

- ①人体構造学概論（活動機能構造連関とは）
- ②機能解剖学Ⅰ（肩甲帯の機能解剖学）
- ③機能解剖学Ⅱ（上肢帯の機能解剖学）
- ④機能解剖学Ⅲ（骨盤帯の機能解剖学）
- ⑤機能解剖学Ⅳ（下肢帯の機能解剖学）
- ⑥機能解剖学Ⅴ（脳脊髄の機能解剖学）
- ⑦機能解剖学Ⅵ（機能解剖学のまとめ）
- ⑧解剖生理学Ⅰ（細胞と組織の解剖生理学）
- ⑨解剖生理学Ⅱ（呼吸器系の解剖生理学）
- ⑩解剖生理学Ⅲ（循環器系の解剖生理学）
- ⑪解剖生理学Ⅳ（消化吸収系の解剖生理学）
- ⑫解剖生理学Ⅴ（泌尿生殖系の解剖生理学）
- ⑬解剖生理学Ⅵ（解剖生理学のまとめ）
- ⑭人体構造学総論（まとめ）
- ⑮期末試験

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ①人体の基礎的な構造と機能について説明できるようになる。
- ②特に形態に基づく動作の成り立ちにつながる知識を理解する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「各専門領域において高度な専門知識、研究能力、技能を身に付けた学生学位を授与する」に基づき人体の構造と機能の知識が必要不可欠です。

■成績評価基準と方法

期末試験：60%

授業内容確認レポートなど提出：40%

■テキスト・参考文献

【テキスト】

からだのしくみ事典 浅野伍朗 監修

【参考文献】

その他、講義中に適時紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

医学の基礎的知識を必要とするので事前に医学用語等を学習する。
事後は各系統別の構造と機能について復習する。

【必要な時間】

2時間

■その他

人体の構造と機能についての基礎知識が必要です。

科目名	健康社会学特論
開講期・単位	1年 春学期・必修 2単位・講義
担当者	後藤 ゆり

■講義の目的および概要

社会の変化に伴い、人々の健康に関する考え方も大きく変わってきている。本講義では、健康の定義やヘルスプロモーションの考え方について理解を深め、健康に影響を与える社会的要因について、公衆衛生的な観点も含め解説をおこなう。また近年、わが国でも社会的な格差が問題になっていることをふまえ、健康と社会に関する指標や事例を関連付けて検討する。身近な地域の健康問題を発見・検討し、地域の人々と連携して問題を分析・改善できるようにする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

主として講義形式で行う。また、テーマによってディスカッション・データ分析・事例検討を行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。また、各自の課題をテーマにディスカッション・事例検討を行う。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②WHOの健康の定義
- ③健康とは？
- ④ヘルスプロモーション
- ⑤身体組成・身体機能と健康
- ⑥ライフスタイルと健康
- ⑦生活習慣病
- ⑧生活習慣病と予防施策
- ⑨感染症
- ⑩感染症と予防施策
- ⑪社会と健康
- ⑫社会経済的格差と健康
- ⑬社会的不平等と健康
- ⑭政治と健康
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

健康についての定義・考え方を理解する。また、健康に関連する要因についてデータ・資料に基づき考察することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」に基づき、健康と社会の関連や地域における健康づくりについて、スポーツ健康指導の知識と技術を修得する。

■成績評価基準と方法

基準：講義内での提出物（30%）、発表（30%）、レポート（40%）
方法：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【参考文献】

- ・玉城英彦著；社会が病気をつくる－「持続可能な未来」のために。角川学芸出版，2010
- ・イチロー・カワチ著；命の格差は止められるのか。小学館，2018

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習：毎回の講義テーマに関連する健康・社会に関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。
事後学習：講義のテーマごとに、毎回小レポートを課す。

【必要な時間】

事前および事後学習の目安は2時間程度とする。

■その他

科目名	スポーツ栄養学特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	小松 信隆

■講義の目的および概要

アスリートのパフォーマンスの向上や健康維持・増進における栄養の役割について、栄養学、生化学、生理学の観点から学ぶ。スポーツ現場や健康維持・増進、それぞれにおいて必要な食事摂取の内容やタイミング、消化吸収や代謝、ホルモン分泌について学び、具体的な栄養管理方法について考察できるようになる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】
講義、実習およびグループワーク

【課題に対するフィードバックの方法】
講義内での解説

■授業計画

- ① 栄養学の基礎
- ② たんぱく質の消化吸収・代謝
- ③ 脂質の消化吸収・代謝
- ④ 糖質の消化吸収・代謝
- ⑤ ビタミン摂取の意義
- ⑥ ミネラル摂取の意義
- ⑦ 水分補給
- ⑧ 栄養素とホルモン分泌
- ⑨ 食事摂取のタイミング
- ⑩ 栄養コンディショニング
- ⑪ リカバリーと栄養
- ⑫ 栄養アセスメント（身体組成・生化学検査）
- ⑬ 栄養・運動療法（代謝性疾患・循環器疾患）
- ⑭ 調理実習（エネルギー補給メニュー）
- ⑮ 調理実習（リカバリーメニュー）

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】
スポーツ現場や健康維持・増進における栄養の意義について理解し、それぞれのステージに適切な栄養摂取方法について具体的に考えることができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】
① スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識
② スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験値
(DP1)【専門知識・技能を活用する力】
(DP5)【能動的に学び続ける力】

■成績評価基準と方法

方法：レポートによる評価（60%）、授業への取り組み状況（40%）
基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】
適宜、紹介する。

【参考文献】
樋口 満（編著）、新版コンディショニングのスポーツ栄養学、市村出版
小林修平・樋口 満（編著）、アスリートのための栄養・食事ガイド、監修者（財）日本体育協会スポーツ医・科学委員会、第一出版
新版生涯スポーツと運動の科学、侘美 靖・花井篤子編、市村出版

■授業外学習

【具体的な内容】
授業計画に沿って予習および復習としてのレポート作成

【必要な時間】
予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	健康運動学特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	大塚 吉則

■講義の目的および概要

豊かで活力ある社会を実現するためには栄養、運動、休養のバランスの取れた健康的な生活習慣の確立を図ることが必要である。その実践の場としては、豊かな自然環境の中で積極的な健康づくりを実践できる「健康保養地」が適切であり、そのあり方、健康づくりの方策などを学ぶ。加えて人体生理・栄養学の基礎的知識の習得を目標とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

教室内での講義および演習形式とする。

【課題に対するフィードバックの方法】

毎回レポートを課す。次回の講義に、レポートの内容についてディスカッションを行う。

■授業計画

第1回：健康保養地の特性について概説する。
第2回：水中運動の特徴について概説する。
第3回～5回：健康保養地での健康づくりの実践に関して、文献を読みながら、ディスカッションを行う。
第6回：生活習慣病、特に糖尿病・脂質異常症・高血圧の成因・治療における、運動・栄養学的アプローチについて概説する。
第7回～10回：第6回の講義に基づいて、文献を読みながらディスカッション。
第11回：時間栄養学について概説する。
第12回～第14回：時間栄養学に関する文献を読みながらディスカッション。
第15回：まとめ・・・授業全体の総括を行う。

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

スポーツ健康分野の現状を知り、問題点を認識することができる。
生活習慣病の成り立ちや、特に糖尿病や高脂血症などに対する食事・運動療法について理解できる。さらに、食事・運動療法実践の場としての「健康保養地」の意義について理解できる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康分野に関する基礎的知識と技能の科学的視点からの理解およびそれを基にした専門知識、技能の修得」および「スポーツ健康分野の課題分析力の修得」に繋がるスポーツ健康分野の現状を認識することに関連する。

■成績評価基準と方法

方法：毎回レポートを提出（30%）、期末レポート（50%）、授業への取り組み状況（20%）

基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、レポートの構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

適宜参考資料を配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】

科目に関連する学部学科行事を実施した際は、到達目標に関するレポートを行う場合がある。

講義予定の項目について、事前に予習しておくこと。

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

課題提出期限を守ること。

科目名	運動発達特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	佐藤 文亮

■講義の目的および概要

本講義では、乳幼児から高齢者に至るまでの人間行動の発達・加齢に関する仕組みを、主に生理学的、バイオメカニクスの観点から観察し、理解することを目的とする。ヒトの加齢発達に伴う、形態、体力、感覚・知覚・認知機能等の変化について解説するとともに、それらに関する測定・評価法についても、最近の研究成果を織り交ぜながら紹介する。また、それらの発達の变化に影響を及ぼす環境・文化的要因、トレーニングについても言及する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学修を目指す。本講義は、運動生理学およびバイオメカニクスの研究を遂行した実績を有する教員が、専門領域に加え、運動発達および高齢者に関する研究実績および実習事例を題材に実施する。進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解し、発育・発達における遊びやスポーツの意義を深く理解できる講義を実施する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①子どもの年齢発達、遊び、および環境
- ②形態の発育
- ③筋の発達
- ④呼吸循環器系の発達
- ⑤神経系の発達 1 (胎児期と新生児期)
- ⑥神経系の発達 2 (幼児期から児童期)
- ⑦神経系の発達 3 (青年期から成人期)
- ⑧運動行動の発達 1 (胎児期と新生児期)
- ⑨運動行動の発達 2 (幼児期から児童期)
- ⑩運動行動の発達 3 (青年期から成人期)
- ⑪形態の老化
- ⑫身体諸機能の老化 1 (筋系)
- ⑬身体諸機能の老化 2 (神経系)
- ⑭身体機能の発達および運動発達に関する測定法
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解し、発育・発達における遊びやスポーツの意義を深く理解する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力」に基づき、進化、発育、成熟や発達に関する内容を明確に理解できる講義を実施する。さらに、小中学校期および高齢期におけるスポーツを通じた体力づくりおよび健康運動実践をふまえて、スポーツ健康指導の高い実践能力を養成する。

■成績評価基準と方法

方法：授業内プレゼンテーションおよびレポート（20%）、課題レポート（20%）、最終レポート課題（60%）とする。

基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、定期試験の結果、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

- ・高石昌弘著、からだの発達、大修館書店、東京。
- ・Gabbard CP, Lifelong motor development (fourth edition), Benjamin Cumming, San Francisco.
- ・藤原勝夫 他 編著、身体機能の老化と運動訓練、日本出版サービス、東京。
- ・藤原勝夫編著：運動機能解剖学。北國新聞社、石川。

■授業外学習

身体活動およびスポーツ関連の諸領域の中でも、進化、発育、成熟や発達に関する内2023(令和5)4月1日
容をメインテーマとして授業を実施する。関係する資料検索・收拾を行い、学習の準備をすること。毎時間、小レポートを課す。これらをつまみ、事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	健康体力特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	小林 秀紹

■講義の目的および概要

健康体力特論では、身体の構造や機能に関する科学的理解を基礎として、体力の維持・増進のための理論および方法について修得するよう概説する。特に、健康、体力や運動能力の測定および評価に関する運動生理学、バイオメカニクスに基づく高度な知識を習得させ、科学的根拠を有するデータ分析および知見の提示、またさらに体力を維持するための身体活動・トレーニング法やフィードバック法について解説を行う。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室での講義形式とする。プレゼンテーションソフトやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。

【課題に対するフィードバックの方法】

提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。

■授業計画

- ① ガイダンス
- ② 健康の概念
- ③ 体力の概念
- ④ 健康関連体力の測定評価
- ⑤ バイオメカニクス(1)
- ⑥ バイオメカニクス(2)
- ⑦ エネルギー代謝系
- ⑧ レジスタンストレーニング(1)
- ⑨ レジスタンストレーニング(2)
- ⑩ 持久性トレーニング(1)
- ⑪ 持久性トレーニング(2)
- ⑫ ピリオダイゼーション
- ⑬ 子どもの体力
- ⑭ 生活習慣病とトレーニング
- ⑮ まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

健康の測定評価、体力の測定評価、運動能力の測定評価について妥当性の高いテストに基づき、信頼性の保証されるデータを取得し、適切なデータ分析による結果の提示と望ましいトレーニング方法の選択ができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究を遂行する。

■成績評価基準と方法

方法：レポートによる評価（60％）、授業への取り組み状況（40％）

基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

学校、スポーツチーム等での測定実習

【必要な時間】

自学自習180分以上を要する。

■その他

科目名	人間学特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	塚本 智宏

■講義の目的および概要

子どもを対象として、人間論を考察する。
教育や福祉あるいはスポーツの指導を含めて、子どもに対して教育や指導をする場合、あるいは、単に向き合うに際して、大人は、人間としての子どもに対して、どのように接することが求められるのか。近年スポーツにおける子どもの権利論も注目されてきているが、ここではその基礎的な知見の探究をめざして「子ども人間論」の構築を試みる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

前半、教員による講義形式の部分と後半、文献や論文に基づく発表・討論の演習形式の部分とに分かれる。講義①では毎回感想レポート提出。後半では、順に全員が行う発表を通じて、発表・全員討議という形で行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で説明する。

■授業計画

- ①子どものための国際的な標準
1989年の子どもの権利条約の成立背景と研究課題
- ②西洋の子どもの歴史より 絵画資料 古文書資料と伝説・歴史 子どもの生活
- ③研究資料の収集・リストづくり・先行研究の調査
- ④ルソーの子どもの発見とコルチャックのいう子どもの発見
- ⑤子どもの誕生と子どもへの愛 赤ちゃんは一人の人格 テキスト
- ⑥大人による子どもへの軽視・軽蔑 テキスト
- ⑦子どもの力 社会的養護施設での子どもの発達と成長 テキスト
- ⑧子どもの力 社会的養護施設での子どもの自治と自己決定 テキスト
- ⑨歴史のなかの子どもと大人の尊厳(動画視聴)
- ⑩歴史のなかの子どもと大人尊厳 テキスト
- ⑪古典輪読 子どもをいかに愛するか 1-36
- ⑫古典輪読 子どもをいかに愛するか 37-67
- ⑬古典輪読 子どもをいかに愛するか 68-96
- ⑭古典輪読 子どもをいかに愛するか 97-116章
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

子ども人間学の基本的な考え方を理解し、現実生活において応用することができるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

人間に対する深い教養を備えた、少子高齢化社会におけるスポーツ健康指導者を目指す。

■成績評価基準と方法

前半の感想レポート:60%
後半の演習発表の内容と討議・発言:40%
これを目安として、総合的に評価を行う。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

塚本智宏『コルチャックと「子どもの権利」の源流』子どもの未来社2019, 1,500円

【参考文献】

生田久美子他編『「子ども人間学」という思想と実践』北樹出版

■授業外学習

【具体的な内容】

関連論文や資料の検索調査と授業後の学習の復習と整理
(何がわかり残されている課題は何かについて)

【必要な時間】

各授業の前後2時間程度

■その他

科目名	解析統計学演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	小林 秀紹

■講義の目的および概要

スポーツ健康に関する様々な情報を体系的に記述するデータ収集法および統計解析法を学ぶ。統計解析の前提となる実験計画等の適切な扱い方や統計の基本を踏まえた適切なデータ解析法の選択ができるようにする。記述統計学、推測統計学、ベイズ統計学を理解し、実験あるいは調査によって得られたデータの有効な分析方法を修得する。RやPython等のデータ解析プログラミング言語の利用と開発について学ぶ。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

解析ツールは主にExcel, SPSS, R, Pythonを利用し、種々のデータに対して多様な分析を行う。また、因子分析や共分散構造分析等の多変量解析の活用方法を学ぶ。確率、確率分布、期待値、仮説検定、推定及び分散分析など、記述統計学から推測統計学、多変量解析法の基本的な概念について概説する。これらは論文作成の一環において学修する。

【課題に対するフィードバックの方法】

提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。

■授業計画

- ① データアナリシスの概要
- ② テストの作成
- ③ データの収集
- ④ パラメトリック統計学
- ⑤ 2群および多群の平均の比較
- ⑥ 回帰分析
- ⑦ 共分散分析、時系列分析
- ⑧ ノンパラメトリック統計学
- ⑨ 主成分分析、因子分析
- ⑩ 共分散構造分析
- ⑪ ロジスティック回帰分析と項目反応理論
- ⑫ 因果推論
- ⑬ 信頼性分析
- ⑭ ベイズ統計学
- ⑮ まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

エクセル、SPSS, R, Pythonを利用したデータ分析および基礎統計解析ができるようになる。差の検定、相関関係、多変量解析等のデータ解析が一通りできるようになる。サンプリング、パワー、効果量の扱いを適切に行えるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究を遂行する。

■成績評価基準と方法

方法：実習実技（80%）、レポート（20%）

基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

岩原信九郎 「教育と心理のための推計学」 日本文化科学社
松浦義行 「数理体力学」 朝倉書店

■授業外学習

【具体的な内容】

SPSSの操作, R, Pythonでの解析プログラミング

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	コーチング特論
開講期・単位	1年 春学期・必修 2単位・講義
担当者	阿井 英二郎

■講義の目的および概要

本講義では、教育と研究を行う観点から解説するスポーツ指導・チームマネジメント・目標設定・メンタルトレーニング・コミュニケーション等のコーチングの原理原則を理解し、日常生活やスポーツ場面でスポーツ健康指導を行えるような応用力を修得することを目的とする。また、「学校体育」および「競技スポーツ」におけるコーチングの重要性と応用例および工夫点も解説する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

基本的には講義形式で行う。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。「学校体育」および「競技スポーツ」におけるコーチングの重要性と応用例および工夫点を理解できる講義を展開する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①ガイダンス(本講義の内容を概説と授業の進め方)、コーチング論の意義、目的、領域
- ②コーチング法(1):セルフリーダーシップ
- ③コーチング法(2):モチベーション
- ④コーチング法(3):コーチの役割
- ⑤コーチング法(4):個人と集団
- ⑥マインドフルネス(1):理論、事例
- ⑦マインドフルネス(2):技法
- ⑧マインドフルネス(3):実践
- ⑨二次元気分尺度(1):理論、事例
- ⑩二次元気分尺度(2):実践
- ⑪コミュニケーションスキル(1)・・・コーチングに必要なスキル・チームマネジメント
- ⑫コミュニケーションスキル(3)・・・問題解決
- ⑬コミュニケーションスキル(4)・・・応用
- ⑭スポーツコーチングにおけるアンガーマネジメント
- ⑮まとめ(授業全体の総括)

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

コーチングの原理原則を理解し、日常生活やスポーツ場面でスポーツ健康指導を行えるような応用力を身修得し、実践できることを目指す。また、「学校体育」および「競技スポーツ」においてもコーチングの重要性を理解し、応用と工夫ができる指導力を身につけることを目指す。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- ①スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識
- ②スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知
- ③子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力
- ④研究テーマを考え、研究を行う一連の過程で培われる能力を身に着ける。

■成績評価基準と方法

方法:最終レポート(60%)、授業レポート(40%)

基準:授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】【必要な時間】

コーチングの原理原則を理解し、習得するための授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う。これらをふまえ、事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	健康教育特論
開講期・単位	1年 秋学期・必修 2単位・講義
担当者	後藤 ゆり

■講義の目的および概要

人々が健康の維持・増進を図るための知識や技術を習得し、健康の維持・増進に必要な意思決定ができるようになることをめざす健康教育の考え方や健康教育活動の実践について理解することを目的とする。始めに、健康教育の理念や歴史について概説する。次に、健康教育の企画・実施・評価、健康リテラシーの考え方やITを活用した健康教育などに関して解説する。学習の総括として、各受講者が興味を持ったテーマについて、健康教育の理論やツールを適用し、対象者および地域特性に合致した具体的な健康教育を企画し、実施・評価について検討する。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

主として講義形式で行う。また、テーマによってディスカッション・データ分析・事例検討を行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。また、各自の課題をテーマにディスカッション・事例検討を行う。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②健康教育とは
- ③健康教育の歴史
- ④健康教育における理論的背景
- ⑤健康教育の実践と評価
- ⑥健康教育における理論・実践・評価
トランスセオレティカルモデルについて
- ⑦健康教育における理論・実践・評価
プリシード・プロシードモデルについて
- ⑧ライフサイクルと健康教育
- ⑨地域社会と健康
- ⑩現代社会と健康
健康リテラシーの形成に影響を及ぼす諸要因について
- ⑪現代社会と健康
IT時代の健康教育について
- ⑫健康教育の方法・媒体やその選択
- ⑬健康教育における研究動向
- ⑭健康教育案の企画
- ⑮健康教育案の発表

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

健康教育に関する理論・方法・実践について理解し、健康教育の企画・実施・評価を行えるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」に基づき、健康教育について概要を理解し、地域における健康づくりの企画・実施・評価を行えるような実践的な知識と技術を修得する。

■成績評価基準と方法

基準：講義内での提出物（30%）、発表（30%）、レポート（40%）
方法：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【参考文献】

- ・ローレンス・W・グリーン&マーシャル・W. クロイター著・神馬征峰訳「実践ヘルスプロモーション—PRECEDE - PROCEEDモデルによる企画と評価」医学書院, 2005
- ・カレン・グランツ他編・曾根 智史他訳「健康行動と健康教育—理論、研究、実践」医学書院, 2006

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習：毎回の講義テーマに関連する健康教育に関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。

事後学習：講義のテーマごとに、毎回小レポートを課す。また、地域社会での健康教育に関する身近な出来事に興味関心を持ち、関連する資料などを読んで理解すること。

【必要な時間】

事前および事後学習の目安は2時間程度とする。

■その他

科目名	保健体育科教育特論
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・講義
担当者	亀崎 路子、安田 純輝

■講義の目的および概要

本科目は、保健科教育学及び体育科教育学に関する研究領域をカリキュラム論、教授・学習指導論、教師教育論ならびに研究方法論の観点から理解する。また、本科目では、合理的な学習指導計画の立案ならびに保健体育科の授業実践の在り方について、多角的かつ批判的な視点から検討を試みる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

本科目は、保健科教育学（亀崎）、体育科教育学（安田）のオムニバス形式で展開する。

本科目は、講義形式を中心に展開するが、グループワークや指導法の学習に際しては、実技やフィールドワークを交えた演習形式による展開を適宜取り入れる。本科目は、保健体育科教育学に関する研究の遂行実績を有する教員が担当し、実際の保健体育科の授業場面を想定した中で指導者として相応しい資質を体験的に身に付けるとともにその評価方法についても学修する。

やむを得ない事情で対面形式の授業が展開できない場合は、オンライン形式とすることがある。

【課題に対するフィードバックの方法】

本科目の課題は、eラーニングシステム（manaba）を活用して提示し、授業内でフィードバックと解説を行う。また、授業外での本科目に関する質問は、個別対応とする。

■授業計画

- ①保健体育科教育学的視座と教育研究
- ②体育・スポーツと学校
- ③実践的な体験授業の取組とその課題
- ④授業論
- ⑤授業研究
- ⑥授業分析
- ⑦研究授業
- ⑧授業分析の観点と評価
- ⑨健康教育と学習指導
- ⑩体験学習と学習指導
- ⑪健康教育と学習指導
- ⑫保健体育科教育における学習指導計画・学習指導案の作成
- ⑬保健体育科教育における観点別評価内容の検討
- ⑭保健体育科教育における課題レポートの作成
- ⑮総評・まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

- ①保健科教育学及び体育科教育学に関する研究領域を、カリキュラム論、教授・学習指導論、教師教育論ならびに研究方法論の観点から理解できる。
- ②合理的な学習指導計画の立案ならびに保健体育科における授業実践の在り方について、多角的かつ批判的な視点から検討することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

- (DP1) 専門知識・技能を活用する力
 (DP2) コミュニケーション能力
 (DP3) 課題を発見し、解決する力
 (DP4) 多様性の理解と協働する力
 (DP5) 能動的に学び続ける力
 (DP6) 社会に貢献する姿勢

■成績評価基準と方法

- ①リフレクション：20%
毎時間リフレクションを実施する。
実際に展開された内容と関連付けながら深く考察がなされているかを評価する。
- ②授業への取り組み：20%
ディスカッションへの参加状況を総合的に評価する。
- ③レポート：30%
授業の展開に応じてレポート課題を設ける。レポートの論理性と独創性を総合的に評価する。
- ④プレゼンテーション：30%
プレゼンテーションの実践から発表の論理性と独創性を総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説：保健体育編。東山書房。

文部科学省（2019）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説：保健体育編 体育編。東山書房。

その他，必要に応じて資料を適宜配布する。

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習では，引用・参考文献の検索・閲覧・批判的検討に取り組み，教科教育法における今日的課題の解決に向けた示唆に富む授業の展開方法ならびに研究方法論を展開できるよう準備に励むこと。

事後学習では，培った実践的知識を基に合理的な授業が展開できるよう研鑽に励むこと。

【必要な時間】

各回の予習・復習には，およそ90～120分程度を要することが想定される。

■その他

○その他

本科目では，中学校ならびに高等学校教諭専修免許（保健体育）の取得にかかる資質・能力を養う。

科目名	キャリア形成特論
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	原 一将

■講義の目的および概要

スポーツ健康指導者となるために受講生自身のキャリアについて考えを深め、キャリア形成に必要な能力を養うことを目的とします。キャリア形成に関する考え方を最新の動向をふまえて体系的に概説します。その後、スポーツ健康指導と関連するキャリア形成についての事例に対して、グループ討論、提言書作成等の演習を実施することを通して、キャリアに対する考えを深めると共に、今後のキャリア形成に必要な能力の向上を図ります。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は講義形式と、受講生主体の討論、グループワークおよび提言書の作成、プレゼンテーション等の演習形式とします。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については授業内で解説するとともにフィードバックについても授業内で行います。

■授業計画

概ね以下のテーマを扱います。

※予告なく内容が変わる場合があります。

1. オリエンテーション
2. キャリアとは
3. キャリア形成とは
4. キャリア形成とライフステージ
5. キャリア形成と実践教育
6. キャリア形成のためのポートフォリオ
7. キャリア形成と就業
8. 北海道におけるスポーツ健康指導の動向
9. スポーツ健康指導を行うために必要なキャリア
10. スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成 (1)
11. スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成 (2)
12. スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成 (3)
13. スポーツ健康指導と関連するキャリアの形成 (4)
14. プレゼンテーション
15. まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

1. キャリア形成に関する考え方を身に付け、説明できるようになります。
2. スポーツ健康指導者のキャリア形成について考えを深め説明できるようになります。
3. 自分のキャリア形成に必要な今後の行動等を理解し、実践できるようになります。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

日々変化する時代に対応すべく、自立して生きていくための生活習慣、社会人基礎力をベースとした環境適応能力を身につけます。

■成績評価基準と方法

方法：授業中の提出物（30%）、提言書の水準（40%）、プレゼンテーションの水準（30%）

基準：提言書およびプレゼンテーションは、講義で取り上げた内容だけでなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価します。

■テキスト・参考文献

【テキスト】【参考文献】

テキスト：適宜、紹介します。

参考文献：一般財団法人全国大学実務教育協会編『実践キャリア考』実教出版、2013年

■授業外学習

必要に応じて授業の冒頭に、前回の授業内容の復習課題を出題する。必ず前回の授業2023(令和5)4月1日内容を復習の上、出席してください。また、より良い提言書を作成するためには、授業時間外を活用する必要があります。

■その他

科目名	身体運動指導演習
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	国田 賢治、阿南 浩司

■講義の目的および概要

身体運動指導を通じて、パフォーマンスの向上、健康の維持・増進もしくは疾病の予防が図られる。身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法を修得させる。これら測定・分析法をもとに、身体運動機能を検討できるようになるとともに、スポーツ健康指導に応用できるようになることを目的とする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

身体運動指導と関連した測定法と分析法に関する概説と演習を組み合わせで行う。本講義は、運動生理学的研究を遂行した実績を有する教員が実施する。身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法を修得し、分析結果を活用したディスカッションを行う。また、それをスポーツ健康指導に応用できるよう、能動的学習を目指す。フィールドワーク等実践的学習の場に参加することがある。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①身体運動指導と関連した測定の概要と演習の進め方
- ②運動負荷試験（エルゴメーター）
- ③運動負荷試験（トレッドミル）
- ④歩行運動とエネルギー消費量
- ⑥血圧・体脂肪率
- ⑦筋電図1データ記録
- ⑧筋電図2データ分析
- ⑧筋血流
- ⑨脊髄反射（H波）
- ⑩脳波（感覚誘発電位と事象関連電位）
- ⑪運動誘発電位（経頭蓋磁気刺激法）
- ⑫眼球運動
- ⑬立位姿勢保持時の足圧中心位置
- ⑭上肢運動時の姿勢調節
- ⑮ふりかえり

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

身体運動指導の実践活動に役立つための身体運動機能等の測定・分析法が修得できる。これら測定・分析法をもとに、身体運動機能を検討できるようになるとともに、スポーツ健康指導に応用できるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力」に基づき、演習を通じて修得した身体運動機能等の測定・分析法をふまえ、子どもから高齢者までの様々な対象者に対する身体運動指導の高い実践能力を身につける。

■成績評価基準と方法

方法：レポートによる評価（60%）、授業への取り組み状況（40%）
基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

毎時間の授業前までには少なくとも、該当する身体機能の測定法ならびに分析法について、関連図書などを読んで理解しておくこと。毎時間、振り返り小レポートの作成を課す。これらをふまえ、事前および事後学習は、2時間を目安とする。

■その他

科目名	体力評価演習
開講期・単位	1年 秋学期・選択 2単位・演習
担当者	小林 秀紹

■講義の目的および概要

体力構成要素の測定と評価を中心に学び、その理論と手法を修得する。構成概念としての体力構成要素の計量化のプロセスを学び、体力テストの成り立ちを理解する。体力評価とバッテリーテストの関係から、妥当性および信頼性に基づくテスト選択の手順を理解する。また、実際の体力測定を通して体力の測定に関する機器の正しい扱い方を理解するとともに、体格および身体機能のデータを扱い、適切な分析方法とフィードバックの手続きを学び、効果的な体力の評価に関する能力を身につける。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

講義と演習を交互に行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

提出されたレポート課題等に対するコメントや添削によってフィードバックを行う。

■授業計画

- ①ガイダンス
- ②体力の構造と数理的解釈
- ③筋力、筋パワーの測定
- ④筋力、筋パワーの評価
- ⑤最大酸素摂取量の測定
- ⑥最大酸素摂取量の評価
- ⑦バランスの測定
- ⑧バランスの評価
- ⑨身体組成の測定
- ⑩身体組成の評価
- ⑪体力テストによる運動パフォーマンスの測定
- ⑫体力テストによる運動パフォーマンスの評価
- ⑬身体動作の測定
- ⑭身体動作の評価
- ⑮テストバッテリーの作成

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

筋力、筋パワー、最大酸素摂取量、バランス、身体組成、体力テストによる測定評価を適切に行うことができる。スポーツ等に特異的な組テストの提案をできるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究を遂行する。

■成績評価基準と方法

方法：レポート（80%）およびクイズによる評価（20%）

基準：レポートは、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているか評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する。

【参考文献】

松浦義行「数理体力学」朝倉書店

■授業外学習

【具体的な内容】

データ解析に関するプログラミング

【必要な時間】

予習・復習の時間は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	健康増進プログラム演習
開講期・単位	1年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	後藤 ゆり

■講義の目的および概要

人々の健康の維持・増進に関わる要因について理解し、地域・学校・職場などで実際に行われている健康増進プログラムの内容を学習する。また、プログラムの立案・実施・改善が行えるよう、プログラム作成に必要な理論やツールについて理解し、受講者の特性に合致した設定での具体的な健康増進プログラムを作成できるようになることを目標とする。さらに、担当教員が参画している地域高齢者の介護予防事業への参加を通し、対象者やスタッフとの関わりや地域活動と大学の連携・協働について理解を深める。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

概説は講義形式で行い、フィールドワーク活動は実習形式で行う。本講義は、地域での介護予防教室の運営に関わる実務経験のある教員が担当する。高齢化社会におけるスポーツを通じた健康づくりについて、実際の地域における介護予防活動に参加しながら実践的な学習を行う。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①オリエンテーション
- ②健康の維持・増進について
- ③健康行動の変容と理論 (1) 行動変容理論の概説
- ④健康行動の変容と理論 (2) 行動変容理論の適用
- ⑤地域における取り組み (1) 生活習慣病予防
- ⑥地域における取り組み (2) 介護予防
- ⑦学校における取り組み
- ⑧職場での取り組み
- ⑨健康増進プログラムの作成
 - (1) 各自の健康増進プログラムの概要について検討する
- ⑩健康増進プログラムの作成 (2) 対象者
- ⑪健康増進プログラムの作成 (3) 介入方法
- ⑫健康増進プログラムの作成 (4) 評価
- ⑬健康増進プログラムの作成 (5) プログラムの改善
- ⑭健康増進プログラムの作成 (6) 広報などについて
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

健康について基礎的な定義・考え方を理解する。また、健康の維持・増進に関連する要因についてデータ・資料に基づき考察することができる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」に基づき、地域における健康づくり活動を実施し、地域集団との連携を持ちながらプログラムの改善を行える知識と技術を修得する。

■成績評価基準と方法

基準：講義内での提出物（30%）、発表（30%）、レポート（40%）
方法：レポートおよび発表は、講義で取り上げた内容だけではなく、自身で調べた内容なども盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【参考文献】

- ・石井敏弘他編「ケースメソッドで学ぶヘルスプロモーションの政策開発—政策化・施策化のセンスと技術」ライフ・サイエンス・センター、2001
- ・ローレンス・W・グリーン&マーシャル・W. クロイター著・神馬征峰訳「実践ヘルスプロモーション—PRECEDE - PROCEEDモデルによる企画と評価」医学書院、2005

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習：毎回の講義テーマに関連する図書などを読んで理解し、講義内での発表の準備を行う。

事後学習：講義のテーマごとに、毎回小レポートを課す。また、フィールドワークごとに実習レポートを課す。

【必要な時間】

事前および事後学習の目安は2時間程度とする。

■その他

科目名	スポーツ健康テーマ演習 I
開講期・単位	1年 春秋学期・必修 2単位・演習
担当者	国田 賢治、塚本 智宏、小林 秀紹、後藤 ゆり、樋口 善英、阿南 浩司、阿井 英二郎

■講義の目的および概要

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの教育研究領域を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に呈示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（1-2回目担当：国田、3-4回目担当：樋口、5-6回目担当：小林、7-8回目担当：塚本、9-10回目担当：後藤、11-12回目担当：阿井、13-14回目担当：阿南、15回目担当：国田）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

【課題に対するフィードバックの方法】

授業内で解説する。

■授業計画

- ①運動制御機構（1） 姿勢制御
- ②運動制御機構（2） 眼球運動制御
- ③人体構造（1）
- ④人体構造（2）
- ⑤体カトレーニング（1）
- ⑥体カトレーニング（2）
- ⑦人間学（1） 子どもも大人と同じ人間
- ⑧人間学（2） 子どもと大人は異なる人間
- ⑨健康社会（1） 健康とはどのような状態なのか？
- ⑩健康社会（2） 健康と社会の関連について
- ⑪コーチング（1） コーチング法
- ⑫コーチング（2） マインドフルネス
- ⑬コーチング（3） 投球動作
- ⑭コーチング（4） 運動学習
- ⑮全体の振り返り

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの研究動向を理解する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究のテーマの着想につなげる。

■成績評価基準と方法

方法：授業への取り組み状況（40%）、レポート（60%）

基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

【参考文献】

適宜提示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う

【必要な時間】

事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	スポーツ健康テーマ演習Ⅱ
開講期・単位	1年 春秋学期・必修 2単位・演習
担当者	国田 賢治、塚本 智宏、小林 秀紹、後藤 ゆり、樋口 善英、阿南 浩司、阿井 英二郎

■講義の目的および概要

講義の目的および概要

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの最新知見を解説する。研究指導者それぞれの研究領域の概要について解説する。これを通じて、課題研究のテーマの着想につなげる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室での講義形式とする。パワーポイントやプリントを用いるなどして資料を視覚的に提示する。プレゼンテーションとディスカッションを通じて、能動的学習を目指す。本科目はオムニバス方式で実施する（1-2回目担当：国田、3-4回目担当：樋口、5-6回目担当：小林、7-8回目担当：塚本、9-10回目担当：後藤、11-12回目担当：阿井、13-14回目担当：阿南、15回目担当：国田）。担当者は、運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの専門分野を有する。それぞれの専門分野を通じて、スポーツ健康テーマの講義を展開する。必要に応じて、オンライン形式での展開を行うことがある。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①運動制御機構（1）
- ②運動制御機構（2）
- ③人体構造（1）
- ④人体構造（2）
- ⑤体カトレーニング（1）
- ⑥体カトレーニング（2）
- ⑦人間学（1）
- ⑧人間学（2）
- ⑨健康社会（1）
- ⑩健康社会（2）
- ⑪コーチング（1）
- ⑫コーチング（2）
- ⑬コーチング（3）
- ⑭コーチング（4）
- ⑮全体の振り返り

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングの最新知見を理解する。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究のテーマの着想につなげる。

■成績評価基準と方法

方法：授業への取り組み状況（40%）、レポート（60%）

基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

テキスト：授業の初回に指定する。

参考文献：授業の初回に指定する。

適宜配布する

■授業外学習

【具体的な内容】

運動生理学、人体解剖学、トレーニング科学、測定評価、人間学、健康社会、コーチングについて授業を実施する。関連する書籍や文献等で補足的に学習する。毎時間、小レポートを課すことで各授業の振り返りを行う

【必要な時間】

事前および事後学習は、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	健康施策特論
開講期・単位	2年 秋学期・選択 2単位・講義
担当者	桑原 ゆみ

■講義の目的および概要

本講義の目的は、施策の基本を理解し、未来に向けた持続可能な健康施策の提案能力を身につけることである。

この目的を達成するために本講義では、人々の健康に影響を及ぼす施策の基本を理解する。また、健康施策の立案・実施・評価の実際を理解し、プロセスとして展開していく必要性を検討する。さらに、未来に向けた持続可能な健康施策の立案を行い、具体的な提言を試みる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

施策の基本と健康施策の実際例について、授業担当者の教育・研究実践および自治体健康施策委員としての実務経験に基づいて講義する。

我が国の健康施策について院生がプレゼンテーションし、授業でのディスカッションを行い、理解を深める。

健康施策のプロセスとして理解するために、院生が興味関心のある施策の立案を行い、ディスカッション、教員や院生同士のフィードバックを得て、アクティブラーニングを活用する。

【課題に対するフィードバックの方法】

院生のプレゼンテーション内容および提出する課題についてフィードバックを講義時間に行う。

■授業計画

- ①健康施策特論の概説
- ②健康施策の基本的理解：政策の構造
- ③健康施策に関連する理論：ヘルスプロモーション、行動変容理論、エンパワメントと参加
- ④我が国における健康施策の動向：保健・医療・福祉システム
- ⑤健康施策の具体例
- ⑥健康施策のプロセス（立案・実施・評価）の基本的理解
- ⑦健康施策のプロセスの具体例
- ⑧持続可能な健康施策の立案：テーマの検討
- ⑨持続可能な健康施策の立案：目的、対象
- ⑩持続可能な健康施策の立案：実施内容
- ⑪持続可能な健康施策の立案：評価
- ⑫持続可能な健康施策の立案：プレゼンテーション
- ⑬持続可能な健康施策の立案：ディスカッション
- ⑭持続可能な健康施策の検討
- ⑮持続可能な健康施策への具体的提言の検討

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

人々の健康に影響を及ぼす施策の基本を知り、説明できる。また、健康施策を立案・実施・評価のプロセスで説明できる。さらに、未来に向けた持続可能な健康施策の立案を行い、具体的な提言ができるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

人々の健康に影響を及ぼす健康施策の理解は、スポーツ健康指導研究科スポーツ健康指導先行のディプロマ・ポリシーの「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」の一つに関連する学習である。

■成績評価基準と方法

成績評価基準：授業における課題の理解・解釈の正確さ、作成した資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションのわかりやすさ、ディスカッションでの論理性と検討の深まりなどを総合的に評価する。

成績評価方法：プレゼンテーション（40%）、ディスカッション（40%）、課題レポート（20%）

■テキスト・参考文献

【テキスト】

なし

【参考文献】

随時提示する。

■授業外学習

【具体的な内容】

事前学習：授業計画に記載されている課題について自己学習し、プレゼンテーション資料を作成し、自らの意見をまとめる。

事後学習：授業内容を振り返り、事前学習で不足していた点や授業でのディスカッションやコメントを受けさらに検討したい内容について、学習を深める。その結果をまとめる。

【必要な時間】

事前学習：2時間

事後学習：2時間

■その他

科目名	運動技術演習
開講期・単位	2年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	国田 賢治、阿南 浩司

■講義の目的および概要

本演習では、「①生理学、解剖学、運動学等の知見にもとづく運動技術の理論を修得させるとともに、その技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法を修得させる。」、②「分析結果を活用して、自己の運動技能獲得とスポーツ指導につなげるようにする。」ことを目的とする。担当教員が行ってきたスポーツ種目を活用する。その種目は、卓球、野球である。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

運動技術理解のための概説、演習および討論を組み合わせて行う。本演習は、卓球および野球における競技経験を有し、かつ運動生理学的研究の実績を有する教員が実施する。本演習は2名で実施するが、1-8回目および15回目を国田が主に担当し、9-14回目は、阿南が主に担当する。各運動技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法を修得し、分析結果を活用して、自己の運動技能獲得とスポーツ指導につなげるように、能動的な学修を目指す。フィールドワーク等実践的学習の場に参加することがある。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①運動技術の測定史
- ②運動基礎技術（立位保持姿勢）の生理学的・バイオメカニクスの測定
- ③運動基礎技術（立位保持姿勢）の生理学的・バイオメカニクスの分析
- ④運動基礎技術（歩行）の生理学的・バイオメカニクスの測定
- ⑤運動基礎技術（歩行）の生理学的・バイオメカニクスの分析
- ⑥卓球技術（フォアハンドストローク）の生理学的・バイオメカニクスの測定
- ⑦卓球技術（フォアハンドストローク）の生理学的・バイオメカニクスの分析
- ⑧卓球技術の分析結果の考察
- ⑨野球技術（投）の測定
- ⑩野球技術（投）の分析
- ⑪野球技術（打）の測定
- ⑫野球技術（打）の分析
- ⑬野球技術（投）の分析結果の考察
- ⑭野球技術（打）の分析結果の考察
- ⑮まとめ

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

運動技術の生理学的、バイオメカニクスの測定・分析法が修得できる。分析結果と生理学、解剖学、運動学等の知見にもとづいて、自己の運動技能獲得につなげるとともに、スポーツ指導に応用できるようになる。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「子どもおよび高齢者を対象としたスポーツ健康指導の実践能力」に基づき、子ども、生徒および高齢者など様々な対象者に対する運動技術指導の高い実践能力を身につける。

■成績評価基準と方法

方法：最終レポートによる評価（60%）、授業レポート（40%）

基準：授業における課題の内容に対する理解・解釈の正確さ、作成された資料の構成と論理性、授業におけるプレゼンテーションとディスカッションにおける発言などを総合的に評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】【参考文献】

適宜、紹介する。

■授業外学習

【具体的な内容】

毎時間の授業前までには少なくとも、該当する身体機能の測定法ならびに分析法について、関連図書などを読んで理解しておくこと。毎時間の小レポート課題に対応することで各授業の振り返りを行うこと。

【必要な時間】

上記をふまえ、事前および事後学習には、それぞれ、120分程度の時間を要する。

■その他

科目名	キャリア形成演習
開講期・単位	2年 春学期・選択 2単位・演習
担当者	原 一将

■講義の目的および概要

キャリアについて視野を広げ、今後のキャリア形成に役立つ能力を向上させることを目的とし、北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズ調査を、地域連携事業にて行います。この過程を通じて、スポーツ健康指導に関するキャリアについての気づきを得て視野を広げると共に、キャリアを継続的に形成していく上で役立つチームや業務のマネジメント能力、文書作成能力およびプレゼンテーション能力の向上を図ります。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

スポーツ健康指導と関連する社会的ニーズに関する調査とその基礎的分析方法を学修します。その後、北海道体育協会との調査に関する地域連携事業をもとに、データ集計やグラフの作成、報告書作成やプレゼンテーションを行います。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については授業内で解説するとともにフィードバックについても授業内で行います。

■授業計画

概ね以下のテーマを扱います。

※予告なく内容が変わる場合もあります。

1. 問題意識の設定と資料収集法～ブレインストーミングおよび資料収集法を理解する。
2. 仮説と質問項目の作成～調査票を作成するための仮説の立て方と質問項目の作成法を理解する。
3. 調査票の作成～予備調査用の質問紙を作成する。
4. プレテストの実施～受講生の身近な人々を対象に予備調査を実施する。
5. 調査企画書の作成～調査協力の依頼状と調査企画書を作成する。
6. 北海道体育協会との連携事業（1）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズについての調査の打ち合わせを、北海道体育協会と行う。
7. 北海道体育協会との連携事業（2）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズについての調査票を作成する。
8. 北海道体育協会との連携事業（3）～北海道体育協会と打ち合わせを行い、社会的ニーズについての調査票を完成させる。
9. 北海道体育協会との連携事業（4）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズについての調査を行う。
10. 調査内容に関するデータ集計およびグラフ作成～調査内容に関するデータを集計し、かつグラフの作成を行い、調査結果を可視化する。
11. 解析（1）～相関係数、分散分析、回帰分析を通して、データを解析する。
12. 解析（2）～重回帰分析、主成分分析、クラスター分析、ロジスティック回帰分析、因子分析等を活用して、データを解析する。
13. 報告書の作成（1）～解析結果の整理および執筆分担の確認を行う。
14. 報告書の作成（2）～北海道におけるスポーツ健康指導と関連する社会的ニーズの報告書を完成させる。
15. プレゼンテーション

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

1. 自分自身のキャリアについて、視野を広げて考えられるようになります。
2. 基礎的な調査とその解析方法を身に付け、実施できるようになります。
3. マネジメント能力、文書作成能力、プレゼンテーション能力を向上させ、実践できるようになります。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

日々変化する時代に対応すべく、自立して生きていくための生活習慣、社会人基礎力をベースとした環境適応能力を身につけます。

■成績評価基準と方法

基準：報告書は、自身で調べた内容が盛り込まれているかを評価します。 2023(令和5)4月1日
方法：授業中の提出物（35%）と、報告書の水準（30%）およびプレゼンテーション
の水準（35%）を評価します。

■テキスト・参考文献

【テキスト】【参考文献】

テキスト：適宜、紹介します。

参考文献：一般財団法人全国大学実務教育協会編 『実践キャリア考』実教出版、
2013年

■授業外学習

北海道体育協会と連携した調査の準備、実施、解析、報告書の作成は授業時間外に行
う必要があります。

■その他

科目名	課題研究Ⅰ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	国田 賢治、後藤 ゆり、阿南 浩司、阿井 英二郎

■講義の目的および概要

課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ①課題研究の方針に関する討論
- ②課題研究の方針の設定
- ③関連文献の収集
- ④関連文献の資料整理
- ⑤文献リストの作成
- ⑥課題研究のテーマに関する討論（1）テーマ設定の検討
- ⑦課題研究のテーマに関する討論（2）テーマ候補の絞込み
- ⑧課題研究のテーマに関する討論（3）テーマ候補の設定
- ⑨課題研究のテーマに関する討論（4）テーマ候補の発表
- ⑩課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（1） テーマ関連の予備実験
- ⑪課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（2） テーマ関連の詳細な予備実験
- ⑫課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（3） テーマ関連のおおまかな分析
- ⑬課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験（4） テーマ関連の詳細な分析
- ⑭課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（1） プレゼンテーション準備
- ⑮課題研究のテーマに関する中間報告会の準備（2） 発表の予行練習
- ⑯課題研究のテーマに関する中間報告会

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究を遂行する。

■成績評価基準と方法

方法：授業への取り組み状況（30%）、レポート（30%）、発表（40%）
 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのビジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する

【参考文献】

適宜、紹介する

■授業外学習

関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをつまみ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	課題研究 I
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	樋口 善英

■講義の目的および概要

課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を、研究指導教員からの研究アドバイスをもとにすすめる。研究を進めていく上で必要な文献に関して、精読に努め、理論化・分析能力の向上を図る。またさらに、研究分野によっては、予備実験等をもとに記録・分析法を修得させる。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する。

■授業計画

- ① 課題研究の方針に関する討論
- ② 課題研究の方針の設定
- ③ 関連文献の収集
- ④ 関連文献の資料整理
- ⑤ 文献リストの作成
- ⑥ 課題研究のテーマに関する討論 (1) テーマ設定の検討
- ⑦ 課題研究のテーマに関する討論 (2) テーマ候補の絞込み
- ⑧ 課題研究のテーマに関する討論 (3) テーマ候補の設定
- ⑨ 課題研究のテーマに関する討論 (4) テーマ候補の発表
- ⑩ 課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験 (1) テーマ関連の予備実験
- ⑪ 課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験 (2) テーマ関連の詳細な予備実験
- ⑫ 課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験 (3) テーマ関連のおおまかな分析
- ⑬ 課題研究のテーマに関する文献抄読会や予備実験 (4) テーマ関連の詳細な分析
- ⑭ 課題研究のテーマに関する中間報告会の準備 (1) プレゼンテーション準備
- ⑮ 課題研究のテーマに関する中間報告会の準備 (2) 発表の予行練習
- ⑯ 課題研究のテーマに関する中間報告会

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究を遂行する。

■成績評価基準と方法

方法：授業への取り組み状況（30%）、レポート（30%）、発表（40%）
基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのビジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜、紹介する

【参考文献】

適宜、紹介する

■授業外学習

関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをつまみ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。

■その他

科目名	課題研究Ⅱ
開講期・単位	2年 秋学期・必修 2単位・演習
担当者	国田 賢治、後藤 ゆり、阿南 浩司、阿井 英二郎

■講義の目的および概要

課題研究Ⅰの中間報告の内容を発展させ、課題研究論文として完成させる。論文作成を通じて、スポーツ健康領域における高度な理論と指導法を修得し、スポーツを通じた健康の維持および増進および体力の向上に寄与する能力を身につくようにする。

■講義方法/課題に対するフィードバックの方法

【講義方法】

授業形態は、主として教室か測定室での演習形式とする。文献抄読会、プレゼンテーション、ディスカッションや実験等を通じて、能動的学習を目指す。担当は、研究指導者による。運動生理学、トレーニング科学、測定評価あるいは健康社会のいずれかの専門分野を有する。それぞれの専門分野で検討を行ってきた実績のもと、課題研究を遂行する。

【課題に対するフィードバックの方法】

課題については、授業内で解説する

■授業計画

- ①課題研究Ⅰの中間報告会のふりかえり
- ②課題研究に関する討論（１）研究テーマのおおまかな遂行案の設定
- ③課題研究に関する討論（２）研究テーマの詳細な遂行案の設定
- ④課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（１） テーマ関連の実験
- ⑤課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（２） テーマ関連の詳細な実験
- ⑥課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（３） テーマ関連のおおまかな分析
- ⑦課題研究のテーマに関する文献抄読会や実験（４） テーマ関連の詳細な分析
- ⑧課題研究論文の作成（１） 骨子
- ⑨課題研究論文の作成（２） 項目立て
- ⑩課題研究論文の作成（３） 項目ごとの文献整理
- ⑪課題研究論文の作成（４） 項目ごとの文章作成
- ⑫課題研究論文の作成（５） 本文の統合・完成
- ⑬課題研究論文の改訂と課題研究のテーマに関する報告会の準備（１）プレゼンテーション準備
- ⑭課題研究のテーマに関する報告会の準備（２）発表の予行練習
- ⑮課題研究のテーマに関する報告会

■到達目標/卒業認定・学位授与の方針との関連

【到達目標】

課題研究論文作成の基盤となる、過去を知る能力、問題を設定する能力、課題を解決する能力、遂行能力および検証能力のそれぞれの向上を図る。

【卒業認定・学位授与の方針との関連】

「スポーツ健康指導者に不可欠な専門的知識」、「スポーツ健康指導者としての指導・実践能力と人間形成に関わる思考や経験知」に基づき、課題研究論文を完成させる。

■成績評価基準と方法

方法：授業への取り組み状況（20%）、レポート（40%）、発表（40%）
 基準：研究計画の遂行にあたって、課題研究論文の執筆のためのヴィジョンを有し、必要な過程を踏んでいるかを評価する。レポートおよび発表は、課題研究論文につながる内容が盛り込まれているかを評価する。

■テキスト・参考文献

【テキスト】

適宜紹介する

【参考文献】

適宜紹介する

■授業外学習

関係する資料検索・収集を行い、学修の準備をすること。毎時間、小レポート課題を課す。これらをふまえ、事前および事後学修には、それぞれ2時間を目安とする。

■その他